

NAKAOJyō SITE
TSUKADA SITE

須玉町埋蔵文化財調査報告

第 2 集

中尾城遺跡

— 中世城址と平安時代後半の住居址 —

塚田遺跡

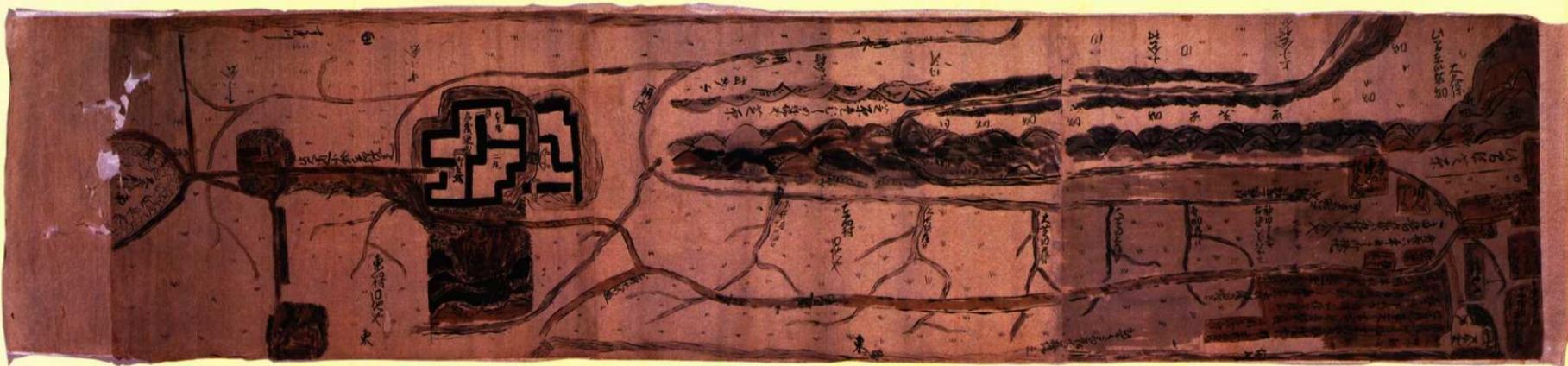
— 中世土壌群と住居址 —

県営圃場整備事業中尾3工区及び大倉4工区造成に伴う
山梨県北巨摩郡須玉町中尾城遺跡及び塚田遺跡調査報告書

1984

須玉町教育委員会

古 絵 図



序文

四季豊かな気候、風土に恵まれ長い歴史の跡を持つ須玉町は、中部山岳地帯の縄文文化から、華麗な貴族文化の平安時代を経て、武家政治の鎌倉そして南北朝から下刻上の戦国時代にいたる山梨県下の一大遺跡包蔵地であります。粗穀を蓄えた大小の倉を備えた莊園があり、近くに三官牧をひかえ、平安時代末期になって、この莊に甲斐源氏の礎を確立しました。中世になると土原を築き塹をめぐらせた館跡や、居館とは別に要害の地に山城も築きました。平素の居館と家来の屋敷は山麓に設けられ、これを根小屋と呼びました。大蔵、小倉、二日市場、御所、馬場、根小屋等々の地名、字、小字名にいにしえびとのざわめきや馬のいななきが聞えてくるようです。中央道埋蔵文化財発掘調査に伴う大豆生田遺跡の報告書が昭和51年に発刊され、昭和57年には県土地開発公社駿北地域中核工業団地造成に伴う大小久保遺跡調査報告書第一集が刊行されたのは御承知の通りであります。この度は県立圓場整備事業に伴い、中尾遺跡と塚出遺跡が発掘調査されました。本調査によって、報告書に見られるように平安時代から鎌倉、戦国時代にかけての学術的、考古学的考察の上で貴重な資料を豊富に得ることが出来ました。この報告書が単に記録保存にとどまらず、文化財研究の貴重な一資料として役立つことを願ってやみません。文末ではありますが、両遺跡の調査にあたり、山梨県教育委員会文化課をはじめ、山梨県埋蔵文化財センター、県土地改良事務所の各位より多大のご指導ご協力をいただき、深甚なる謝意を表するものであります。

また、天候にも恵まれて順調な発掘調査が出来た上に整理、報告書作成に参加していただきました須玉町の皆様に厚く御礼申上げます。

須玉町教育委員会

教育長 磯 村 茂

例　　言

- ①・本報告書は、県営圃場整備事業に伴う【中尾城遺跡】及び、【塚田遺跡】の埋蔵文化財調査報告書である。【中尾城】は、遺跡名を【中尾砦】として古類上の統一記載を行っている。調査の結果、規模等などからみて【中尾城】の遺跡名がより適切と判断し本報告書では【中尾城】として統一している。
- ②・遺跡は、山梨県北巨摩郡須玉町小倉字中尾1,008番地他【中尾城】。同須玉町大藏字塚田1,728番地他【塚田遺跡】に所在する。
- ③・試掘は、昭和57年度に、塚田遺跡を実施し中尾城は周知の遺跡のため行なわなかった。両遺跡の本調査は、昭和58年度に実施し遺物整理、報告書作成も同年におこなった。
- ④・本報告の遺物実測は、津金豊子・河手寿子・井出照子・津金義尚・津金伸二・清水仁量。トレースは津金豊子。執筆は山路・深沢・津金義尚・津金伸二・清水仁量が分担し、編集は山路が行なった。文責は山路にある。
- 中尾城の基本土層は、山梨大学（地学研究室）教授西宮克彦氏より、木製品及び、炭化材の判別は、須玉町職員小尾勝氏（山梨生物同好会）の御教示を賜わった。また、石器の石材判別は井戸尻考古館の武藤雄六、小林公明、樋口誠司の各氏より、陶器類判別は愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏、仲野泰裕氏の御教示をえた。古絵図の読みは、県考古博物館の館長嶺貝正義氏、副館長波木井朗氏の御教示をえた。
- ⑤・本調査における図面・写真・出土遺物は須玉町教育委員会が保管している。
- ⑥・発掘調査組織
- | | |
|-------|-----------|
| 調査主体 | 須玉町教育委員会 |
| 調査担当者 | 山路恭之助 |
| 調査員 | 山秋　奏（中尾城） |
| 調査補助員 | 深沢裕三 |
- ⑦・事務局
- | |
|----------|
| 須玉町教育委員会 |
| 社会教育係 |
- ⑧・発掘調査参加者
- 〔考古学専攻生〕平野　修（日本大学）　前島秀張（別府大学）　五味信吾（国学院大学）
〔一般（順不同）〕信田虎吉　堀内高徳　坂本茂富　河手寿子　中村雪江　堀内としえ
堀込静子　松田かねよ　清水隆則　清水ふさ子　清水かし子　清水正喜　清水房子　清水
三千代　奥水義人　奥水久子　青藤ちとせ　白倉唯行　花輪元治　大森正一　白倉義一
大森ももよ　花輪てる子　赤岡せい子　宮沢さつき　宮沢いさを　津金孝治　中田権三
堤音作　大森林一　山内崇　大森もと子　大森孝次　赤岡やすよ　白倉栄子　花輪ふじ子
土屋つね子　土屋えみこ　小林美代子　山田かまよ　白倉増子　白倉米子　土屋八千代
大森おさむ　堤としこ　小林一枝　土屋いつ子　大森巳重子　大森たつ子　大森勝代

土原八千代 花輪豊福 小林春美 〔学生〕 日向敏正 津金久司 津金伸二 清水仁量
川久保和夫 早川成紀 小沢智昭 鹿摩栄二 中込幸男 〔遺物整理参加者〕 津金豊子
河手寿子 井出照子 津金義尚 津金伸二 清水仁量 早川よしえ 宮沢花江 内藤貞子
矢崎たけじ 中山春子 信田虎吉 堀内高徳 中村雪江 堀内としえ 堀込静子 松田
かねよ

◎・調査協力機関及び個人

小倉園場整備委員会、大蔵園場整備委員会、県土地改良事務所、県文化課、県埋蔵文化財
センター、桂精機製作所、早野組、八起苑、町経済課 〔個人〕 鷺原祐雄 (故人)
佐野勝広 (日本考古学協会員)、岡本範之 (長板町教育委員会)、丸茂種市

目 次

卷頭図版

序文

例言

本文目次

I 調査の実施と経過	1
II 遺跡の立地と歴史的環境	1
III 中尾城遺跡	5
(1) 遺構と遺物	5
遺構の概容	5
1号住居址	6
2号住居址	8
1号掘立柱建物遺構	10
2号掘立柱建物遺構	15
3号掘立柱建物遺構	16
4号掘立柱建物遺構	21
5号掘立柱建物遺構	22
6号掘立柱建物遺構	27

7号掘立柱建物遺構	2 8
8号掘立柱建物遺構	3 3
9号掘立柱建物遺構	3 4
堀	3 7
トレンチ	4 3
縄状遺構	4 4
溝	4 5
1号井戸・2号井戸	5 0
3号井戸	5 1
堅穴遺構（1～3）	5 3
その他の遺物	5 4
石臼	5 4
(2) 占給岡	5 6
(3) まとめ	5 9
IV 塚田遺跡	6 3
(1) 遺構	6 4
遺構の概容	6 4
1号住居址	6 6
2号住居址	6 8
堅穴及びピット群	6 8
土壙群	7 3
(2) 遺物	7 4
塚田遺跡の石造物	7 4
一 五輪塔	7 4
1) 空風輪 2) 火輪 3) 水輪 4) 地輪	
二 無縫塔	8 8
五輪塔の概説	8 8
塔形と梵字	8 9
まとめ	9 0
土器類　　縄文土器　陶器	9 1～9 4
鉄器	9 4
硯　　古銭	9 5
(3) まとめ	9 6

挿 図 日 次

第1図	中尾城・塚田遺跡と周辺遺跡位置図及び標高模式図	2～3
第2図	中尾城調査区及び、遺構全体図	3～4
第3図	1号住居址出土遺物	6
第4図	1号住居址	7
第5図	2号住居址出土遺物、平面図及び断面図	8
第6図	2号住居址及び竈	9
第7図	1号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	11～12
第8図	2号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	13～14
第9図	3号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	17～18
第10図	4号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	19～20
第11図	5号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	23～24
第12図	6号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	25～26
第13図	7号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	29～30
第14図	8号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	31～32
第15図	9号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図	35～36
第16図	北堀土層図	38
第17図	北堀平面図及び東西断面図	39～40
第18図	トレンチ	41～42
第19図	堀状遺構	43
第20図	1～3号溝	45～46
第21図	6～8号溝	47～48
第22図	4～5号溝	49
第23図	1・2号井戸	50
第24図	3号井戸	51
第25図	1号竪穴遺構	52
第26図	2・3号竪穴遺構	53
第27図	石臼実測図	54
第28図	石臼説明図	55
第29図	古絵図主要部	57～58
第30図	塚田遺跡調査全体図	64
第31図	遺構配置図	65
第32図	1号住居址遺物実測図	66

第33図	1号住居址	67
第34図	竪穴及びピット群	69
第35図	土壤群、断面図	70
第36図	土壤群・2号住居址、平面図及び断面図	71~72
第37図	五輪塔・無縫塔、説明図	75
第38図	空風輪	76
第39~40図	火輪	77~78
第41~42図	水輪	80~81
第43~45図	地輪	83~85
第46図	梵字の陰刻角と輪年	89
第47図	繩文土器拓影	92
第48図	陶器	93
第49図	鉄器	93
第50図	硯	95
第51図	古錢	95

表 目 次

第1表	1号掘立柱建物遺構柱穴計測表	10
第2表	2号掘立柱建物遺構柱穴計測表	15
第3表	3号掘立柱建物遺構柱穴計測表	16
第4表	4号掘立柱建物遺構柱穴計測表	21
第5表	5号掘立柱建物遺構柱穴計測表	18
第6表	6号掘立柱建物遺構柱穴計測表	20
第7表	7号掘立柱建物遺構柱穴計測表	22
第8表	8号掘立柱建物遺構柱穴計測表	24
第9表	9号掘立柱建物遺構柱穴計測表	26
第10表	空風輪計測表	75
第11表	火輪計測表	79
第12表	水輪計測表	82
第13表	地輪計測表	86
第14表	地輪年代推定表	87

図 版 目 次

卷頭カラー 古絵図

カラー図版1 塚田遺跡出土陶器類

- 図版1 [中尾城] 遠景小手指版（西方）より
- 図版2 1. 若神子古城（西南西）より 2. 東方対岸 明野村上・神取より
- 図版3 1. 中尾城より北方 2. 中尾城より北東
- 図版4 1. 中尾城より南方 2. 中尾城より南西
- 図版5 1. 斑山廃坑（坑内） 2. 斑山廃坑（坑口）
- 図版6 丸茂種市氏蔵の写真
- 図版7 1. 1号住居址（北より） 2. 1号住居址、遺物出土状態
- 図版8 1. 2号住居址（西から） 2. 2号住居址竪
- 図版9 1号住居址、1号掘立柱建物遺構、1～3号溝、（西から）
- 図版10 1. 発掘風景、（北東より） 2. 発掘風景（南西より）
- 図版11 1. 2号掘立柱建物遺構（西より）柱穴上に立つ須玉中学生徒
2. 3号掘立柱建物遺構及び3号竪穴遺構附近（西より）
- 図版12 1. 4号掘立柱建物遺構、3号井戸、南堀附近（北より）
2. 3号井戸、2号住居址、1号竪穴遺構及び掘立群（北東より）
- 図版13 1. 掘立群及び1号竪穴遺構より八ヶ岳及び南麓台地を望む（南東より）
2. 掘立群柱穴発掘風景（南より）
- 図版14 1. 5号掘立柱建物遺構、P-32の柱痕
2. 4～8号掘立柱建物遺構（西より）
- 図版15 9号掘立柱建物遺構、1～2号井戸、7号溝（東より）
- 図版16 8号掘立柱建物遺構附近から斑山を望む（南より）
- 図版17 北堀（北西より）
- 図版18 1. 北堀東（北より）
2. 北堀発掘風景（北東より）
- 図版19 1. 北堀発掘風景（北より）
2. 北堀土層（東より）
- 図版20 1. 1～2号井戸（北より）
2. 1～2号井戸、発掘スタッフ（南より）
- 図版21 1. 3号井戸、集石状況（西より）
2. 3号井戸（西より）
- 図版22 1. 1号竪穴遺構（北より） 2. 1号竪穴遺構土層（東より）

- 図版23 1. 2号竪穴遺構（北より）
2. 3号竪穴遺構（南西より）
- 図版24 1. 発掘風景B区西、南北トレンチ（北より）
2. 発掘風景B区、斜面トレンチ（東より）
- 図版25 1. 1号住居址出土遺物
2. 2号住居址出土遺物
- 図版26 1. 石臼 a: 6号掘立柱建物遺構（P-41）出土。b: 3号井口出土
2. 発掘調査参加者
- 図版27【塙田遺跡】 1. 塙田遺跡遠景（東方、明野村より）
2. 五輪塔散在状況（人物附近、南西より）
- 図版28 1. 発掘前集めた五輪塔群（南より）
2. 1号住居址〔実測作業中〕及び茅ヶ岳と西麓（西より）
- 図版29 1. 1号住居址（西より）
2. 1号住居址甌
- 図版30 1. 2号住居址（南より）
2. 2号住居址（西より）
- 図版31 1. 北トレンチ発掘風景（南西より）
2. 竪穴群発掘風景（南より）
- 図版32 1. 竪穴群（北西より）
2. 土壇群発掘前（西より）
- 図版33 1. 土壇群発掘風景（東より）
2. 土壇群発掘風景（東より）
- 図版34 1. 土壇 2. 土壇
- 図版35 1. 土壇 2. 土壇群及び2号住居址全景（南西より）
- 図版36 1. 出土遺物 繩文時代前期
2. 出土遺物 繩文時代後期後半
- 図版37 1. 出土遺物 砥
1. 出土遺物 五輪塔
- 図版38 1. 正覚寺 五輪塔
2. 赤岡氏 五輪塔
- 図版39 1. 長泉寺 五輪塔
2. 塩川病院南 五輪塔
- 図版40 発掘調査参加者

I 調査の実施と経過

山梨県では、國の農産物自給政策及び、農村振興政策の一貫として、農業構造改善事業を広く実施している。これに伴い、須玉町でも団体営及び、県営圃場整備事業が実施されてきた。従来、県営事業に伴う埋蔵文化財の調査は県教育委員会が直営で実施してきたが、昭和57年度より地元教育委員会が実施する事となった。

昭和58年度、県営圃場整備事業が小倉及び大藏地区で計画され、工区内の遺跡の有無の照合が、県営北土地改良事務所より本町経済課を通じて当教育委員会になされた。調査の結果、小倉工区では周知の遺跡として中尾城があり、大藏工区では塙田地区に土器片と五輪塔多数存在していた。この為、中尾城は試掘及び、本調査の必要があり、塙田地区では試掘調査が必要であるとの報告をおこなった。この結果をもとに、県営北土地改良事務所と協議を行なった結果、塙田地区では県営北土地改良事務所の委託により当教育委員会が試掘調査を行なう事となり、調査を実施したところ、土器の散布が密な場所が発見された為本調査が必要であるとの報告をおこなった。以上の経緯にもとづき、昭和58年度の国補事業として中尾城及び、塙田遺跡の本調査を当教育委員会が実施する事となった。

発掘調査は、中尾城を昭和58年6月より10月まで、塙田遺跡を同年10月より12月まで実施した。山路

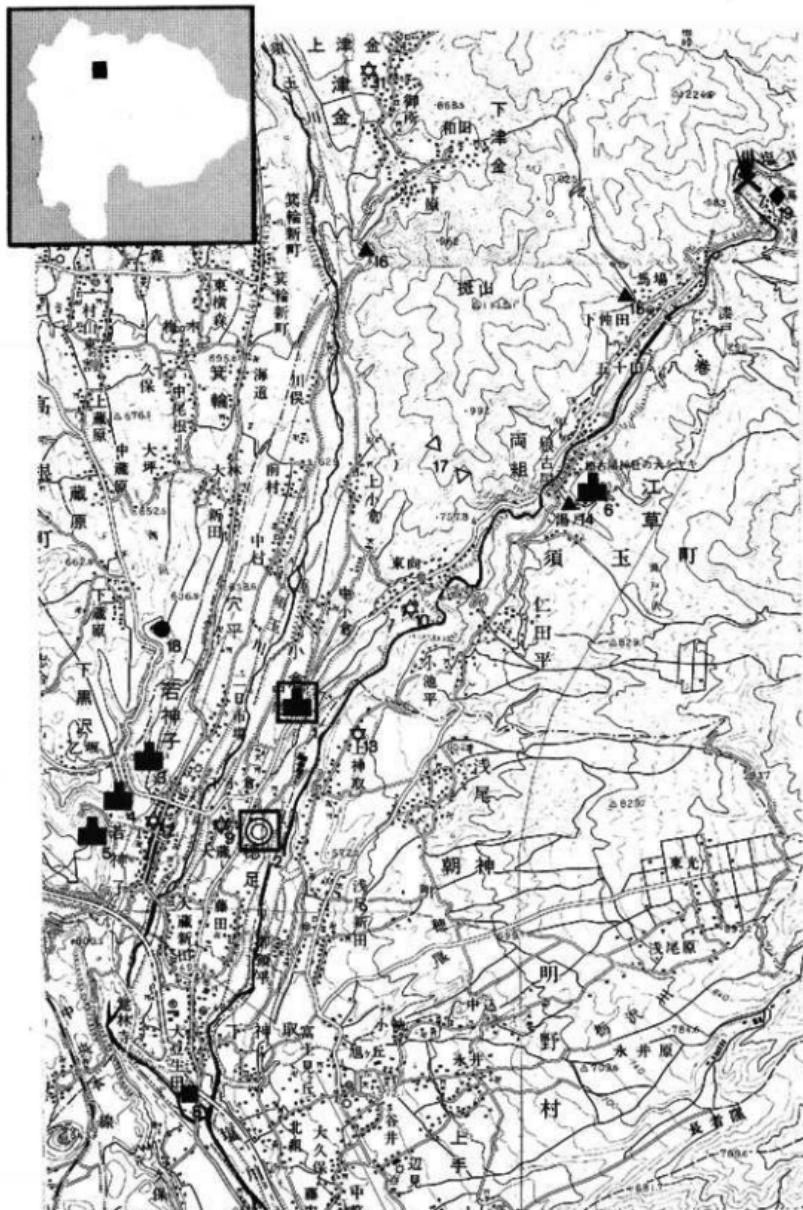
II 遺跡の立地と歴史的環境（第1図）

中尾城の立地

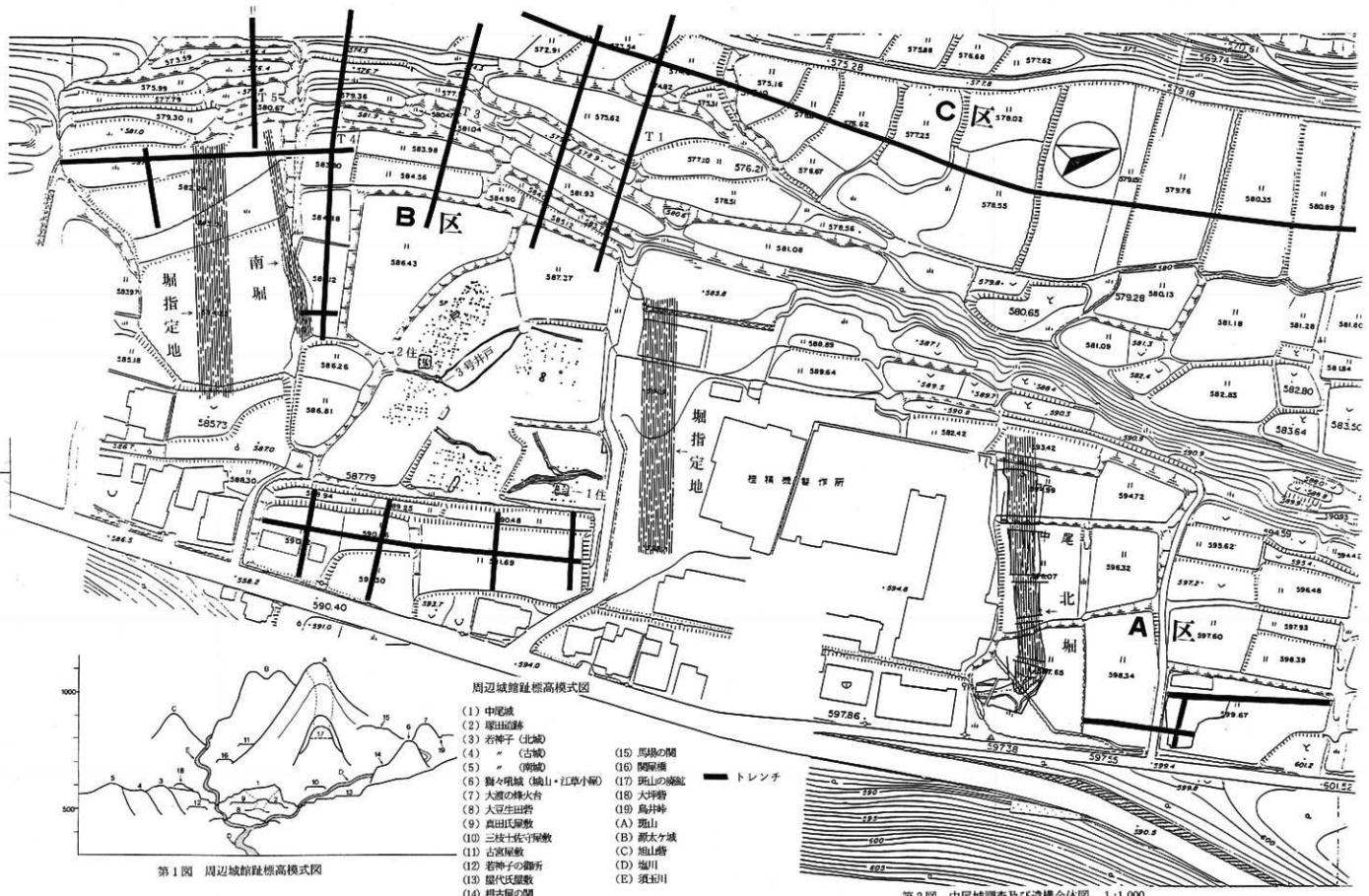
中尾城は、秩父山系の斑山(1,115m)から南西へ細長く延びる尾根上に立地する。この尾根は東の塙川(比高約30m)、西の須玉川(比高約30m)の両河岸段丘により形成されている。中尾はその地名が表すように八ヶ岳南麓台地と、茅ヶ岳西麓台地の中間地帯に位置する尾根である。この中間地帯は塙川、須玉川を境として中尾から南西、大藏、藤田、穂足、大豆生田の各地区に継ぎ、両河川の合流地点を頂点とする半島状の区画をつくり、両台地を完全にわけている。大藏には真田氏屋敷。大豆生田には、大豆生田砦がある。

城の北東約160mに〔ベットウさん〕という小さな社殿がある（これは工場建設に伴い城内より移転されたものと聞く）。更に、北東約1.5km、斑山の中腹には金山とおもわれる廃坑数カ所あり、その一つは見本寺側の西斜面から東向集落のある東斜面へと尾根を貫通している。東向集落には三枝土佐守屋敷（絵図に記載あり）がある。

城の最高所(597m)に立つと北西に、塙川の上流（増富方面）、瑞牆山(2,230m)をはじめ鳥井峠、大波の烽火台(850m)、江草の城山（獅子吼城、793m）を望む。東から南東にかけて、茅ヶ岳(1,703m)とその西麓、さらに遠く御坂山塊の一部と富士を望み、眼下に



第1図 中尾城・塙田遺跡と周辺遺跡位置図及び標高模式図 1:25,000



- 3 ~ 4 -

第2図 中尾城調査及び造構全体図 1:1,000



は、上神取・尾代氏屋敷の土塁をはっきりとみることができる。

南には大蔵の真田氏屋敷がみえ、南アルプス連山を背景に、垂崎市方面には八ヶ岳南麓台地上の新府城、能見城。武川村、白州町に跨る中山砦がみえる。

南西から北にかけては、岩神子の町並みと、二日市場から川又までの集落。八ヶ岳西南麓台地東端に位置する若神子城（北城・古城・南城）・旭山砦、また、津金の源太力城も一望することができる。 山路

塚田遺跡の立地と現況

塚田遺跡は塩川（比高約20m）西岸の下位河岸段丘上に立地する。遺跡の西は尾根によって視界が遮られている。

この尾根は、斑山の南麓から中尾城を通り、塩川、須玉川を境として続く半島状の地域の中央をはしり（遺跡の西を通り）穗足の消防所の北できえる。

尾根の西は緩斜面をなして真田懸岐守屋敷のある大蔵の集落につづき、この集落の南は須玉川に沿う水田地帯となる。

本遺跡の北は、桑畑と李畑があり、西側も尾根したに段状の桑畑をつくり、調査範囲中央から南は藤田まで水田となっている。

土壤 群南東（調査区域外）の一区割は地元の呼称で〔コツ・骨〕と呼んでいる。 遺跡の東、塩川西岸河川敷の水田に（町田）の字名が残るが今、人家は全くみあたらない。

深沢

III 中尾城遺跡

（1）遺構と遺物

遺構の概容（第2図）

調査範囲はすべて水田とそれに附隨する斜面である。調査区は工場（桂精機）の北をA区、南と西の斜面をB区、斜面の終りから西をC区とした。城域の半分以上は現在、工場、宅地、県道などになっている。調査区内も2～3度にわたる田営請（水田の造成）などによって削平を受け土塁などの構造物は完全に消滅し、遺構の遺存状態は極めて悪かった。堀の調査については出水が多く危険な為充分な調査が出来なかった。

A区：堀（北堀）が一本発見された。この堀は城域の北限とかんがえられる。

B区：平安時代後半の住居址2軒（1号住居・2号住居）、掘立柱建物遺構9棟、溝7本、

井戸3本、堀状遺構1ヶ所、堀（南堀の一部）一本、竪穴遺構3ヶ所、が発見された。

C区：遺構は発見されなかった。

このほか、調査区外の工場敷地内と南堀の更に南の水田に砲跡と推定される溝地帯がある。

1号住居址

B区の北1号溝～3号溝の西に位置し、一部を1号掘立柱建物遺構にきられている。この付近は田普請の為削平をかなり受けている。覆土の上層は「ニガ」と呼ばれる水田の床土になっていた。

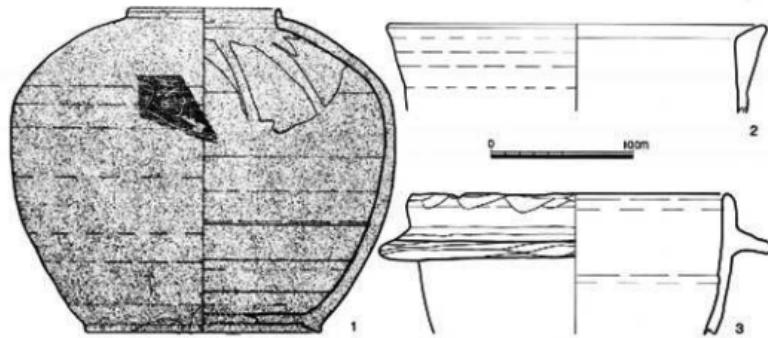
プランは隅丸方形であるが東壁部は削平を受けている為実際の東壁は更に東にあった可能性もある。東壁の北と南に竈の跡と考えられる焼土が見られた。

主軸は、南壁と西壁を基準としてみるとN-120°-E 西よりやや南に傾く。北壁は2.9m 東壁と西壁は3.6m、南壁3mを計る。

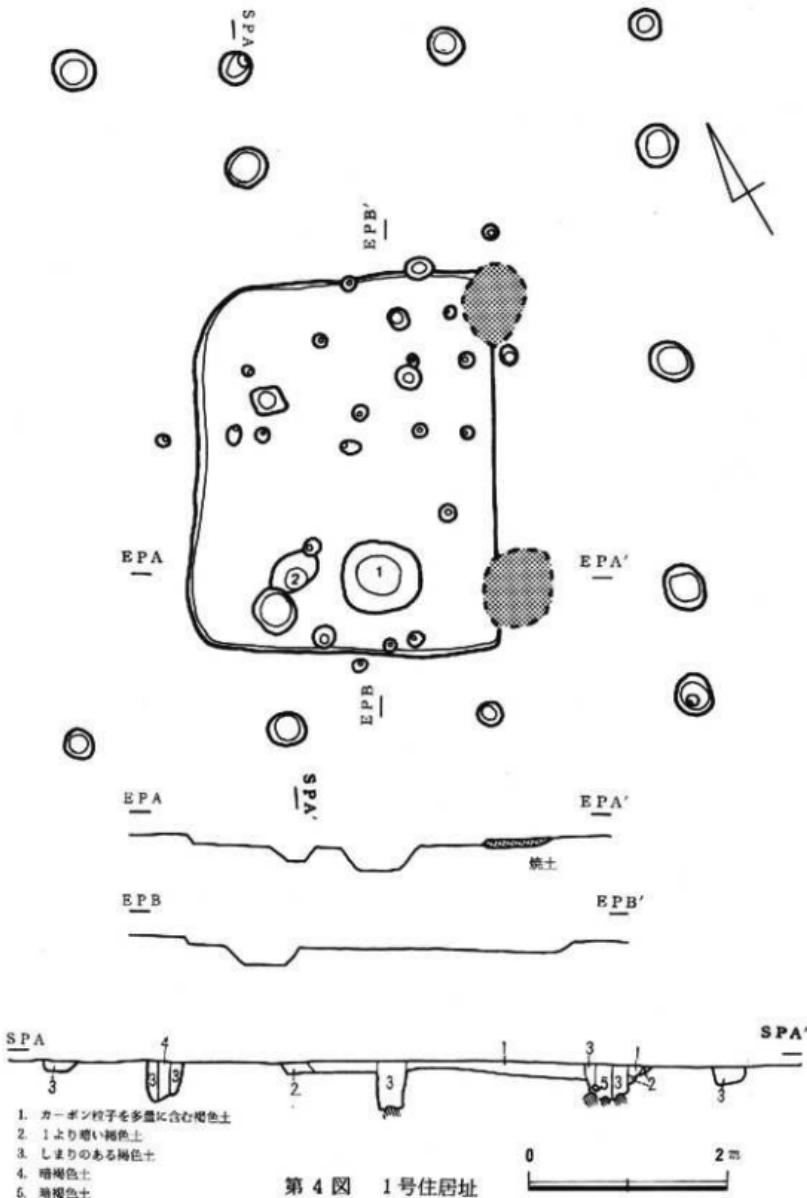
壁高は、北壁で4～7cm、西壁で5.5～8cm、南壁で9～10cm、東壁はほとんどたちあがりがなく、3.0cm以下であった。

周溝、主柱穴はなかったが支柱穴と思われる小穴が19カ所あった。床は全体にしまりがあった。このほか、比較的浅い掘込みが2か所、（1-2）あり、1の規模は東西50cm、南北40cm、深さ25cm。2は長径40cm、短径20cm、深さ15cmであった。

遺物 主な遺物は3個体出土した。1、灰釉短頸壺。2、甕。3、羽釜がいずれも床直で出土した。1は、10世紀後半代の美濃産の短頸壺で口縁から底部にかけて約2/5が遺存していた。口径10.5cm、底径16.8cm、胴部最大径27cm、器高23cmで、胴部に〔道〕の字が彫ってある。2は、口径26cmを測る甕の破片である。3は、口径22.5cmを測る羽釜で、全体の1/3を残す。内外面ともに摩滅しており、成形痕は不明である。胎土中に砂粒や、小石を多く含みざらつきがある。



第3図 1号住居址出土遺物



第4図 1号住居址

2号住居址（第5図、第6図）

B区のやや南中央に位置し、5号掘立柱建物遺構の間にあり、北西に3号井戸がある。

プランは隅丸方形であり東西4m、南北3.7mを計り、東壁の南寄りに竈がある。主軸はN-112°-Eである。

壁の状態は良好なたちあがりをもち、壁高は北壁で12cm~31cm、西壁で19cm~29cm、南壁で23cm~26cm、東壁15cm~24cmを計る。

周溝は竈の西より、南壁の西よりの小穴附近までほぼ全周する。

床は掘立柱建物群の柱穴で一部きられているが良好に確認できた。主柱穴はなかったが小穴が15本ありそのうち支柱穴と推定されるものが北壁近くにみられるたが他は不明。

このほか、間仕切りの溝と推定されるものが2本主軸方向に平行にみられた。

竈は祐石より低い部分は遺存状態は良好で燃焼部から煙道部へかけても良好であった。

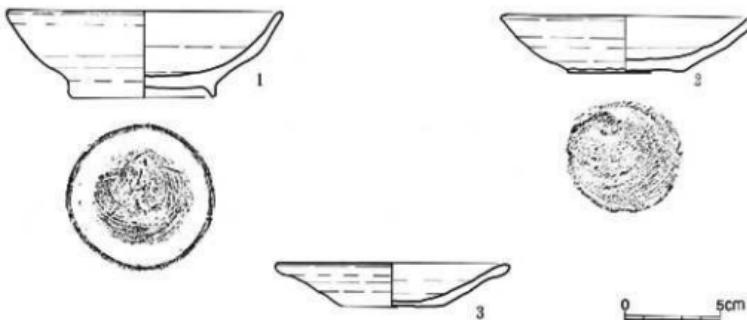
炊き口は南東コーナーより対かく線上に造られている様であった。

遺物 主な遺物は1、灰釉高台付壺と2、土師質土器である。

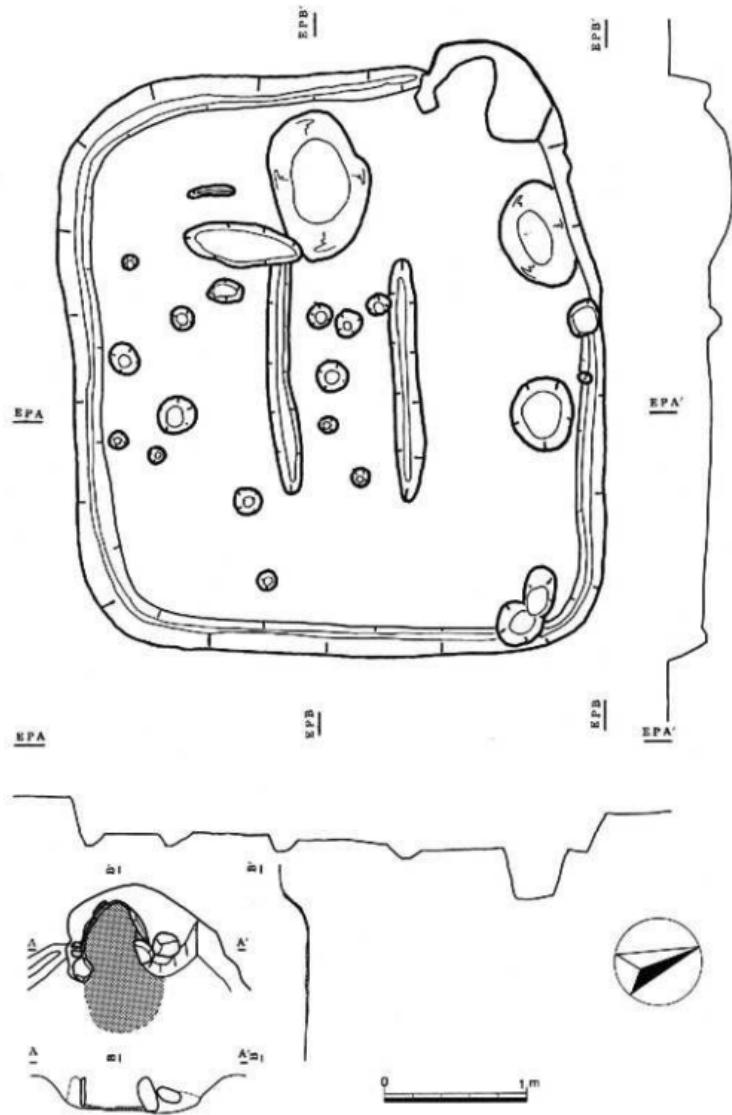
1、灰釉高台付 壺は口径15cm、器高4.5cm、底径7.6cmを測り、色調は灰白色で胎土は極めて細かい。胴部に2ヶ所の欠損部分があり、黒色の付着物が認められ、ウルシの可能性がある。

2、土師質土器の皿で、口径13.2cm、器高3.2cm、底径6cmで、胴部内外にロクロ横なで、底部に糸切り痕がある。胎土はやや荒く、畫母及び0.2~0.5cmの黒色粒子を含む。色調はやや灰色がかった黄褐色で、底部の半分は黒色で完形である。

3、壺で、口径12.2cm、器高2.3cm、底径5.2cmである。内外共にロクロ横なで、胴部下半から底部まで、ヘラ削りが施されている。口唇は僅かに肥厚し、色調は明赤褐色で、底部と胴部及び口縁の一部が残る。



第5図 2号住居址出土遺物



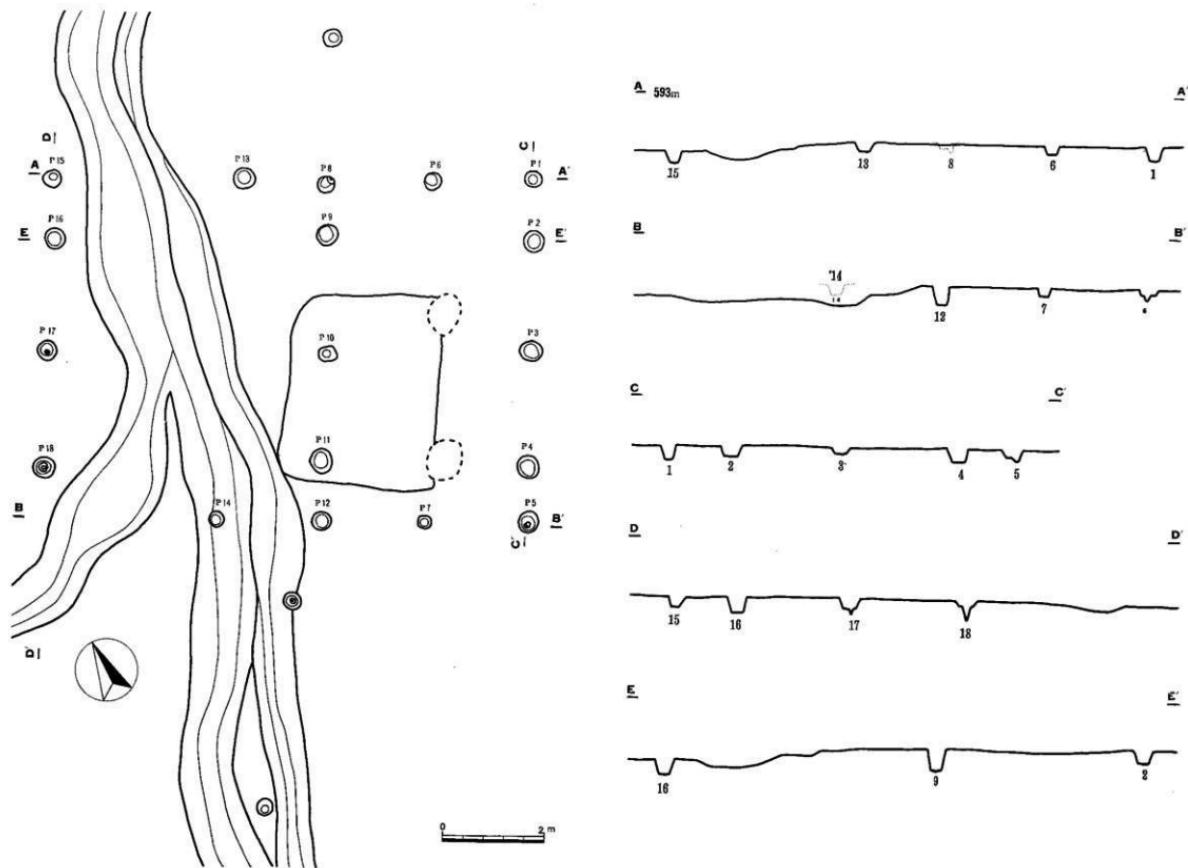
第6図 2号住居址及び竈

a) 1号掘立柱建物遺構

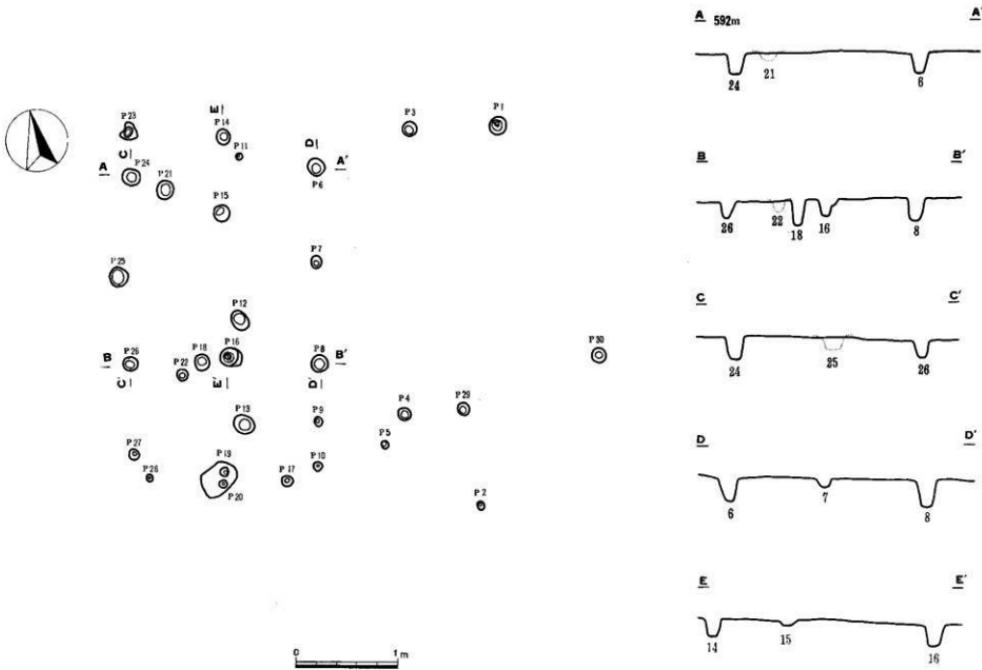
主軸はN-117°Eで、棟柱のP 3 P 17を結ぶ間は桁行5間(9m)を測る。棟柱P 3から内側通りの柱穴P 2とP 3から南内側通りの柱穴P 4の柱間の和は2間半(4.5m)を測る。庇の側通りP 1 P 6 P 8 P 13 P 15と内側通りのP 2 P 9 P 16の柱穴間は3尺(90cm)である。南側の側通りP 5 P 7 P 12 P 14と内側通りの柱穴P 4 P 11 P 18も3尺を測る。I場(本丸)から南下する溝造構によって、少くとも3ヶ所の柱穴が削平されている。然しこれ等の失われた柱穴を除いても、ほぼ完形に近い掘立柱遺構、既ち桁行5間×梁行3間半が測られる。

第1表 1号掘立柱建物遺構柱穴計測表(底の標高の単位はm、他はcmで表わす)

番	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考	番	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考
P 1	不整円形	32×30	280	591.76		P10	不整円形	48×38	370	591.61	
2	円 形	48×46	235	591.82		11	不整円形	50×48	285	591.67	
3	不整円形	46×40	127	591.89		12	円 形	30×30	370	591.68	
4	不整円形	50×42	360	591.67		13	円 形	44×42	185	591.87	
5	不整円形	48×38	225	591.78		14	円 形	30×28	185	591.86	
6	不整円形	38×36	160	591.87		15	不整円形	38×36	314	591.61	
7	円 形	24×24	200	591.84		16	円 形	42×40	380	591.52	
8	不整円形	44×38	185	591.87		17	円 形	38×38	335	591.48	
9	不整円形	44×40	415	591.65		18	不整円形	44×42	390	591.42	



第7図 1号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図



第8図 2号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図

b) 2号掘立柱建物遺構

主軸はN-26° Eで、棟柱はP14 P16で桁行1間（1.8 m）を測り、梁行P 6 P24（P 8 P26）1間を測る方形小舎のような掘立柱建物遺構である。2号掘立柱建物遺構との間の柱穴に互間性を見出すことが困難である。

第2表 2号掘立柱建物遺構柱穴計測表（底の標高の単位はm、他はcmで表わす）

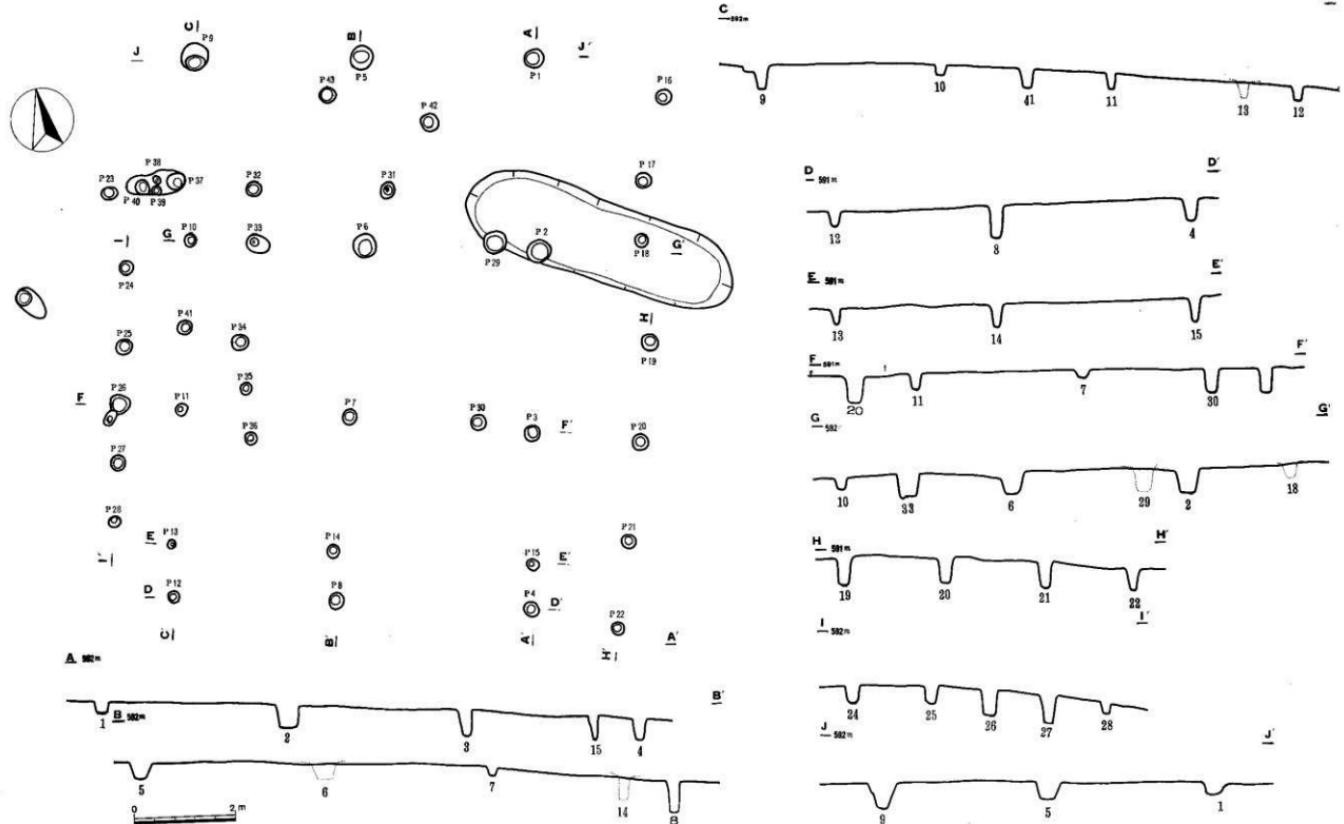
番	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考	番	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考
P 1	円 形	35×33	119	591.20		P16	不整円形	44×36	344	590.90	○
2	円 形	16×13	155	591.16		17	円 形	23×22	305	590.96	
3	不整円形	28×26	140	591.21		18	不整円形	32×29	541	590.76	
4	円 形	28×26	143	591.13		19	不整円形	20×18	605	590.62	
5	円 形	15×15	228	591.05		20	不整円形	16×15	360	590.88	
6	円 形	36×32	440	591.90	○	21	不整円形	40×34	118	591.21	
7	不整円形	24×20	164	591.17	○	22	不整円形	24×23	206	591.00	
8	円 形	34×32	480	590.81	○	23	不整円形	36×28	227	591.11	
9	円 形	20×18	480	590.76		24	不整円形	36×32	467	590.86	○
10	円 形	19×19	256	590.95		25	円 形	38×38	255	591.01	○
11	円 形	12×11	168	591.21		26	不整円形	32×29	325	590.88	○
12	不整円形	43×32	266	591.03		27	円 形	24×22	295	590.89	
13	椭円形	44×36	413	590.88		28	円 形	12×12	178	590.94	
14	円 形	32×31	388	590.99	○	29	円 形	28×26	126	581.14	
15	円 形	32×32	133	591.19		30	円 形	30×30	488	590.79	

c) 3号掘立柱建物遺構

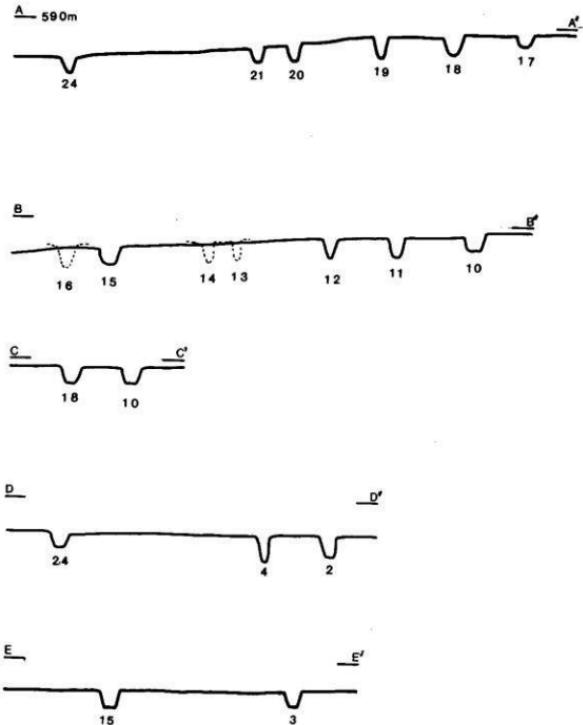
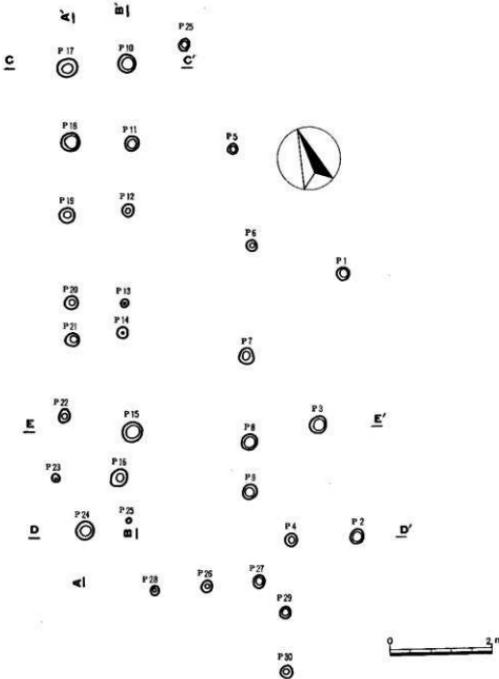
主軸はN-29°-Eで、棟柱はP5 P8でP5 P6、P6 P7、P7 P8それぞれの柱穴の間隔は2間、桁行は3間(5.4m)が測られ、梁行(P1 P9)は2間を測る。南梁行の柱穴P4 P12から3尺内側に柱穴P13 P15が認められ、これ等の柱穴は縁のような、この建物に付属する柱穴と考えられる。建物遺構の東側に南北の柱列P16~P22、西側にも南北の柱列(P23~P28)が並ぶ。P19とP22までの柱穴間は1間を測ることが出来、P24からP28の柱穴間は4尺の間隔をとる。東西の柱列は、この建物遺構に伴う櫛列のような柱列であろう。

第3表 3号掘立柱建物遺構柱穴計測表(底の標高の単位はm、他はcmで表わす)

番	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考	番	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考
P 1	不整円形	40×36	208	590.99	○	P22	円 形	24×24	425	590.08	
2	円 形	48×44	439	590.55		23	不整円形	32×26	335	590.66	
3	不整円形	30×28	495	590.24		24	円 形	30×29	535	590.60	
4	不整円形	32×31	435	590.02	○	25	円 形	32×32	308	590.57	
5	不整円形	48×44	343	590.81	○	26	不整円形	39×38	530	590.26	
6	不整円形	48×44	410	590.60		27	円 形	31×28	560	590.09	
7	不整円形	29×28	160	590.63		28	不整円形	24×23	245	590.26	
8	不整円形	32×28	645	589.78	○	29	不整円形	44×44	433	590.60	
9	円 形	52×50	454	590.62	○	30	円 形	28×28	460	590.28	
10	不整円形	28×22	360	590.77	○	31	楕円形	34×28	103	590.97	
11	円 形	26×24	305	590.46	○	32	円 形	28×28	175	590.91	
12	円 形	24×24	295	590.09	○	33	不整円形	46×36	495	590.54	
13	不整円形	20×16	318	590.18		34	不整円形	30×29	460	590.43	
14	円 形	28×25	460	590.04		35	不整円形	24×20	105	590.67	
15	不整円形	22×22	450	590.09		36	円 形	24×23	335	590.41	
16	円 形	30×30	489	591.79		37	不整円形	36×32	505	590.54	
17	円 形	28×28	443	590.72		38	不整円形	16×12	330	590.71	
18	円 形	28×26	275	590.77		39	不整円形	16×16	395	590.64	
19	円 形	30×28	570	590.32		40	不整円形	36×28	240	590.75	
20	円 形	32×28	495	590.29		41	円 形	28×28	380	590.50	
21	円 形	26×25	610	590.14		42	円 形	36×34	484	590.64	
						43	不整円形	32×30	303	590.82	



第9図 3号掘立柱建物造構、平面図及び断面図



第10図 4号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図

d) 4号掘立柱建物遺構

N-21° Eを主軸とし、P 25 P 26を結ぶ軸を中心にして、東西の柱列を測定すると、東にP 6 P 7 P 8 P 9が4尺、西にP 10～P 15が同じく4尺測られる。P 10から3尺西へP 17がP 18～P 24までP 10～P 15に平行する。南北の柱列は、P 17～P 24までが9m(5間)、東西の柱穴P 2とP 24の間が5.4m(3間)を測るが、東と北東部からの柱穴の検出不足から、建物の規模は推定出来ない。

第4表 4号掘立柱建物遺構柱穴計測表(底の標高の単位はm、他はcmで表わす)

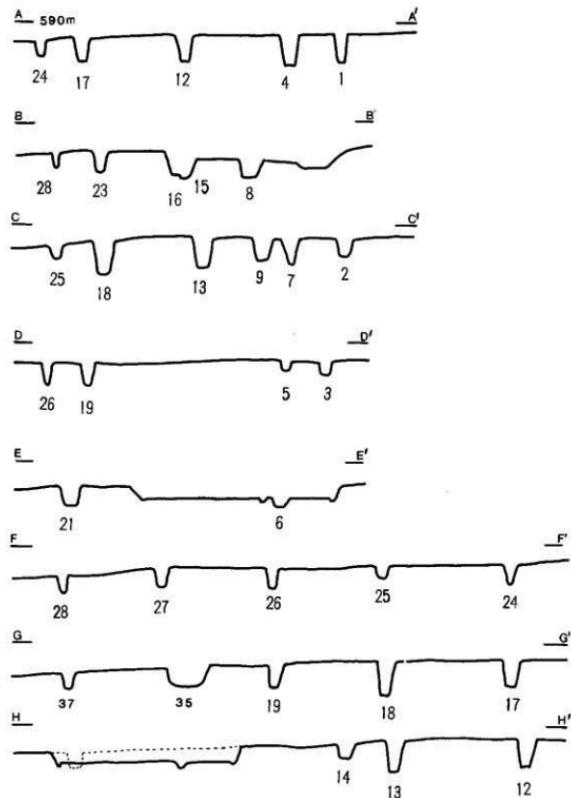
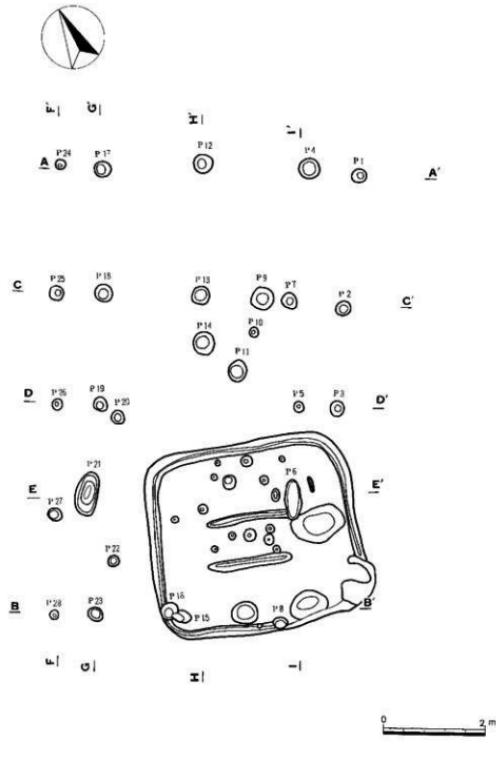
No	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考	No	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考
P 1	円 形	28×27	50.5	589.15		P 16	不整円形	40×32	41.9	588.95	
2	不整円形	30×28	35.0	588.97		17	不整円形	42×34	32.7	589.54	
3	不整円形	36×32	37.6	589.05		18	円 形	36×36	29.7	589.50	
4	円 形	27×27	94.2	588.35		19	円 形	32×31	47.0	589.27	
5	不整円形	20×16	27.9	589.47		20	不整円形	34×30	41.1	589.17	
6	不整円形	23×20	51.1	589.17		21	不整円形	30×28	46.6	589.14	
7	不整円形	34×32	46.4	589.14		22	不整円形	29×24	21.6	589.21	
8	不整円形	36×32	39.6	589.01		23	不整円形	18×16	28.2	589.08	
9	不整円形	32×28	29.7	589.06		24	円 形	37×36	28.5	589.00	
10	不整円形	38×36	32.5	589.53		25	不整円形	22×20	17.6	589.68	
11	円 形	32×29	27.6	589.47		26	不整円形	23×22	36.8	588.87	
12	椭円形	28×24	39.6	589.32		27	円 形	24×22	38.1	588.85	
13	不整円形	18×16	34.9	589.25		28	円 形	20×18	31.0	588.91	
14	円 形	23×22	27.7	589.24		29	円 形	24×23	54.1	588.61	
15	円 形	41×40	35.9	589.06		30	円 形	24×24	53.8	588.61	

e) 5号掘立柱建物造構

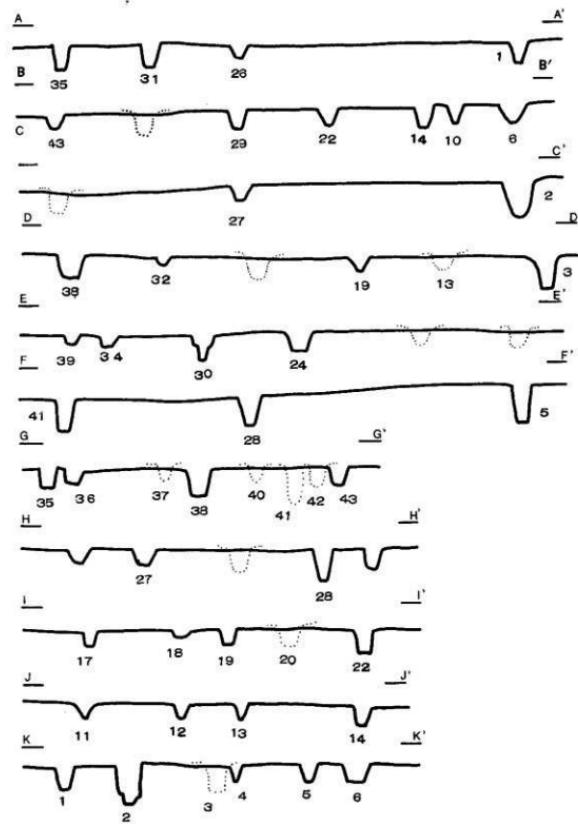
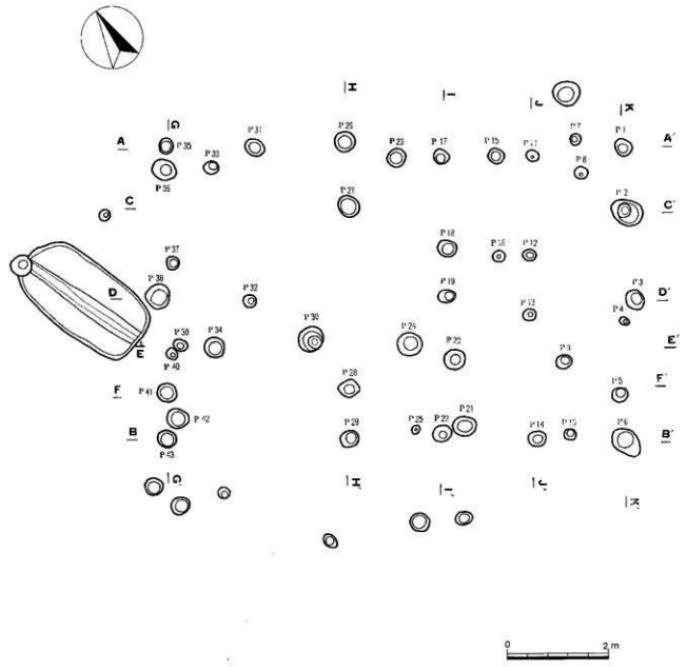
主軸はN-27°-Eで、P12を棟柱とし、東へP12からP4が1間、西へP24からP17までも同じように1間測られる。庇の柱穴P1とP4が3尺、P17とP24も3尺を測られるところから、梁行はP1 P4 P12 P17 P24が3間(5.4m)西の一番外側の柱列である側通りP24～P28が5間(9m)測るところから、造構の規模は桁行5間×梁行3間と考えられる。柱穴P6とP21は長梢円をうがち、2間の間隔を持ち、5号掘立と時期の異なる柱穴で、5号掘立以外の建物の一部、例えば門のようなものに使用された柱穴と推考される。

第5表 5号掘立柱建物造構柱穴計測表(底の標高の単位はm、他はcmで表わす)

番	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考	番	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考
P 1	不整円形	32×28	540	58924		P15	椭 圆 形	36×23	585	58884	
2	不整円形	32×28	345	58941		16	円 形	34×33	425	58900	
3	不整円形	28×26	315	58934		17	不整円形	32×30	510	58919	
4	円 形	40×40	615	58915		18	円 形	36×34	675	58902	
5	円 形	20×20	225	58946		19	不整円形	28×28	570	58904	
6	椭 圆 形	160×36	411	58933		20	不整円形	28×24	395	58921	
7	不整円形	34×30	570	58919		21	椭 圆 形	168×46	430	58914	
8	不整円形	28×24	511	58899		22	円 形	25×25	360	58917	
9	不整円形	50×46	435	58930		23	不整円形	28×24	385	58906	
10	円 形	20×18	205	58953		24	円 形	22×20	392	58921	
11	椭 圆 形	44×36	246	58944		25	円 形	30×28	985	58935	
12	円 形	40×38	565	58920		26	不整円形	24×20	441	58916	
13	円 形	38×36	645	58909		27	不整円形	28×26	390	58905	
14	円 形	46×44	380	58934		28	円 形	18×18	346	58905	



第11図 5号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図



第12図 6号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図

f) 6号掘立柱建物遺構

主軸はN-59°-Wで、P3とP38を棟柱とし、P2とP3、P3とP5は1間を割り、底の柱穴はP1～P2が4尺、P5～P6は3尺を測る。P2に対する西側の柱穴は検出されなかったが、本遺構の規模は桁行5間×梁行3間と考えられる。P5に対する底の入側通りの柱穴P41から石臼（第27図）が出土している。

第6表 6号掘立柱建物遺構柱穴計測表（底の標高の単位はm、他はcmで表わす）

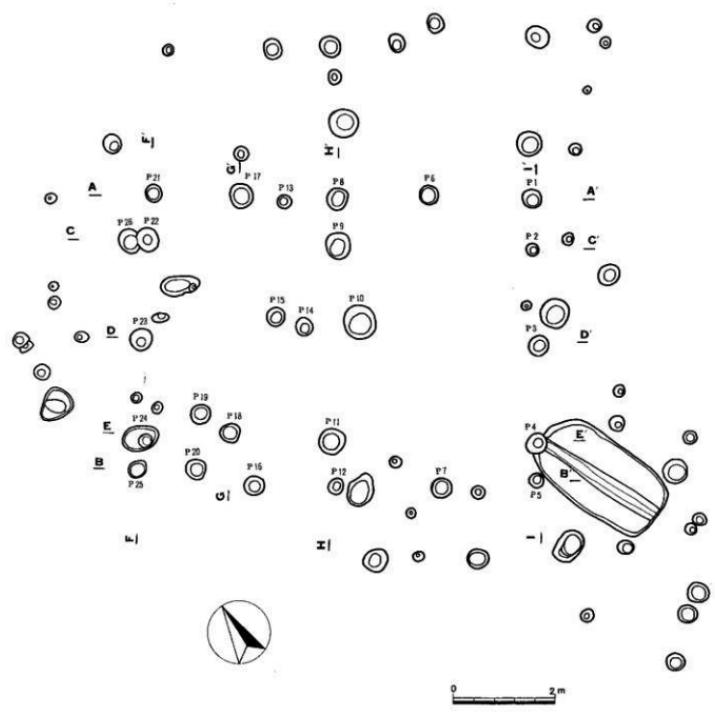
番	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考	番	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考
P1	円 形	30×30	34.7	589.08		P23	円 形	36×36	183	589.37	
2	不整円形	64×52	71.5	588.82		24	円 形	48×48	380	589.09	
3	円 形	40×38	70.5	588.87		25	不整円形	20×18	369	589.09	
4	不整円形	20×18	32.0	589.20		26	円 形	40×40	240	589.28	
5	不整円形	32×28	73.0	588.82		27	不整円形	44×42	303	589.21	
6	椭 圆	128×86	38.2	589.15		28	不整円形	38×34	65.7	588.80	
7	円 形	24×22	23.3	589.34		29	不整円形	36×32	39.2	589.06	
8	不整円形	28×26	29.0	589.28		30	不整円形	54×52	54.5	588.89	
9	不整円形	32×28	48.0	589.04		31	不整円形	40×36	482	589.11	
10	円 形	24×24	38.8	589.12		32	円 形	26×24	155	589.29	
11	不整円形	28×24	51.3	589.09		33	不整円形	28×24	482	589.11	
12	円 形	28×26	29.0	589.25		34	円 形	42×42	24.0	589.16	
13	不整円形	28×26	26.5	589.26		35	円 形	30×28	452	589.11	
14	不整円形	36×28	42.7	589.07		36	不整円形	48×42	287	589.20	
15	円 形	32×30	16.8	589.44		37	円 形	28×26	165	589.26	
16	不整円形	26×24	16.5	589.37		38	不整円形	50×48	545	588.90	
17	不整円形	30×28	29.8	589.26		39	不整円形	28×24	255	589.05	
18	不整円形	38×34	23.5	589.28		40	円 形	24×24	34.0	589.07	
19	不整円形	36×26	29.5	589.22		41	不整円形	40×36	685	588.72	石臼出土
20	円 形	44×42	37.5	589.12		42	不整円形	44×36	388	589.01	
21	不整円形	48×40	53.7	588.93		43	円 形	38×36	298	589.10	
22	不整円形	38×34	32.8	589.09							

g) 7号掘立柱建物遺構

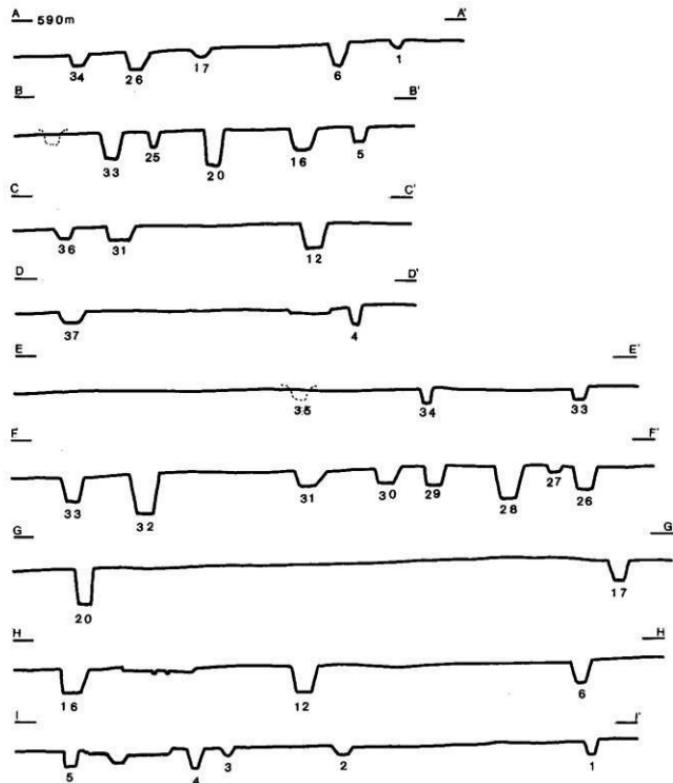
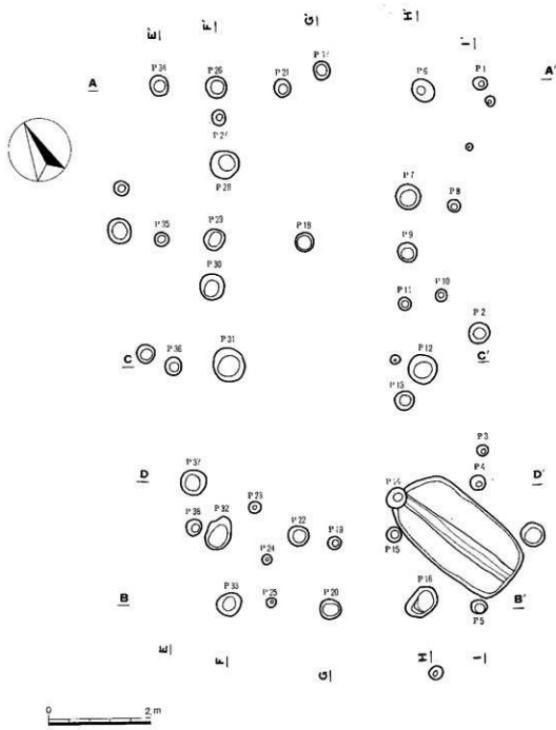
N-56°-Wを主軸とし、P 3とP 23を棟柱とし、P 2とP 3、P 22とP 23はそれぞれ1間を測り、P 3とP 4、P 23とP 24も1間の等間隔をもつ。P 1とP 2、P 21とP 22を結ぶ底の側通りと入側通りの柱穴間は3尺～4尺を測り、P 4とP 5、P 24とP 25を結ぶそれは、2尺を測る。本遺構は桁行4間(7.2m)×梁行3間(5.4m)の建物址と考察される。

第7表 7号掘立柱建物遺構柱穴計測表(底の標高の単位はm、他はcmで表わす)

番	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考	番	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考
P 1	不整円形	38×34	27.5	58924		P14	円 形	30×30	21.0	58912	
2	円 形	24×24	21.7	58940		15	不整円形	36×32	42.0	58891	
3	円 形	36×36	37.8	58910		16	不整円形	40×36	18.8	58901	
4	不整円形	44×40	44.5	58903		17	不整円形	52×48	29.5	58905	
5	円 形	28×26	29.0	58915		18	不整円形	40×38	29.5	58897	
6	円 形	36×36	32.0	58918		19	円 形	38×38	22.5	58902	
7	円 形	40×40	30.5	58907		20	不整円形	44×42	38.5	58881	
8	不整円形	44×40	38.0	58904		21	円 形	34×32	25.0	58902	
9	不整円形	48×44	33.5	58907		22	不整円形	48×44	19.5	58906	
10	不整円形	66×60	26.3	58911		23	不整円形	48×44	43.7	58880	
11	不整円形	52×48	24.0	58909		24	円 形	28×28	21.3	58896	
12	不整円形	34×28	34.8	58896		25	不整円形	40×36	34.5	58877	
13	円 形	28×28	3.00	58905		26	不整円形	50×44	24.8	58900	



第13図 7号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図



第14図 8号掘立柱建物造構、平面図及び断面図

h) 8号掘立柱建物遺構

本遺構は7号掘立柱建物遺構と同じ区域に認められる。主軸はN-29°-Eで、P17とP20を棟柱とし、桁行は6間(10.8m)を測る。棟柱を中心P6 P26は1間、P1とP6は4尺、P26とP34の底は3尺を測る。梁行はP1とP34で3間3尺(6.4m)である。P6 P26とP12 P31、P16とP33は他の柱穴に比較して、特に大きく、P12はP6 P16を結んで3間を測りP31もP26 P33の中央に位置し、3間を測ることが出来る。

第8表 8号掘立柱建物遺構柱穴計測表(底の標高の単位はm 他はcmで表わす)

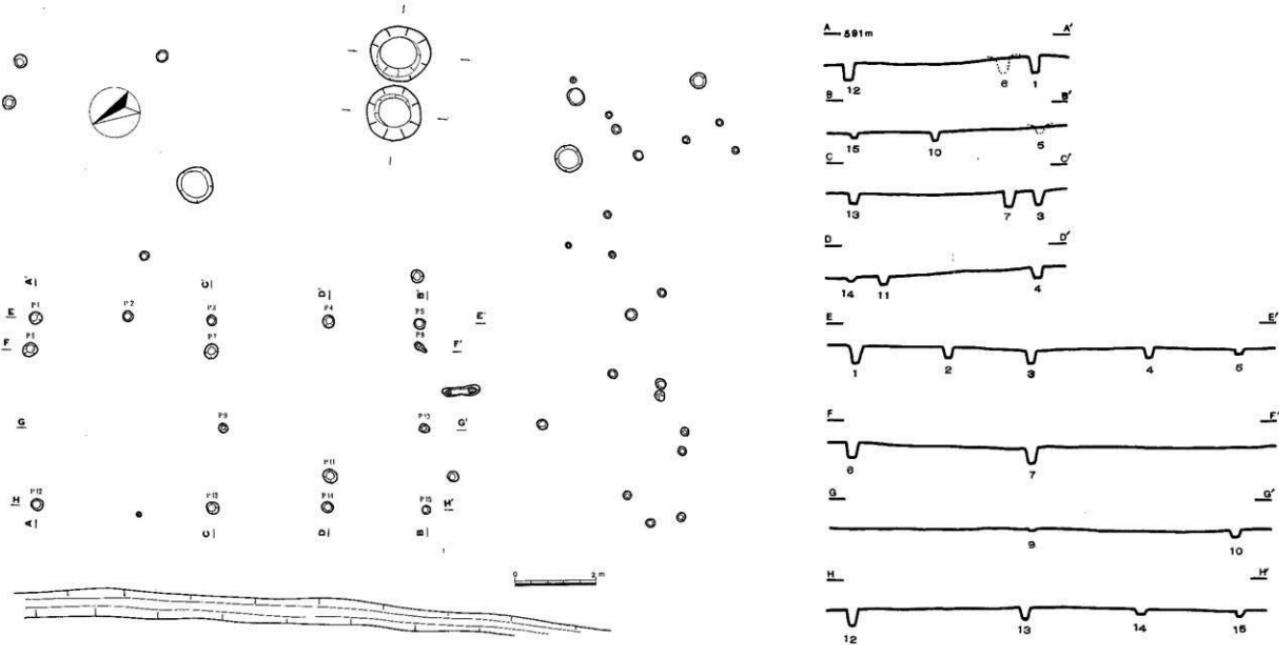
番	形状	規模	深さ	底標高	備考	番	形状	規模	深さ	底標高	備考
P 1	不整円形	28×26	250	58941		P20	不整円形	44×40	710	58864	
2	円形	44×42	185	58934		21	不整円形	40×30	245	58930	
3	不整円形	26×24	422	58905		22	円形	40×40	305	58907	
4	不整円形	32×28	397	58909		23	円形	24×24	240	58913	
5	不整円形	32×28	320	58911		24	円形	20×20	138	58918	
6	椭円形	50×42	540	58912		25	不整円形	22×20	313	58898	
7	不整円形	52×48	187	58940		26	円形	44×42	448	58900	
8	円形	28×26	270	58934		27	不整円形	32×28	92	58934	
9	不整円形	40×36	275	58924		28	不整円形	60×56	585	58888	
10	不整円形	26×24	280	58933		29	不整円形	44×42	380	58904	
11	円形	28×26	217	58940		30	不整円形	56×48	335	58907	
12	不整円形	60×58	533	58896		31	不整円形	70×64	263	58911	
13	円形	40×40	378	58910		32	椭円形	68×48	887	58844	
14	不整円形	44×40	445	58903		33	不整円形	48×46	495	58874	
15	円形	28×28	290	58915		34	不整円形	40×36	312	58910	
16	不整円形	68×50	430	58894		35	円形	28×28	300	58905	
17	不整円形	36×32	582	58902		36	不整円形	36×32	210	58912	
18	円形	40×38	320	58918		37	円形	52×52	240	58909	
19	不整円形	28×26	160	58925		38	不整円形	32×30	348	58896	

i) 9号掘立柱建物造構

主軸はN-29°-Eを測り、P 6 P 12とP 8 P 15の間は2間を測り、東側の底の柱穴は、P 1とP 6、P 3とP 7、P 5とP 8の間はそれぞれ2尺~3尺を測り、西側に並ぶP 12、P 13、P 14、P 15の柱列を底の入り側通りとすれば、2尺~3尺隔てて平行に側通りの柱穴がなくてはならないが、検出されなかった。この造構は、4号、5号、6号と同じ桁行5間（P 1~P 5とP 12~P 15）梁行3間と推定したい。

第9表 9号掘立柱建物造構柱穴計測表（底の標高の単位はm、他はcmで表わす）

番	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考	番	形 状	規 模	深 さ	底 標 高	備 考
P 1	不整円形	32×30	437	590.00		P 9	不整円形	25×24	51	590.22	
2	円 形	29×28	247	590.13		10	不整円形	27×20	186	590.02	
3	不整円形	25×23	356	589.93		11	不整円形	36×33	266	589.95	
4	不整円形	32×28	324	590.05		12	不整円形	32×30	469	589.78	
5	不整円形	28×26	99	590.21		13	不整円形	30×29	263	589.98	
6	不整円形	37×30	386	590.04		14	円 形	29×26	106	590.08	
7	椭 圆 形	39×36	420	589.87		15	円 形	20×20	132	590.03	
8	不 整 形	37×17	60	590.21							



第15図 9号掘立柱建物遺構、平面図及び断面図

堀（第2、16、17図。図版17～19）

堀は推定地を含めると四ヶ所あり、いずれも尾根の真横方向よりやや南に傾いて延びている。

北堀（第2、16、17図。図版17～19）

北堀は工場の北（A区）に位置し、工場とほぼ平行して東西方向に延び、城域の北限にあると考えられる。

発掘調査前の聞き取り調査で、この附近は耕作中、馬がすべったり足をとられたりした、「ぬかる田」と言われる溝田が一部にあったそうである。発掘調査の結果、北堀は聞き取り調査で「ぬかる田」とされた場所の下に発見された。

調査範囲は聞き取り調査でわかった「ぬかる田」附近を中心にして行なったが、西側の斜面よりは雨天時の出水が多く危険であったので充分な調査ができなかった。東は調査区域外の為調査できなかった。

当初、この北堀は尾根を東西にはしり「城」の内外（南北）を完全に分断するものと考えていた。しかし、東側はしだいに高くなり堀はとだえて、代りに浅い溝状の遺構が南と東の調査区域外へ延びる。

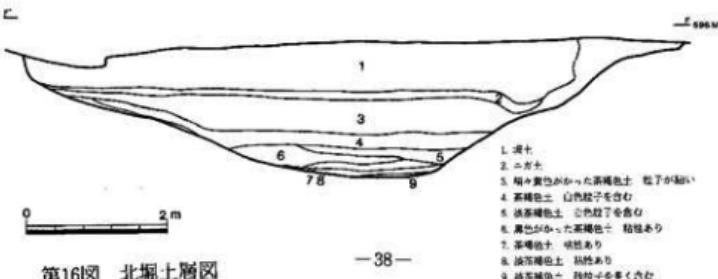
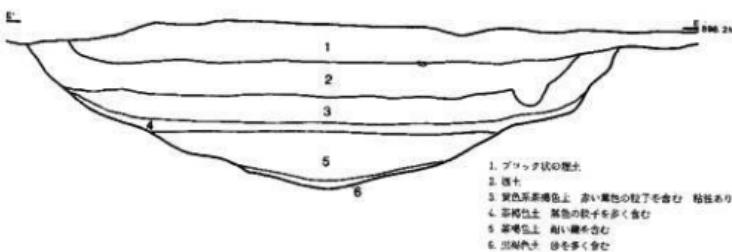
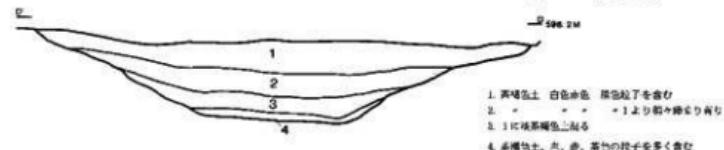
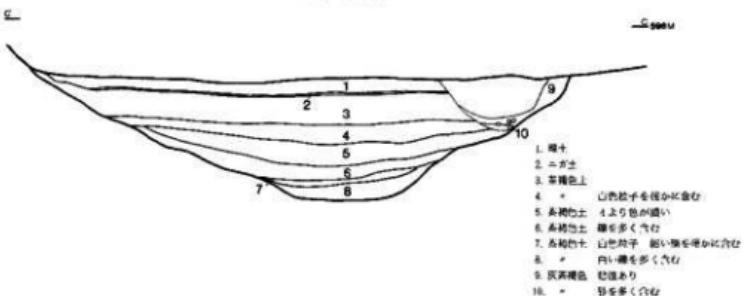
平面確認した堀の規模は東西約75m最大巾9m、そのうち、完掘したのは東西45mで表土からの底の深さ、約2m～4mを計る。

形状は葉研にちかいが堀底が1m前後ある。法面は北側がややきつく底からの勾配は約10度で、南も約10度である。第16図北堀土層図C～Fの各土層の1層より上には、更に発掘調査前の水田（現水田）の床土及び表土があった。また、この堀は現水田の下より、前に1～2度水田になっていた形跡がある。即ち、Cの第2層、Dの第4層、Eの第4層、Fの第2層、が「ニガ」と呼ばれる水田の床土の跡である。

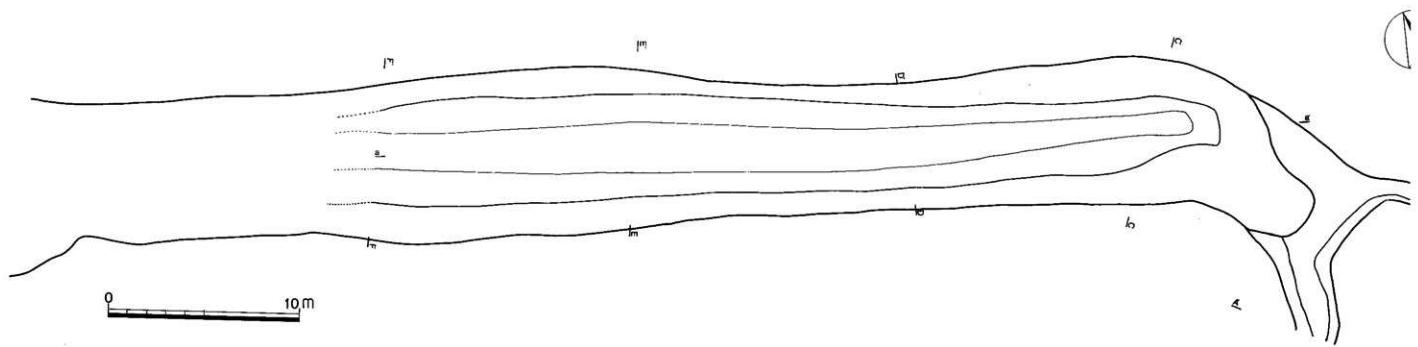
遺物は覆土中から全く出土せず、僅かに耕作土中から時期不明で火縄銃の弾と考えられる「鉄玉」が1個出土しただけであった。この為この堀の時期について断言できないが規模、形状などから戦国末に比定できるものと思われる。

南堀及び堀推定地（第2図参照）

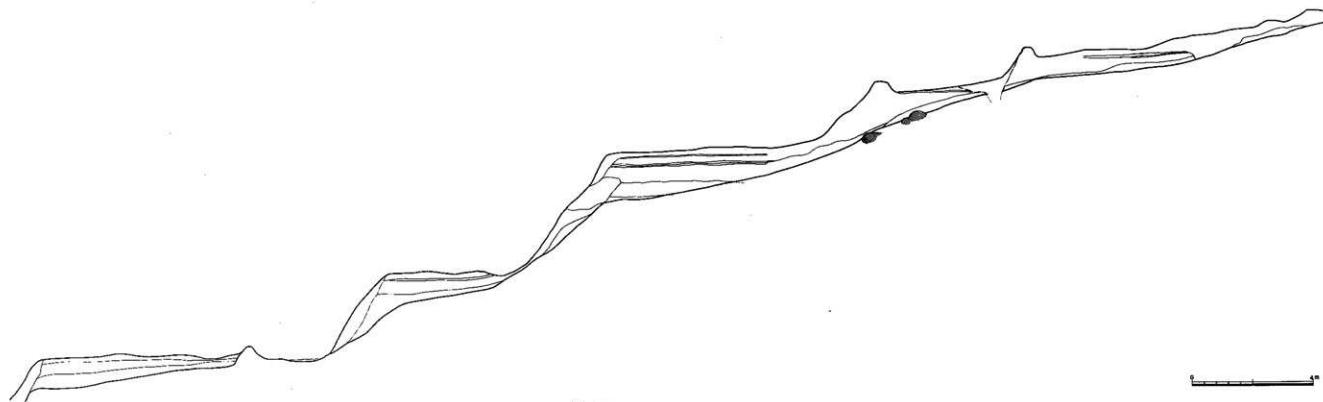
南堀はB区の南、調査区域外との境にあたり主要部分は調査区域外になっている。トレントの一部に堀の法面の断面が発見されたが調査区域外との境に位置する事や、出水が多く危険な為、また調査期間の都合により充分な調査が出来なかった。この堀の更に南に聞き取調査で堀と推定できる「ぬかる田」があることが判っている。また、工場の駐車場附近にも堀と推定できる「ぬかる田」がある事が判っている。



第16図 北堀土層図



第17図 北堀平面図及び東西断面図



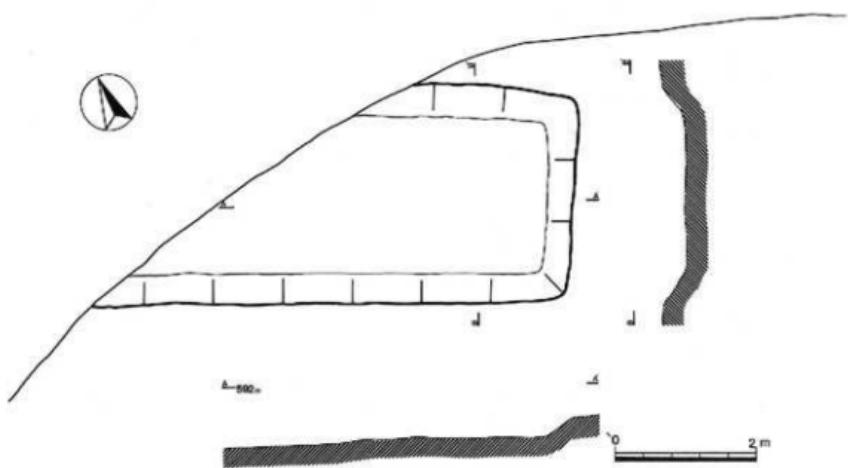
第18図 トレンチ

トレンチ

推定地を含めて4ヶ所の掘が尾根を東西に走るところから、西斜面に堀、土塁、帯郭、水路等々の遺構の検出を目的に西斜面に沿って5本のトレンチを設定し調査したが、開墾による擾乱と、田普請造成に伴う削平などによって、破壊若しくは消失したものと思われ、どのトレンチからも遺構を検出することは出来なかった。西斜面に設定したトレンチの内、第一トレンチは、42m93cmと最も長く、B区南側から西の斜面に沿って鱗段状に造成されている3枚の田畠から調査区域内の境までとした。B地区の平坦地から西斜面の調査区域の境までの比高は11mを測る。トレンチを斜面が削平の著しい箇所と耕作が行われていた平坦地な箇所を5つの区域に分けて設定した。その順序を調査した結果、トレンチの最上部の9mまでの1区は地山から20の勾配をもち、9層にあたる地山は大小の疊を含む粘性の強い茶褐色土層の上に、8層の白色粒子を含む茶褐色土層が第2区の10m地点に構築した土堤の盛土で切られる。盛土した土堤は耕作面から1mの高さで55の勾配をもつ。10mから12mの間に崩土が見られ、1mの幅に地山が切られている。第2区は約2.4mの間は、第2層の鉄分によって黄変した灰色粘土の床土が認められ、その上を耕作土が覆う。17mの耕作上面から40の勾配を持つ褐色土の盛土が続く。

3区の平坦地には一度田圃請が行われた床土を認めることができた。耕作土の第1層は15cm～25cmで、2層の床土は5cm、第3層は褐色土の盛土で、第4層は5～6cmの小疊層、第5層は再び、灰色粘土の床土で5cm～8cm認められる。第6層は茶褐色土の盛土で第2区の斜面を削平したものと思われる。第7層は褐色土上の堆積層で、粘性が強い白色粒子を含む第8層が続く。第8層は5cm程の厚さで1.5m程認められるが、第4区との境の傾斜に構築した盛土で切られる。傾斜地の盛土は3層に分れ、耕作土から続く1mの傾斜の盛土は褐色土で、第7、8層を切る盛土は疊を混入して、第4区の全体に見られる盛土へ続く。第8層は26m～27.5mの間、削平されている。3区と4区の傾斜は約50の勾配をもつ。第一層は耕作土で、鉄分によって黄変した床土が7～8cmを測る。4区の傾斜上に構築された耕作地の幅は3.5mであるが、第8層は2mの高さに50の削平をうけている。削平した第8層を崩土が厚く覆う。地山を2.4mの幅に削り取り、底の部分は水溜りとなっている。5区は調査区域の境までで、第8層を削平した土を盛土した思われる土層が41m～43mの地点に認められている。5区の耕作土範囲は幅約7m、15cm～25cmの厚さを持ち、次に白色粒子を含む茶褐色土の下に、盛土が見られる。盛土は黒褐色土と、白色粒子の含まれる茶褐色の第8層を削平した土を盛土した部分と分けられる。

耕作地として活用されて来た西斜面の削平された平坦地は、県内の山城の中腹に見られる帶郭や、土塁などが設置されるにふさわしい場所と思える。



第19図 堀状遺構

堀状遺構（第19図）

B区の北端で、1号溝の北西に位置し、北と北西は調査区域外にあたる。遺構は西側を残し完掘出来なかった。プランは長方形で主軸はE-23度-Sと東南東に傾斜している。

規模は、南北3.1m。東西は不明だが確認された範囲で最大6.6mを測る。底の深さは、30cm~40cmで底は平らだが、やや西に傾斜している。法面は北で10度、東で11度、南で11度の勾配をもつ。

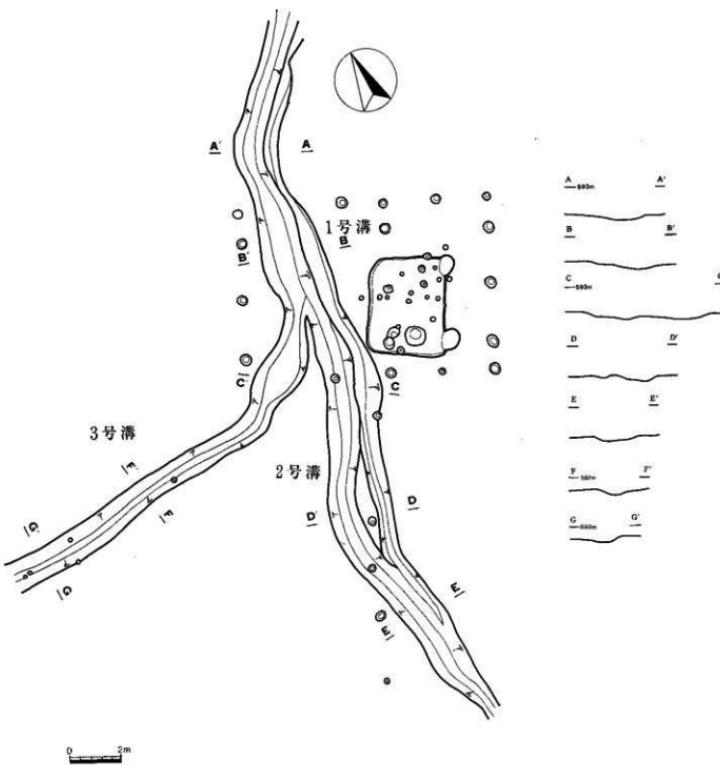
土層観察では大きくⅡ層にわかれ、自然堆積の第1層の暗褐色砂混入層が10cm~15cm位堆積した後、第Ⅱ層に30cm~25cmのブロック状の黄褐色土層がみられる。第Ⅱ層は、人為的に埋められた可能性が強い。

遺物は全く出土せず時期は不明であるが、この形態に似通ったものが若神子城（古城）の発掘調査で発見された掘りかけの薬研堀のひとつにある。この堀は「天正壬午の乱」（1582年）に比定されるもので当遺構もこの時期である可能性が強い。

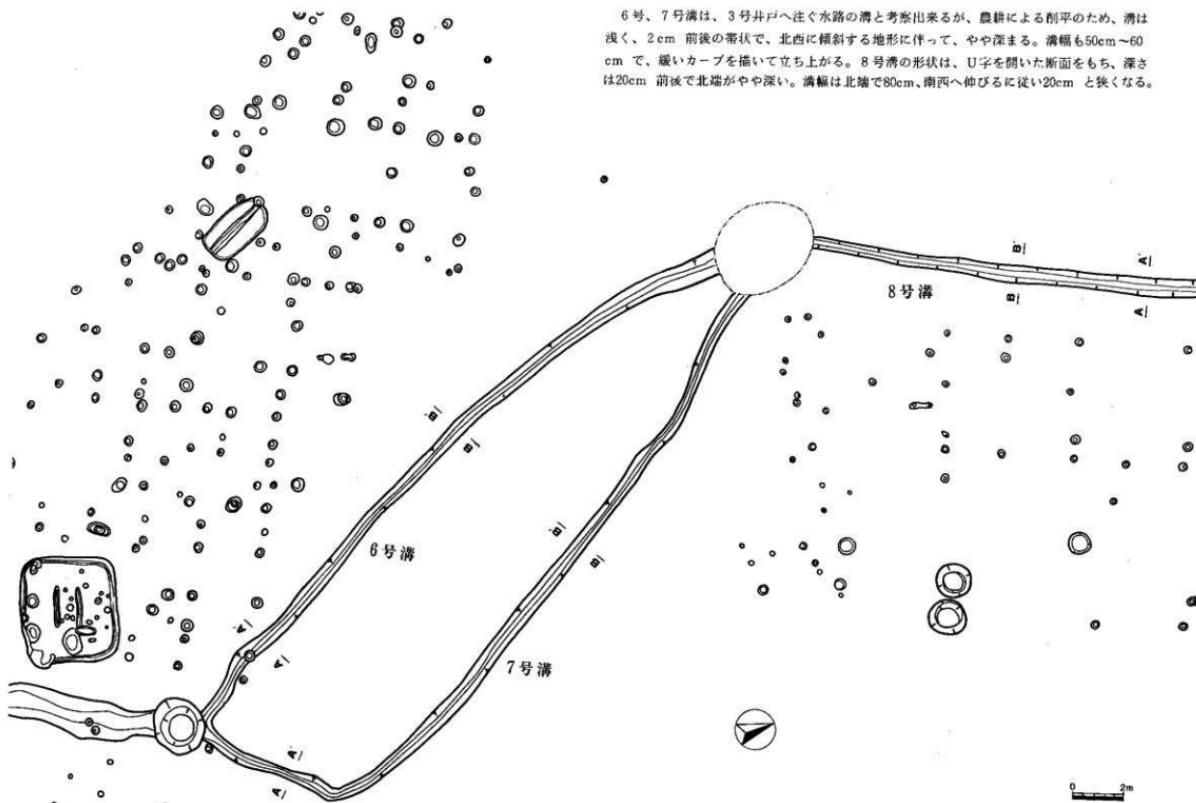
溝

1号～3号溝（第20図）

1号溝と2号溝は併行して工場敷地南側溝を起点にして検出され、1号住居址の西南隅部を通って、南東へ伸び、東側の南北に流れる農耕用水路によって切られる。3号溝は1号住居址西側中央から約3m西より西下して、緩傾斜面に消滅する。2号溝か1号溝を切っているところから、始めに1号溝が流れ、何らかの理由で2号溝を掘ったものと考える。3号溝は2号溝より遙く全体に溝幅も狭い、2号と3号溝の床面は、壁が認められ、壁の下に砂が薄く堆積する箇所が、2号、3号溝が分岐する地点から北で検出されている。2号3号共に緩い傾斜を持つV字状で、2号溝は最大幅1.6mの広い箇所もあるが概して1m、深さは、3号溝と分れる6m前後は18cmから20cmで、南へ向うに従い12cmとなる。3号溝は、2号溝と交わる地点で約17mの溝幅をもつが1mから1.2mで西へ緩いカーブをえがき、深さは中央附近で20cm、他は平均して12cmを測る。1号溝の溝幅は2号溝によって切られているため、全容は不明だが、1m前後の溝幅で、深さは12cm前後と思われる。



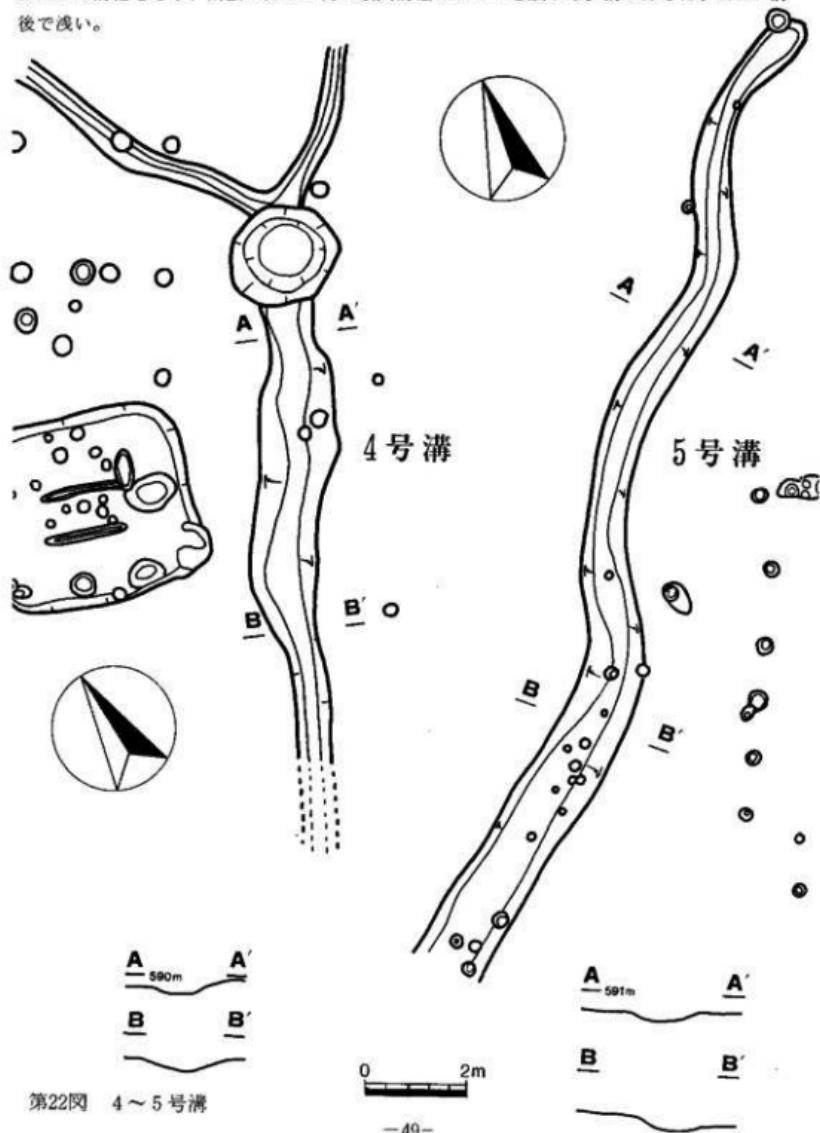
第20図 1～3号溝

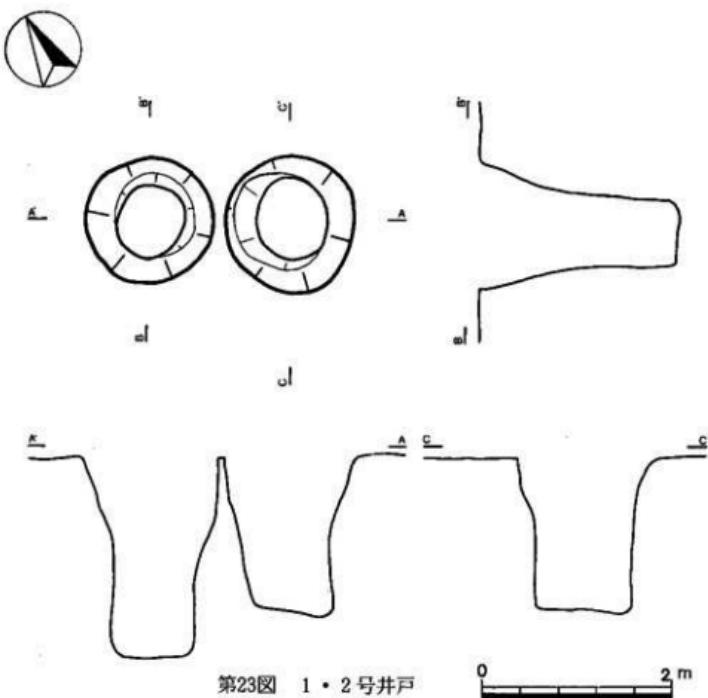


第21図 6～8号溝

4号－5号溝

4号溝は、3号井戸の排水のため設けられたと考えられる。溝幅は井戸の淵で1m、最大幅は1.6m、井戸から約6mほどから70cmと急に狭くなつて南西に伸び南廻に消える。深さは井戸付近で10cmを測り、傾斜に伴い深くなり、南端で約20cm、形状は横へ広がつたじ字状を呈している。5号溝の形状も4号溝と同様に緩いカーブをもつじ字状で、北東部では80cmの溝幅をもち、南西に降るに従い最大溝幅は1.4mと広がる。溝の深さは、10cm前後で浅い。





第23図 1・2号井戸

1号井戸・2号井戸

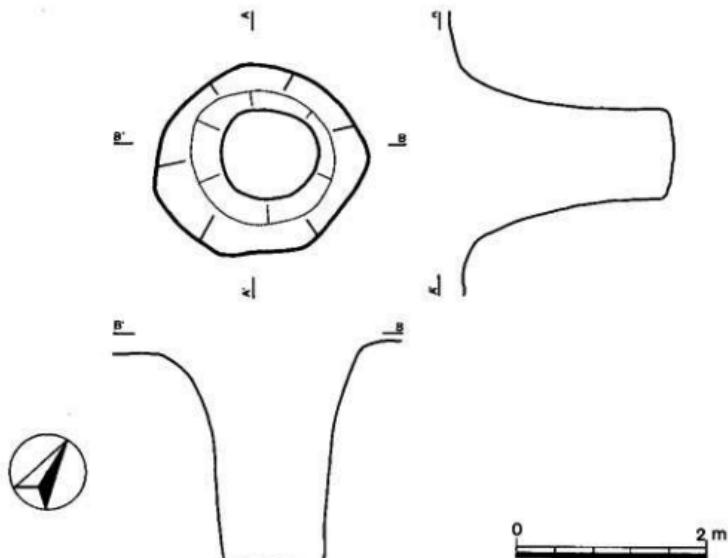
B区の北、9号獨立柱建物遺構が検出された同区域に位置する。

隣接する2つの井戸は素掘りで、高低差をつけて掘られており、平面形は円形で、底に向って漏斗状を呈している。

1号井戸の上径1.4m、下底径0.8mで、深さは確認面より約2.1mである。

2号井戸の上径1.4m、下底径0.8mで、深さは1号井戸より浅く、約1.7mで1号井戸に接する側の底はやや浅い。1号井戸では確認面から約0.6mの深さに投げ込んだと思われる大小の河原石があり、底にも2、3の石を認めた。2号井戸にも石は約0.8mの深さにあり、底に近いところからも認められた。

遺物は、1号井戸の深さ約1.6mで栗と思われる木片(4cm×25cm)1のみである。



第24図 3号井戸

3号井戸

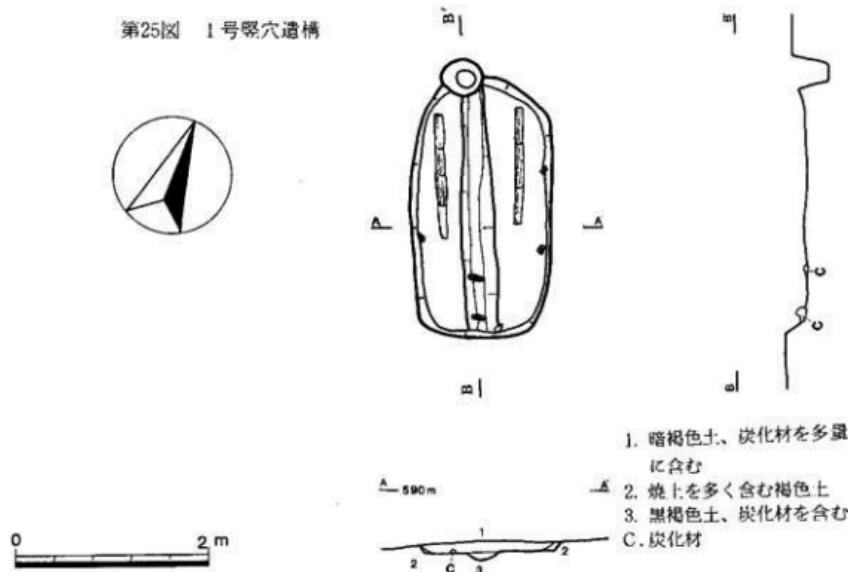
2号住居址の北東にあり、6号、7号溝が水を注ぎ、4号溝が排水のために使用されたと考えられる3つの溝を付属して掘られている。

平面形は、ほぼ円形で、1号2号井戸と同じ漏斗状に掘られ、素掘りである。
上径は約2m、下底径1.1m、深さは確認面より2.4mである。

確認面から約40cmまで、投げ込まれた河原石が埋まり、それらの集積した石の最下部から石臼〔第27図(1)〕が出土した。

更に20~30cmの深さから、1号井戸から出土した木片と同じ材質の木片が2本検出された。
5cm×28cmと、5cm×26cmを測る。

第25図 1号堅穴遺構



堅穴遺構 (第25、26図) (図版22~14)

堅穴遺構の形状はいずれも細長く、楕円形或いは隅丸方形をしている。いずれも堅穴内で火が炊かれて全体に焼成をうけている。覆土中には多くの炭化材がみられる。

1号堅穴遺構

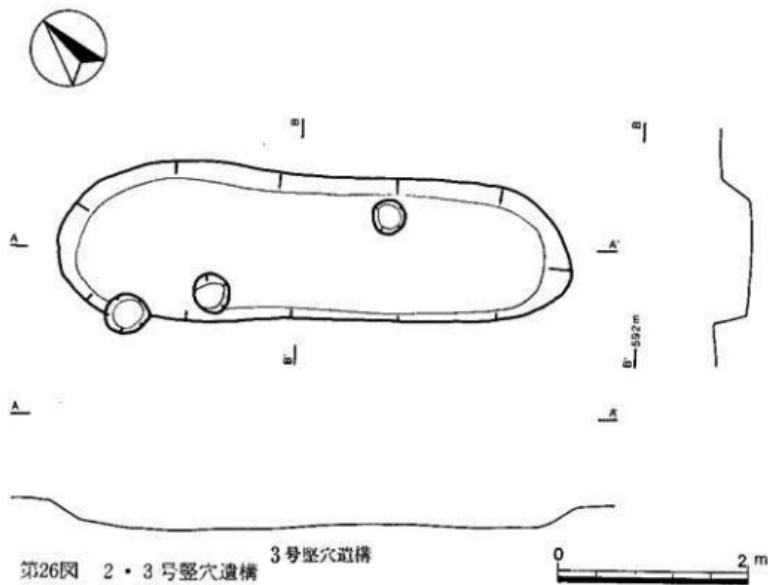
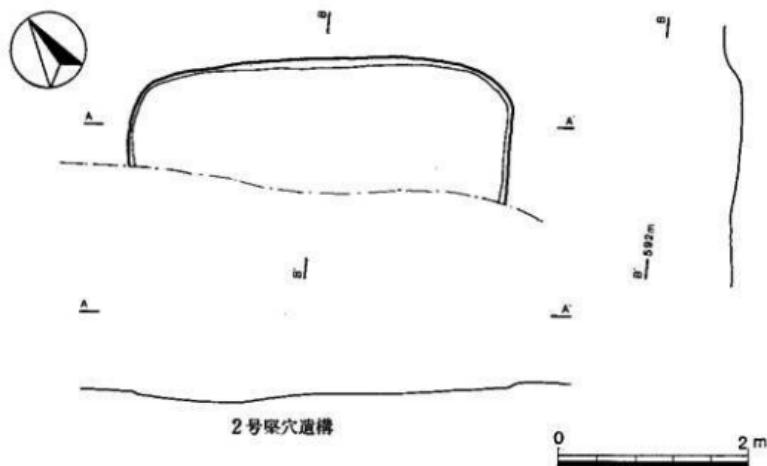
遺構は6号掘立柱建物遺構の西、8号掘立柱遺構の南西から検出され、長軸はN-21°Wを測る。形状は隅丸方形を呈し、長軸約2m70cm、短軸約1m50cm、深さは北辺で約10cm、南辺で12~13cmが測られる。床面は全体に焼成をうけており、太さ12~13cm、長さ約1.5mの2本の炭化材が覆土中から検出された。加えて、南辺中央と東辺に2ヶ所、西辺に1ヶ所、柱状の炭化材も検出されている。又、遺構の南北の壁を結ぶ1本の溝が発見された。溝幅は約30cmで、深さは床面から20cmを測る。出土遺物は、全く検出することが出来なかった。遺構は、北辺のやや中央から検出された約30cmの直徑をもち、深さ42cmの柱穴によって切られているところから、掘立柱建物址以前に活用された遺構と考察する。炭化材については、(3)まとめに後述する。

2号及び3号堅穴遺構

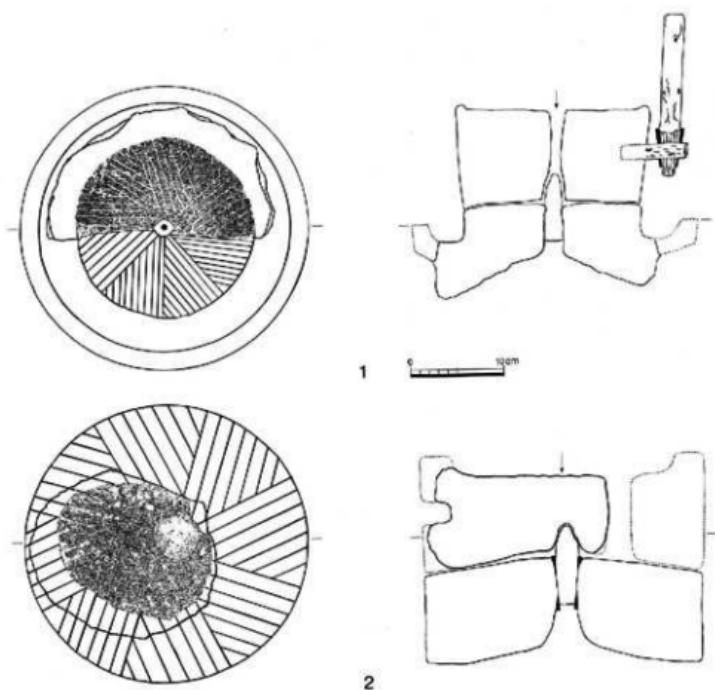
2号堅穴遺構は、4号掘立柱建物遺構の北西に位置し、主軸はN-54°Wで、遺構の半分が耕作により削平されていた。遺構の形状は細長い隅丸方形で長軸が4mで北西から南東の向きに構築され、北西の壁の幅は90cm、南東の壁の幅は1m10cmが測られ、遺構の深さは最深部で約13cm、南東壁側で3~4cmと浅い。長軸の北東部の壁ぎわに焼土が検出されたが、炭化材は少ない。

3号堅穴遺構は、細長い楕円形を呈し主軸はN-46°Wで、長軸は5m40cm、短軸が北面で1m70cm、南東で1m50cmと、やや北西部が幅が広い。遺構は北から南へだらかな傾斜

地に位置するため、深さは長軸の北側で20cm～30cm、南側で17cm～22cmを測る。底部は長軸の中央が凹状を呈し、北西部がきわだって焼成をうけていた。黒褐色の固い覆土中から炭化材が検出されている。3号掘立柱建物遺構の柱穴によって遺構の壁がきられていたところから、掘立柱建物址より以前に構築されたものと推定される。



第26図 2・3号竖穴遗構



第27図 石臼実測図

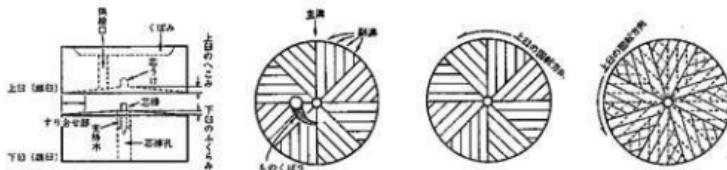
その他の遺物

石臼（1）〔第27図（1）〕

(1) 6号掘立柱建物造構のP 41の底より約40cm 浮いた状態で出土した。角閃石安山岩でつくられ、多孔質粗しう質で比較的に軽い。抹茶臼の下臼と考えられる。約1/2が残存し、うけ台の外縁は破損している。不鮮明ではあるが、溝（目）の断面形状はV字形である。また主溝と副溝の組み合せの関係からみて微粉碎効果をねらった細目の対角平行溝で8分画（6～10溝）の反時計方向パターンであると思われる。抹茶臼の特徴としては、上臼の芯棒の孔が供給口をかねているため、芯棒と孔との間に上臼自体がぎりおちない程度の遊びをもたせている。これは、作業時での上臼の動きを完全な円運動ではなく、不規則な振動をおこさせることにより下臼のすり部の外縁（すり合せ部分）においての微粉碎効果を高めている。そのため、下臼のすり合せ部分の磨耗はかなり激しかったと思われる。これら抹茶臼の構造の仕組みから起るとと思われる下臼における、すり合せ部分の激しい磨耗は、この石臼にも明確にあらわれている。信州系は六分画が多く八分画は近畿系に多い。

石臼（2）〔第27図（1）〕

(2) 3号井戸の上層部集積内より出土した。角閃石安山岩より重く、ちみつ質の輝石安山岩でつくられている。上臼の約2/5が残存し、遺存状況はきわめて悪い。溝（目）の形式や本数や断面形状は、磨耗と破損により、明確ではなく、拓本による、わずかな陰影により8分画（7溝）、反時計方向パターンの対角平行溝と推定される。この石臼の芯の孔は、完全な中心にきておらず、微妙にずれている。また、中心附近のふくみが、部分的に大きな所がある。



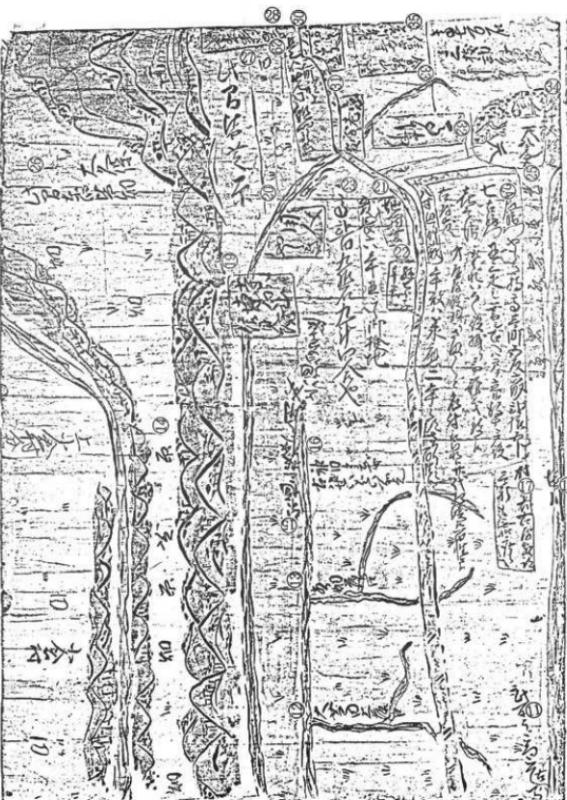
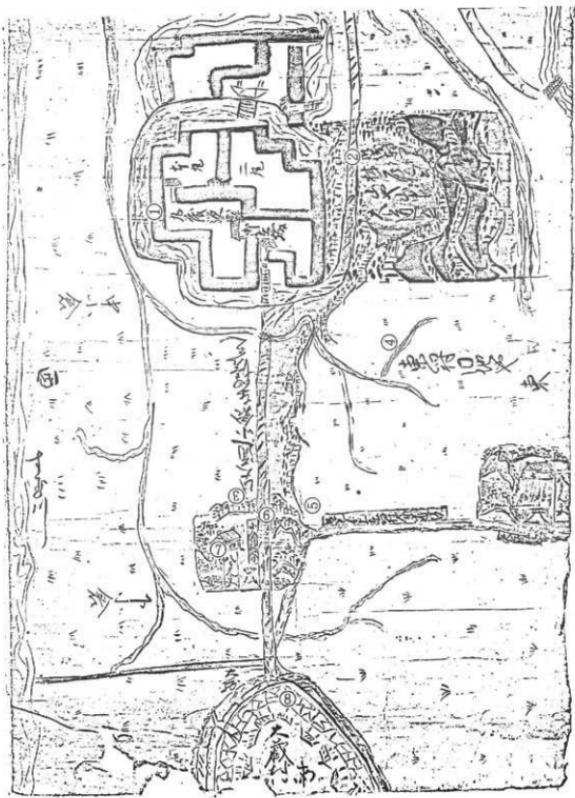
第28図 石臼説明図

石臼の名称説明 ①～⑥

1. 主溝 (Master-furrows)。これは、石臼の中心から放射状にのびる、基本となる溝のことをいう。
 2. 副溝 (Secondary-furrows)。主溝に平行に等間隔に並ぶ溝のこと。またこの副溝には、通気作用 (ベンチレーション) がある。これは、石が熱をもつのを防ぎ、植物性の物質を変質させない作用がある。
 3. 分画 (Quarter)。主溝によって区分され、その1つ1つが等しいパターンによって組み合さっているものをいう。
 4. ふくみ。上下臼の外縁から中心にむけて $\frac{1}{3}$ ~ $\frac{1}{4}$ が接触しているのに対し、その場所から中心にむけて次第にひろがっていく。そこを、ふくみという。ふくみには、一旦、穀粒を含み、次第におくり出すという作用がある。抹茶臼においては、このふくみ部分が非常に小さく、なおかつ、精度を必要とするので最高の技術を要するとされている。
 5. すり合せ部。上下臼の外縁から中心にむけて $\frac{1}{3}$ ~ $\frac{1}{4}$ 接触してある部分をいう。すり合せ部には、ふくみからおくり出されてきた穀粒をより細かく粉砕する作用をもっている。
 6. こぼれ目。臼とり作業の際に、副溝と副溝との間に欠けやすい部分があり、それを防ぐために、あらかじめその部分に溝を入れておく。これが、こぼれ目である。このこぼれ目は本石臼には、見あたらない。
- なぜ反時計方向なのか？ 右手で臼をまわし、左手で穀粒を入れる作業を行なう関係上両方の手を内側へかき込むようにする方が作業しやすいためであり、また押す時に力を加えると体重をかけながら右手をまっすぐのばす方が力を入れやすいからであろう。（これは、右手利きと考えた場合である。） 清水仁量

(2) 古絵図（巻頭カラー、第29図参照）

- ①丸茂彈正殿御在城 「甲斐国志」卷之百十二、一丸茂右衛門尉小倉村、丸茂氏ハ小笠駅長清ノ後ヨリ出ヅ彼ノ譜中ニ見ユタリ身延、過去帳ニ妙道、逸見、小藏丸茂右衛門尉トアル是レナリ…。弾正については不明であるが、一時期丸茂氏が中尾城を支配していたものと思われる。
- ②御城東つづき林石（ヘイシ石）と言う山也。山中に大道有 ③此大通小倉東向境也
- ④東向村田地也 ⑤是より上東向村分道境 ⑥小倉村分 ⑦八まん宮（現在あり）
- ⑧大蔵村 ⑨上神取へ行く道 ⑩市ノ口
- ⑪馬捨場 ⑫大芝内上落口 ⑬あか畑落口 ⑭原、芝原、畑
- ⑮此坂三枝様への用成、上は 八間口口 ⑯神田之墓所、古はせいばい所也
- ⑰村之者古屋敷跡、三軒も御座無候 ⑱塙川
- ⑲寺ハ東向山信院見 ⑳川人やしき ㉑地蔵堂 ㉒孫七郎子尊堂
- ㉓慶長六年丑之御検地 一高式百九拾石斗四合也（西暦1601）
- ㉔市左衛門やしき持高毫町五反六畝式拾五歩、七右衛門丑三疋之幕し右へ八戸立て候、戸役者兵衛恵られいろいろ役掛りに而、難儀致候、古屋敷弟屋敷役掛りさまざまと名付けとられ候世代相続候、百姓に候、年数は永応二年之頃さかりの百姓に候（西暦1653年）
- ㉕足より直に岩なり ㉖此間東向皆畠 ㉗此間皆芝原
- ㉘三町程上是より先に組やしき ㉙此間皆原地 ㉚あみだ堂有
- ㉛家老屋敷 ㉜馬場 ㉝金龍山信光寺十七石御朱印 ㉞東岩十文程行
- ㉟高七百石三枝勘解由左衛門屋敷なり 「甲斐国志」卷之九十七に「…三枝勘解由左衛門尉守友 虎吉ノ長男ナリ初メ宗四郎、軍鑑ニ作宗次郎奥近習六人ノ一人ナリ足輕隊将トナリ騎馬三十、足輕七十人改勘解由ト…系図永禄七年（1564）守友廿七歳為ル五十六騎ノ隊将ト云云。」また「…天正三年五月廿一日長篠ニ戦死ス年三十八、法名墳寺詳カナラズ…」と記されている。三枝土佐守昌吉は江戸初期の当地方の領主で、「軍鑑ニ奥近習五人ノ一人ナリ使番十二人衆トナル平右衛門ト改ム天正壬午ノ時幕府ニ謁ス起請文ニモ土隊將ノ内ニアリ任ジ土佐守ニ大坂ノ役ニ御旗奉行タリ…」。勝頼滅亡後、家康の招降の書を得てから家康に廻し各所を転職し殊功をたて、甲斐巨摩、八代両郡の内で六千石を知行した。寛永元年（1624）丁六月九日、七十五才で没し枝元院に葬られた。



第29図 古絵図主要部

(3) まとめ

平安時代の遺構について

1、2号住居址は、10世紀後半から11世紀にかけての遺構と考えられる。当方は、9世紀後半からの集落の発見が多くなる。

開墾の時代から莊園の発生、官牧から私牧へ、そして源氏を中心とする地方武士団の成立と、甲斐國の中世を考える時、政經、軍事に亘って重要な地域にあたる。

今回発見された2軒の住居址は、その中にあって、毎年一定数の馬を宮廷に納める「駒索」の時期に該当する。

1号住居址の西に位置する1～3号溝は、1号掘立柱建物遺構より古く、特に1号溝からは平安時代の土器が數片出土している為、1号溝は1号住居址と同時期の可能性が強い。

溝は「木ノ下、大坪遺跡」の報告にも、時期不明のものとして3例ほど挙げられており、この他の末報告の中にも類例を見る事ができる。

近年、鐵関係の重要な遺跡の発見がなされ、又、当方の多くの遺跡から鐵器のほかに、
ゲやフイゴの羽口出土例がみられることなどから、大量の鐵製の道具を必要とした開墾が広く
行なわれ、溝の掘削など、予想以上の規模で行われた可能性が強く今後の調査事例に期待したい。

註① 近くに大豆生田遺跡、大小久保遺跡、湯沢遺跡がある。3遺跡とも布目瓦を出土しており、この地域が「官牧」地帯の中央に位置する事とあわせて、重要な地域であったと考えられる。

② 「延喜式」によると御牧は甲斐に3ヶ所、武藏4ヶ所、信濃16ヶ所、上野9ヶ所、計32ヶ所置かれ、甲斐では3牧で60疋、武藏4牧で50疋、信濃16牧で80疋、上野9牧で50疋を朝廷に貢馬しており、甲斐は他国に比して規模が非常に大きかったことがわれる。甲斐の3牧は、いずれも北巨摩地方に推定地をもち、武川村牧の原に真衣野牧、韭崎市穂坂町の穂坂牧、高根町念場原の柏前牧が想定されている。

これらの3牧を掌握できる位置が須玉町若神子周辺にあたる。

③ 「甲斐國志」によれば、甲斐源氏は須玉町若神子に居を構えた新羅三郎義光を祖としている。

④ 昭和56年発掘調査した須玉町大小久保遺跡が山梨県初の土師製作址の発見となり、山梨編年Ⅶ期既ち、9世紀第四半世紀に位置づけられるが出土している。

⑤ 「木ノ下、大坪遺跡」 大泉村教育委員会(1983)

⑥ 「東原遺跡」 大泉村、「青木北遺跡」・高根町、など小鐵冶遺構が発見されている。原鐵の生産を諱訪地方に求められ、鐵器生産で重要な地位を占めると想定される当方が、鐵製品による経済力、開墾能力と農業生産力の増大について、今後の事例が待たれる。

中世以降の造構について

この城の立地は当地方の他の城に通常見られる、独立丘の頂上部、尾根の先端部、山の頂上部、尾根の最高所という場所でなく、斑山から南北方向にしだいに低くなつて延びる尾根の中間部という特殊な場所にあたる。

⑤

形式は発掘調査では、はっきりしなかつたが絵図によれば本丸と二ノ丸の他、四カ所の郭に別れる複郭式である。

⑥ ⑩

造構の特色は北と南に比較的規模の大きな堀で城を守り東西は河岸段丘の急崖をもつて守りとしている。又、城内には平坦部が多く、井戸や多数の掘立柱建物址群が確認されている事などから多くの軍兵が滞陣する事が可能であったと推察される。

防御の主体は北より南方面にあつたと考えられる。特に塩川側は最も守りの堅い地形をしている。反対に北は尾根をひかえ尾根からは城内を一望できる為、最も防御が弱い方向であると考えられる。この事と直接関係ないかもしれないが、この尾根上にある町営多麻団地附近の地名を「ジンガハラ」あるいは「ジンガソリ」といっている、北に弱点をもつこの城を背後で守った事の遺名であるかもしれない。城の弱点のある方向にその城が守るべき拠点や本拠がひかれ、反対に守りの堅い方面に敵の存在があつたと考えるのが常識的と考えられる。尚、城の背後にある斑山には金山と推定される比較的規模の大きな施設がある。今回確認された城域は立地、規模等から考えると戦国時代も後半のものであると推定している。

以上のことからこの城は、1、敵対する勢力が塩川対岸方面からくるもの 2、味方の拠点及び重要地が斑山から須玉川流域にあるもの 3、比較的多数の軍勢を動員させる事ができたものの、の3点があげられる。これらの条件を満たすような時期は大きく2時期があげられる。まず武田家の領国形成期の最後の抗争であった。永正・享禄年間の辺見の今井氏を中心とする戦いである。この時参見できる「浦」が中尾城という説があり、「妙法寺記」には以下のような記述がある。

永正16年（1519年）当国内浦ノ（今井）兵庫殿、屋形様ト取合玉フヘキニ定マリ、今日ノ明日ノ卯月（四月）迄モ不息。

享禄5年（天文元年1532年）此年九月浦ノ（今井）信本（元）武田殿ニ敷ヲ被食候、去間信州ノ衆大勢雷ハ養候時、浦ヘコモルリ被食候、去程ニ一国寄テ浦ノ城ヲ責被食候、サレトモ終ニ浦信本（元）劣被食候而屋形ヘ降参申候、去間城ヲ屋形渡シ申候而、ヒサシタニ御ツメ被食候、一国御無異ニ成候。

とあり、「浦」に信州の兵を含む大勢の兵が滞陣し、甲府市方面に勢力をもつ武田信虎がその支配下にある国人たちを総動員して攻撃を行ない遂には降参して城を明け渡したとある。この浦の城を中尾城の北東で塩川の対岸にあたる江草の獅子吼城とする説があるが塩川左岸にあるこの城は右岸城、中尾城方面から八ヶ岳南麓地域に拠点をもつ勢力には不利な点が多い、すなわち、天正壬午の乱（1592年）の際、若神子に本陣を置く北条勢の一部が滞陣し、斐崎方面から穗坂方面にかけて布陣した徳川勢の攻撃を受けた。この時、救援にむかおうとした北条勢が塩川を越えられず、遂には落城したという事があり、塩川を渡る兵力の移動には大変不利な城である。又、この城は平坦部が少なく大勢の兵力が長く滞陣するにも不利な城であったであろう。

次の時期は先述の天正壬午の乱があげられる。『甲斐国志』卷之四十七には以下の記述がある。

○中尾ノ墨蹟 小倉村 方三十二歩平坦ニ墳アリ高サ式間許り里人清光時代ノ墨ナリト云ウ村名ニ因ルニ昔シ屯倉ヲ置キシ处カ又天正壬午ノ時ニ増築セシナラン……とある。

このほか、この城に関する史料として 北巨摩郡誌^⑩に「武田信光の居城にして、後信玄の時に至り、小幡山城守虎盛の子、主計頭又兵衛……功によって中尾城を賜はるを、十五・六年前迄は滝渠外郭を存せしが、今は田圃と化して、附近に町田・籠田・女郎田・番殿等の名称残れり」とある。

今回の調査で確認された遺構、遺物の年代を現時点でどこに位置づけるかは困難であるが、今後の土師質土器の編年成果に期待し、かつ、柱穴等から出土した炭化物の年代測定などを実施し、さらにふえつづける周辺町村の研究成果をふまえたうえで結論づけてゆきたい。

註⑦ 卷頭図判（古絵図）の黒く帯状になっている部分が土塁であると考えられ、そのまわりを掘や崖が囲んでいる。郭はそれら土塁や堀などによって大きく6つある。

⑧ 図判18、19参照

⑨ 図判2-2 参照

⑩ 図判1、図判2-1 参照

⑪ 傾斜は少しあるがほぼ平坦な地形で、現在工場敷地となっている所でもさほどの比高差はなかった様である。図判6は丸茂種市氏所蔵の10数年前の貴重な写真である。上段の左は工場建設前、県道方面から北へ丸茂氏宅とハッ岳を望む。上段右は現在、工場駐車場附近から西南方向で若神子坂の北城（図判4-1a参照）を望む。中段・下段は南から北にかけての物で建物の手前に「ぬかる田」といわれる掘の推定がある。

⑫ 井戸の年代を確証するものは出土していないが配置からみて掘立柱建物址群と同時期の物と考えている。又、工場敷地内には湧水もあったということである。

⑬ この廃坑に関する伝承が全くなく、信玄以前のものかもしれない（第1図、図判3-2a・5参照）

⑭ この城の軍略的意味から単純に考えると3つになる。

⑮ 今井氏の別称が浦であることの考証は廣瀬広一氏『武田信玄伝』にある。

⑯ 第1図及び図判2-1・3-2 参照

⑰ 若神子の本陣と獅子吼城の中間にあたり、南に北条方の最前線である大豆生田砦がある。第1図及び図判2-1・3-2・4 参照

⑱ 60m前後の小規模なものとして記述しているが実際は本報告のとおりである。

⑲ 義清の子で逸見冠者黒源太（1110年～1168年）と称した

⑳ 信義の子で東向に信光寺がある。

㉑ 中でも長坂町小和田館跡の調査は時代的にも近く注目される。

須玉町埋蔵文化財発掘遺蹟より出土した木炭片木片についての考察

各市町村に於いて、圃場整備事業が急テンポに実施され、宅地造成、道路新設による工事等進められ、埋蔵文化財の発掘も事業に合せて緊急発掘され調査されている。

須玉町に於いても、担当者の指導のもとに実施され貴重な出土品も何点か見受けられ当時の生活様式がしのばれる。この発掘出土品の中に木片、木炭片が混入しており、当時どのような樹木の分布があったのか、それらが何に使用されていたのか等を知る上で貴重な資料と云える。

北巨摩地方では台風の落し子ともいえる白州町のグランドキャニオンから古代の植物（F L O R A）化石が出て話題をよんだ。化石による樹木の種類はトウヒ属（Picea）であり、亜寒帯針葉樹林の分布が多くあったのではないかと専門家の間でも云われている。

今回須玉町で発掘された木炭片、木片を観察してみると、木炭片には松属（Pinus）の赤松（*P. densiflora* Sied et Zucc）や、桧科（Cupressaceae）と思われる年輪がうかびその他の部分は沈む軟かい樹木の特徴がみられた。この木炭片の中で注目したいものに、ブナ科（Fagaceae）のクヌギ（*Q. acutissima* Carruth）、コナラ（*Q. serrata* Thunb）が見受けられたことである。木炭材では最高級品の材料であり、松桧類の軟らかい炭で早く火をつくり、クヌギ、コナラ類の炭で長時間火をもたす方法を取ったのかは判明しがたいが、同じ場所からの出土を考えた時、前記の例も考察の余地があると思う。又当時炭焼きの技術があったか疑問であるが、現在も使用している白炭（炭焼きがまの中で生木を燃焼させ土をかけて炭にする）と黒炭（炭焼きがまの中でむし焼きにしてできる炭）の製炭技術の前にふせ焼きという方法がとられており近年でも家の自家使用の目的でふせ焼きと同じ方法をとって使用している人の話を耳にした。この方法は前者の白黒炭の技術と異なることは、炭がまを造らずに土を少し掘りその中に材料の木を入れ土をかぶせて火をつけ製炭する方法で簡単に炭が作れるが品質は悪いようである。

木片については、栗（*Castanea Crenata* Sied et Zucc）の木であるが、どこに使用したか判らないが、井戸跡から出土したという調査員の話に栗は水に強い性質をもっている所から井戸のどこかに使用されたものと思われる。城郭、神社、仏閣の建立に昔から桧材栗材の使用が目にひくが、水に強いという性質の他に、木材が他の物に比較し秀れており芳香性に富み仕上りが美しい点、風格にものをいわす建築材にはうっていけの材料である。もう一つの大きな特徴は針葉樹には「ヤニ」を多く含んでおり「ヤニ」が浸透することにより耐久性に富む。これから発掘の中で垂直に土中深く入った木がみつかった場合松類か栗とみても不自然ではないと思われる。

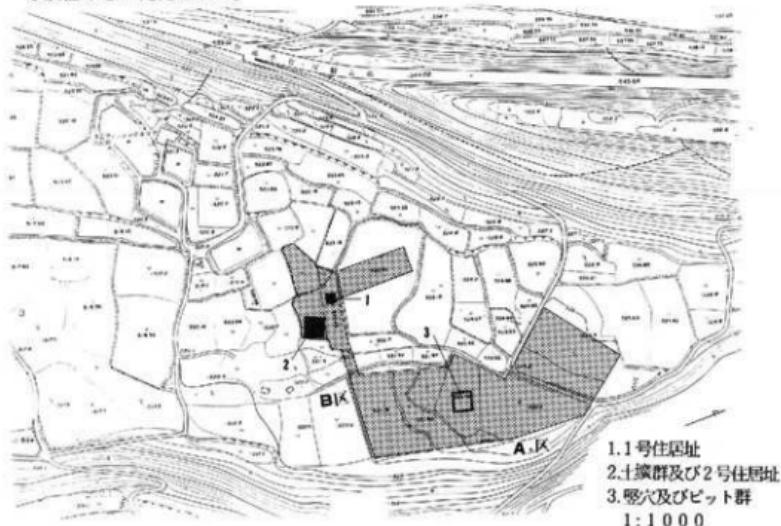
以上が今回出土した木炭片、木片についての所見の一端である。 (小尾 勝)

IV 塚 田 遺 跡

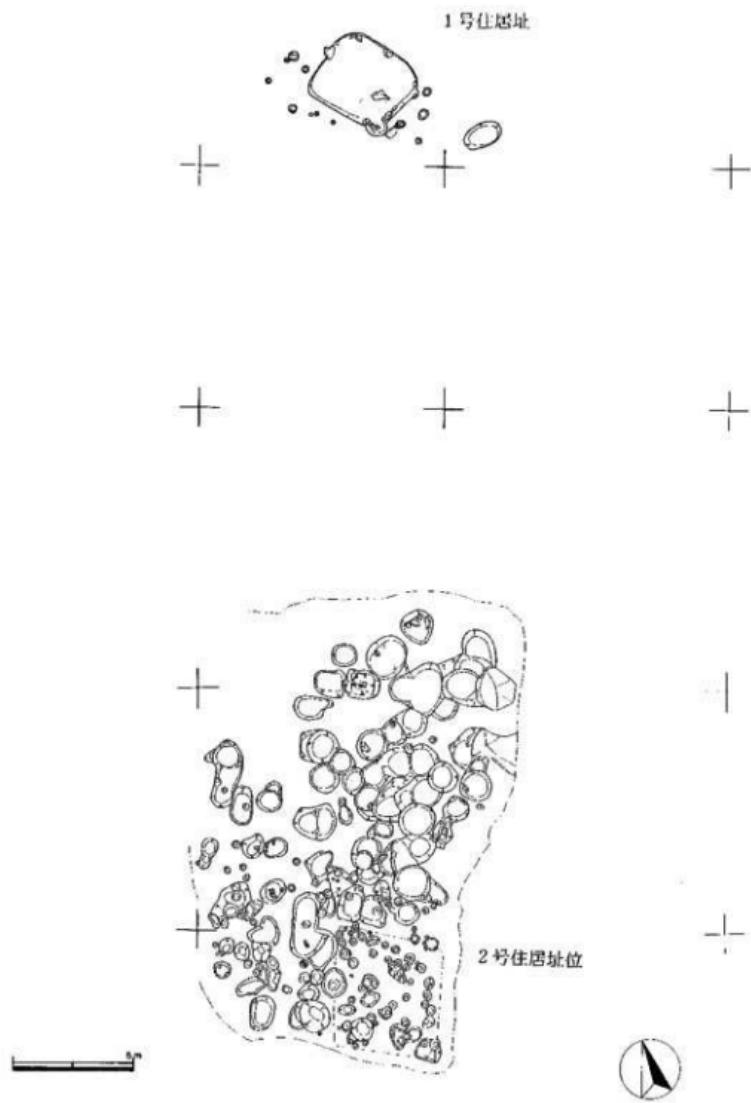
遺構の概容

調査範囲は、北は桑畠と李畠の他に野菜畠などの畠地と、南は藤田の集落まで続く水田を有する緩傾斜面である。調査区は下小倉から藤田へ通ずる塙川沿いの町道に沿って、北の緩斜面にある畠を主にした北東部をA区とし、水田が大半を占める南東部から尾根側に近い南西部の比較的平坦な地域をB区とした。A区から町道沿い南東部には、大小の礫が多く、遺構の検出には困難を極めた。第一層は耕作による有機質の黒色土層、第二層は黒褐色土層、第三層は、礫を含む黄褐色土層からなる。確認面までの深さは北東部で20cm～30cm、南東部で40cm～50cmが測られた。検出された遺構は、性格不明の堅穴及びビット群で、礫と安山岩の河原石が堅穴やビット群の底や、立ち上りに突出している。B区では、表土除去の際、二度に亘る田作りが行われたことが確認された。確認面は、低部河岸段丘上の二次堆積層で、黄褐色混じりの赤褐色土である。1号住居址は、この二次堆積層に構築された鎌倉時代と思われる隅丸方形の住居址である。住居址の西側周辺の精査に伴って、縄文土器片と陶器片が採集された。この地域より約10m南東、50cm～60cm段丘下の平坦地からは、土壇群と2号住居址などが検出された。確認面は黄褐色土層で、土壇は覆土が暗褐色土のものと、白味がかった、サラサラした砂状の明黄褐色土のもの、更に黄褐色のロームブロックが混入する暗褐色土のものがある。

2号住居址と西へ5m程離れた範囲には、こぶし大、人頭大の礫が多く、土壇域より暗い褐色土層である。出土した遺物から、縄文時代後期後半の遺構と比定されるが、耕作による削平と擾乱がひどく、平面プランで確認することは出来なかった。土壇域で表土除去中に、北宋銭と硯が発見され、2号住居址とその周辺から、天目茶碗の一部、陶器片、砥石、鉄釘と思はれる鐵器などが発見された。



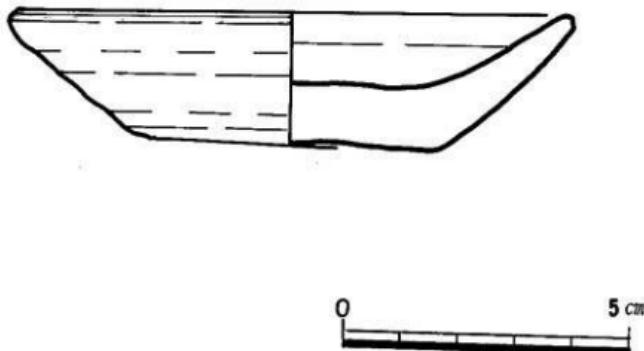
第30図 塙田遺跡調査全体図



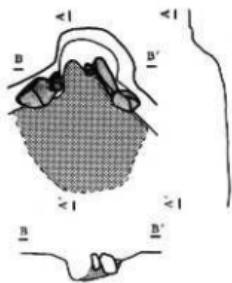
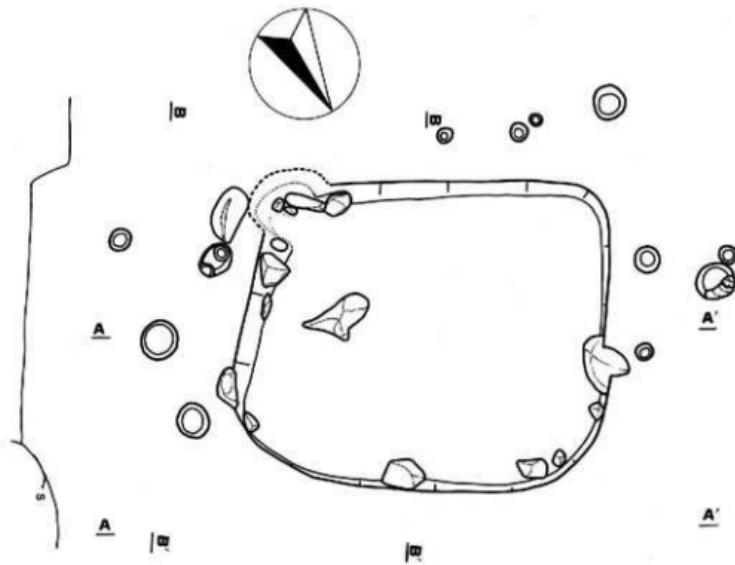
第31図 塚田遺跡B区遺構配図

1号住居址

B区南西部で発見された住居址で、低位河岸丘上の二次堆積層に構築された遺構である。確認面は、赤褐色土層で、プランは隅丸方形で北辺は3.6m、東南の壁に竈を持つ東辺は2.5m 南辺3.4m、西辺2.7mを測る。東壁と西壁を標準にして主軸はN-16°-Wで壁の立上がりは比較的良好で、北壁34~39cm、東壁36~38cm、南壁32~36cm、西壁28~41cmを測る。周溝は認められず、住居内の柱穴も全く見当らない。床面は全体的に良好で、竈は東南の壁隅にあって2、3の袖石が攪乱された状態で検出されたが、煙道や、天井石、支柱などは消失していた。焼土は、竈入口部から縦1.1m、横1.4mの半円形の拡がりに認められた。東壁の近くから縦30cm、横73cmの自然石が埋まった状態で発見され、住居の中央からも縦60cm、横80cm、高さ50cm程の自然石が発見された。覆土の除去作業の段階で、多量の石を除去したので、住居廃絶後に人为的に投入されたか、流水によって運ばれたものと推定される。出土遺物は土師質の皿が1個と、竈内から山茶碗片が1個出土した。皿は口径10cm、器高2.5cm、底径5cmで、底部に糸切り痕を残し、ロクロ横などで、胎土荒く、黄褐色を呈している。口縁の一部に煤が附着している。ほぼ完形で、出土状態は、西壁隅近くの床上4~5cmの壁に、器形の半分が突きさされた状態で出土した。（第32図）住居周辺の精査中に、西壁の中央から約80cm離れた地山から猪口状の土師質土器の一部が出土し、同じ地域の精査に伴って、諸職C式に比定されるボタン状貼付文をもつ土器の口縁部破片（第47図No.4~No.14）などが出土した。



第32図 1号住居址遺物実測図



第33図 1号住居址

2号住居址

B区南東部で土壌の南から検出された。縦横約5mの範囲に柱穴と土壌を伴った規模と推定されるが、東側調査範囲限界の壁隅に、わずかな住居址の立上がりが認められただけで、プランは削平によって搅乱されており、住居址を検出することは出来なかった。

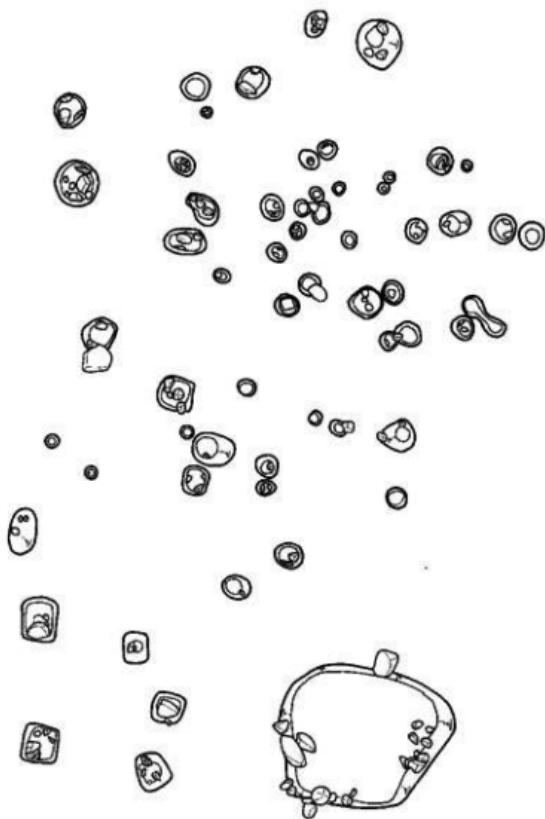
柱穴は、中央付近に認められ数個の土壌を囲むように、北西3m、南西3mと鍵の手状を呈した柱列があり、外径は20~30cm、底径10cm~20cm前後で、深さは30cm~40cmを測る円錐形に掘られている。更にこの柱列を隔んで、東西、南北にはば等間隔の柱穴が検出され、最大径40cm、最小径20cm 前後の円形プランを持ち、深さは30cm~40cmが測られる。然しこの二本の柱列は北西部で交わり、西部は土壌で切られ、南部も調査範囲外の地域に消える。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期後半に比定される沈線による刻目が口縁に沿って施かれ、下部に突起を伴う隊線で区画した長方形の枠の文様を持った土器片や、安行1式に平行すると思われる時期の、縄文を欠き沈線による円文を施す波状口縁の一部が出土しているところから、本遺構は、縄文時代後期後半のものと推定される。

2号住居址から西へ5m程離れた範囲で土壌とピットが検出されたが、No.55No.61No.54No.56に囲まれる土壌及びピットは、形状は不定形であり、ピットも不規則な配列から、性格不明である。

堅穴及びピット群

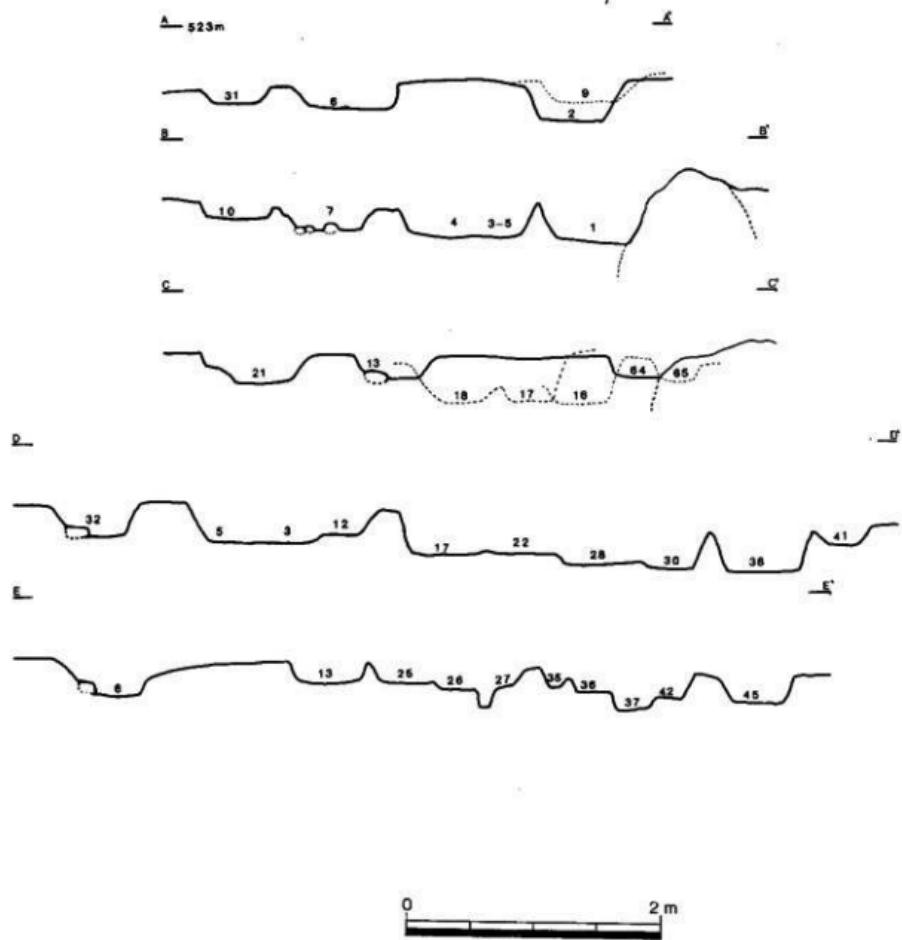
調査区域A区で検出された本遺構の層序は、第1層が耕作土で、第2層が黒褐色土で、第3層が大小の円錐を含む二次堆積の黄褐色土層である。検出された堅穴やピットは、一つとして鍵の含まれぬものではなく、堅穴の底面や、立ち上がりに突出している。規模や形状も異なり、方形のプランをもつもの9、円形プランのもの約60、皿状の底をもつ、浅い掘込みをもつもの13、長楕円形のもの3を数える。最も大きい堅穴は、隅丸方形に近い形状を呈し、最深部で約40cmが測られ、一辺は東西3m、南北3m40~50cmを測る。底面は凹凸がはげしく、大小の円錐が散在し、壁の立ち上りも、多量の岩石にはばまれ、垂直ではなく、南辺は、幅40cm前後の傾斜面をつくる。床面からは焼土も、遺物も検出されない。

表土除去中に寛永通宝1枚が北東部で、その近くから天目茶碗の口縁部片が1個検出された。これらの堅穴やピット群には規則性がなく、掘立柱建物遺構とは認めがたい。最も大きい堅穴も、土採り場の跡とも考えられ、他のピット等は、北部に桑畑、李畑が残るところから、抜根の跡に、土石が流出して埋めたか、土石が流出した土地を耕作し、やがて抜根した跡とも考えられるが性格不明のピットである。

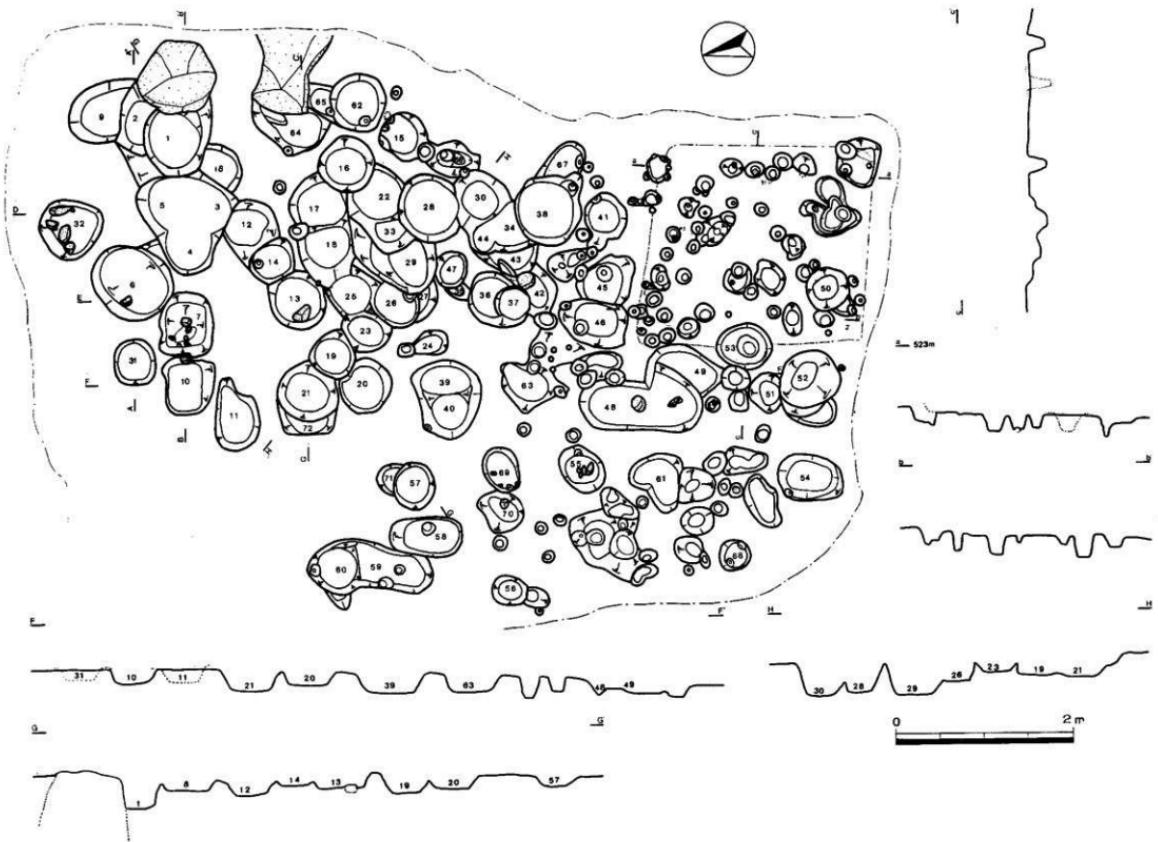


第34図 壁穴及びピット群

0 4m



第35図 土壤群、断面図



第36図 土墳群・2号住居址、平面図及び断面図

土壤群

遺構は、B区南東部で1号住居址が発見された区域と比高1m位低い平坦地から検出された。遺構は、土塹71基で、2号住居址と柱穴が一部で切り合って発見された。土塹71基のうち、方形プランをもつものが25基、長方形プランのものが18基、円形プランのものが19基、不整形のプランをもつものが19基を数える。No.3、No.4、No.5の中央部で表土下10cm程の深さから骨片と骨粉が検出され、白色がかかった明黄褐色でサラサラした砂状ローム層から若干の炭化物も検出された。表土から15cm～30cmの深さに散在していた。骨片は、No.13の表土下約15cmの深さで発見されている。No.17は（図版34）、表土下約20cmの深さに河原石が敷き並べられ、石を除去したあとからは、骨片や骨粉ではなく石の真下から鉄釘と思われる鉄器（第49図No.2）1本が出土した。方形プランをもつ土塹、No.1 No.4 No.7 No.10 No.31は、やや北よりの西へ向き、同じプランを持つNo.12 No.13 No.14 No.19 No.20は南よりに西へ向く。No.17 No.18 No.23 No.25の円形プランのものは西へ向く。西へ向くNo.22 No.23 No.29をきて、No.16 No.28があり、No.34 No.67を切ってNo.38が比較的深く円形に掘られている。これは、地形の形状や他の土塹に左右される結果であろうが方向性をうかがうことが出来る。

土壤の深さは東隅の二つの巨石に近い土壤程深く、西へ向って掘られている土壤ほど浅い。深いもので、80cm前後で、浅いものは20cmを満たぬものもあり、40cm前後のものが最も多い。方形土塹の一辺は約1mが平均して測られ、長方形のものNo.6 No.9のように、長径が1.8m、短径が1.6mを測るものもある。円形プランをもつものは直径1mを測るものもあるが平均して80cm前後である。

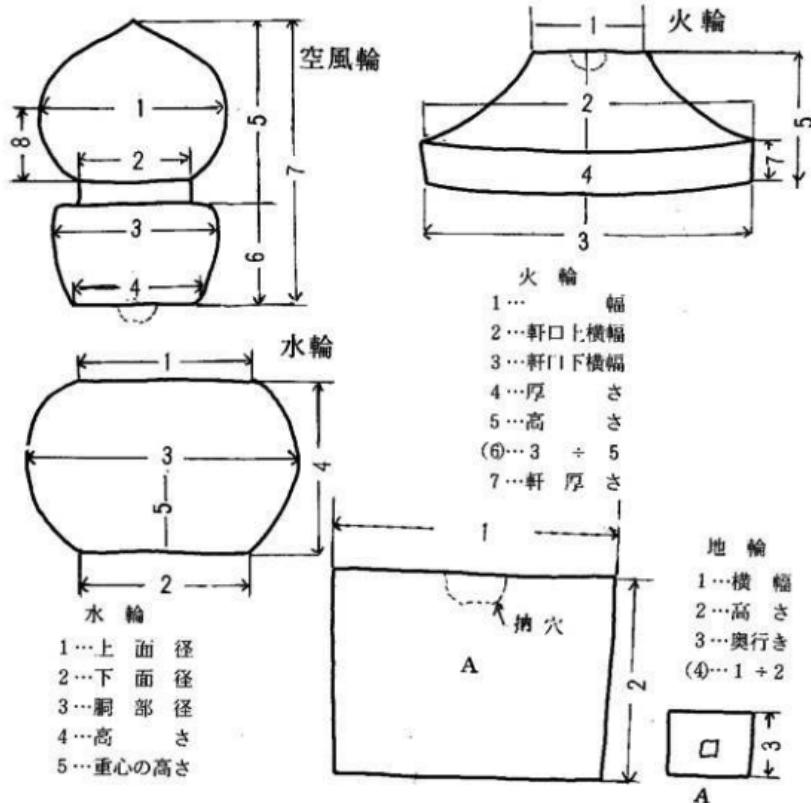
検出された土壤群の特色は、狭い地域内に方位は少しづつ異なるが、一定の方向へ掘られているものと、切り合いが目立つ。表土除去の作業中にこの区域から検出された陶器片は、古くは13世紀代の四耳壺片と、14世紀、15世紀の天目茶碗の一部及び底部、降って江戸期の飴釉の碗片等がある。（カラー図版1及び94ページ）

(2) 遺物 塚田遺跡の石造物

一、五輪塔 塚田遺跡から出土又は散在していた五輪の各部は一基（空風輪No 2、火輪No 17、水輪No 18、地輪No 17）を除いて、凡て一对として把握出来ず、年号や記銘もないので的確な判断は出来ないが、室町時代から江戸初頭にいたる範囲の五輪と推定される。発掘調査した墓壇群周辺にあった田圃を区割する石積の上に積替えられた五輪塔が散在し、排水溝の傍にも幾基認められ、石積の河原石と一緒に地輪、水輪が使用されてもいた。検出された五輪塔の石質は、角閃石安山岩で空風輪が17、火輪33、水輪22、地輪26で、他に無縫塔の完型1と完型と思われるもの1、そして用途不明な石（貫通した孔をもつ方形で半壊した石）とである。

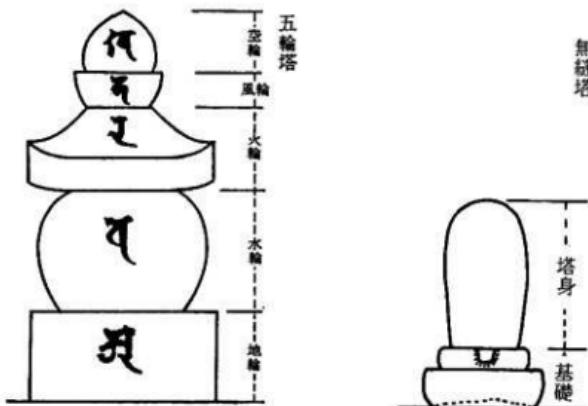
1) 空風輪 (第38図 1~17)

宝珠だけを取上げた場合、1、2、3のように蓮の蕾に似て少しおしつぶしたような、ふくらみを持った古い形式が認められ、頂点を尖らせ、両側の曲線が直線に近くなつて固い感じがする桃山期から江戸初頭のもの16、多くは頭が張り、樹ですばまる室町時代末期のものである。

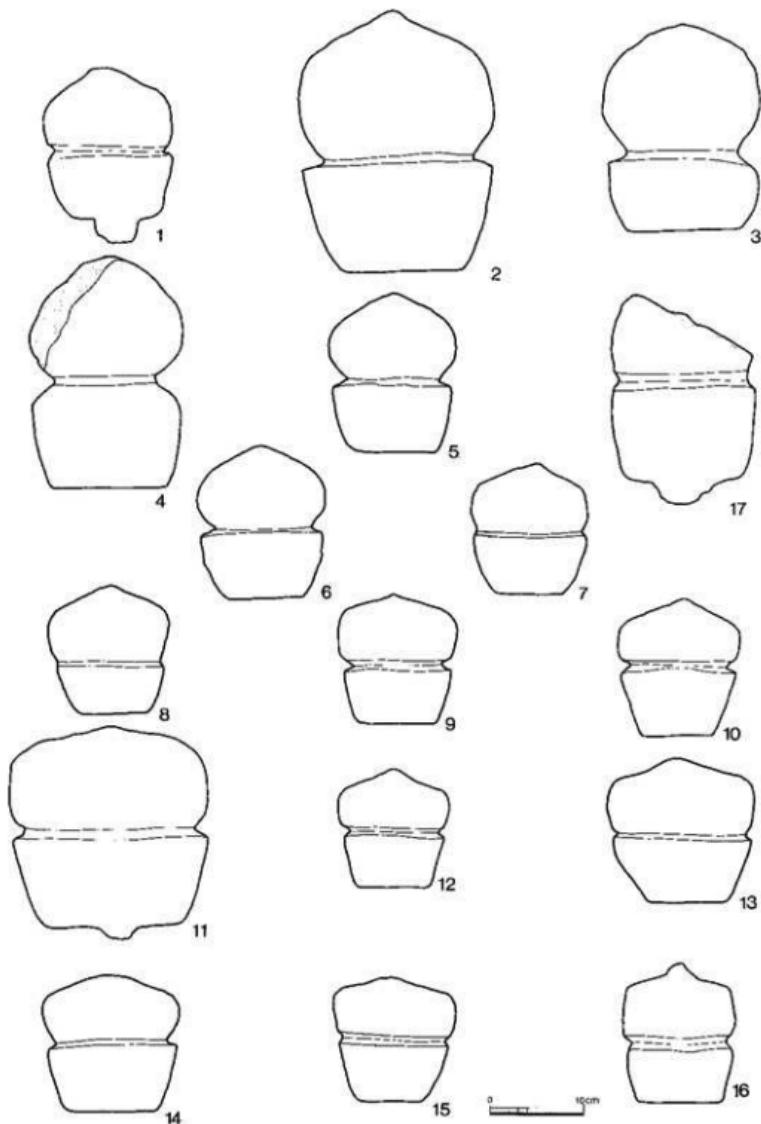


第10表 空風輪計測表

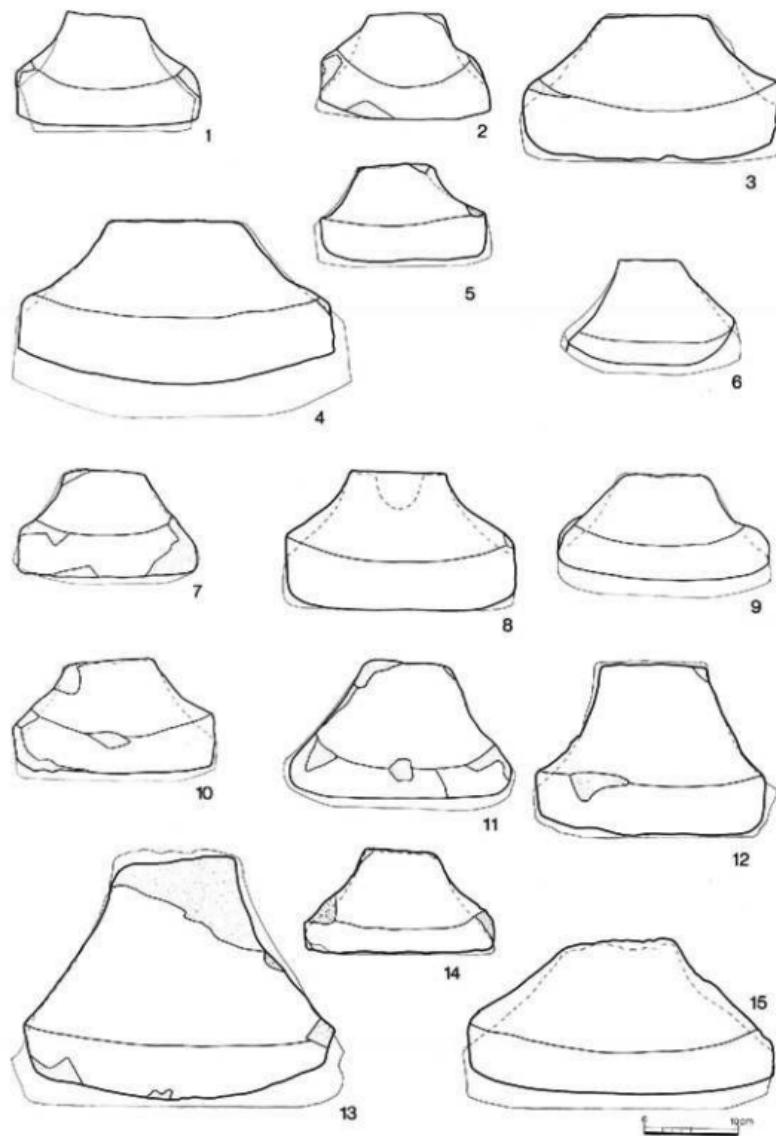
測定番号	1	2	3	4	5	6	7	8	備考
1	1.3.5	1.1.4	1.3.1	9.0	1.0.1	1.6.4	2.6.5	3.3	底部突起 中58 L 24
2	2.2.5	1.5.7	1.9.9	1.2.0	1.7.8	1.1.0	2.8.8	4.7	
3	1.6.8	1.1.6	1.5.9	1.2.0	1.6.3	5.7	2.2.0	5.6	
4	1.6.2	1.0.5	1.5.7	1.1.7	1.6.3	8.5	2.4.8	4.2	
5	1.3.3	9.6	1.2.5	7.8	1.0.0	7.0	1.7.0	3.3	
6	1.3.5	1.0.1	1.3.0	7.9	9.9	6.5	1.6.4	3.5	
7	1.2.2	1.1.0	1.1.9	6.6	7.9	6.0	1.3.9	2.2	
8	1.2.6	1.0.7	1.1.1	6.5	9.0	4.8	1.3.8	4.3	
9	1.2.4	9.2	1.1.3	7.6	8.0	5.8	1.3.8	3.7	
10	1.2.9	1.0.0	1.2.2	7.2	8.1	6.6	1.4.7	2.9	
11	2.1.1	1.7.8	2.0.6	1.4.1	1.2.1	9.4	2.1.5	4.0	底部突起 中43 L 11
12	1.1.7	9.2	1.0.5	7.0	7.3	5.5	1.2.8	2.9	
13	1.5.4	1.3.5	1.4.6	7.6	8.8	7.5	1.6.3	3.7	
14	1.4.3	1.1.5	1.3.6	8.6	7.5	7.0	1.4.5	2.8	
15	1.2.8	1.0.7	1.1.4	6.3	7.2	7.0	1.4.2	3.8	
16	1.1.8	9.7	1.1.4	8.4	9.0	5.8	1.4.8	2.7	
17	-	1.3.4	1.5.3	-	-	1.2.5	-	-	上部欠損 底部突起 中6.7 L 2.2



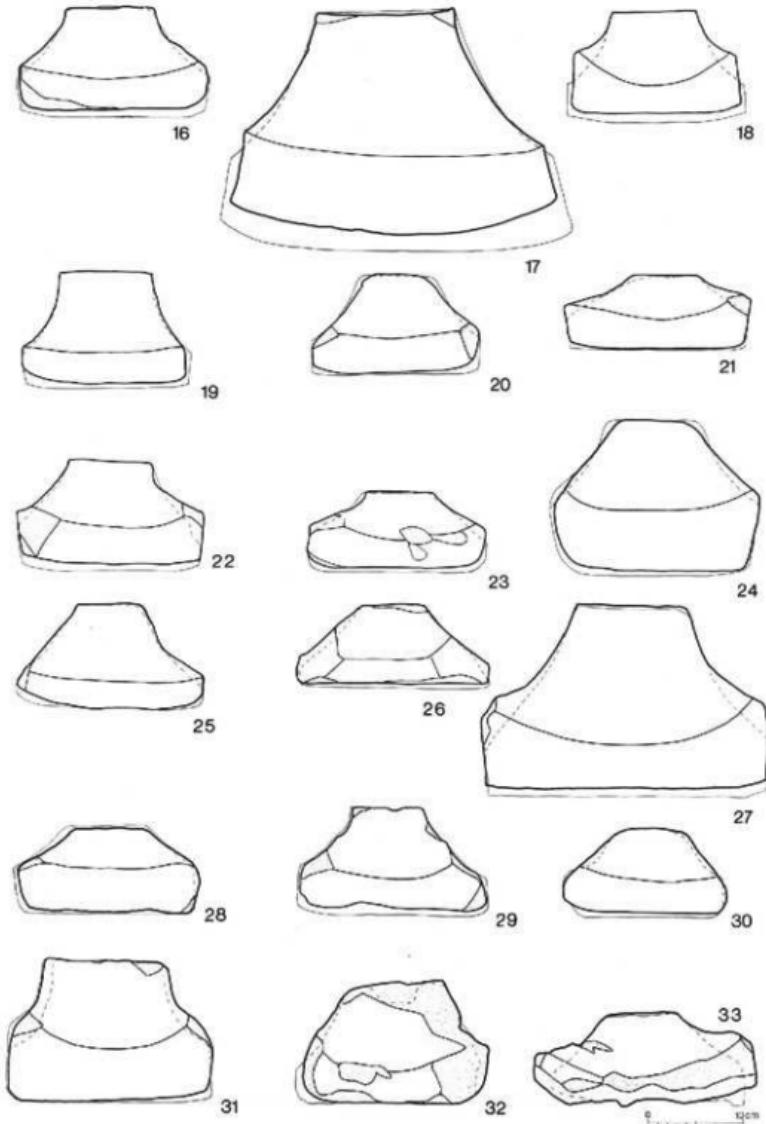
第37図 五輪塔・無縫塔説明図



第38図 空風輪



第39図 火輪



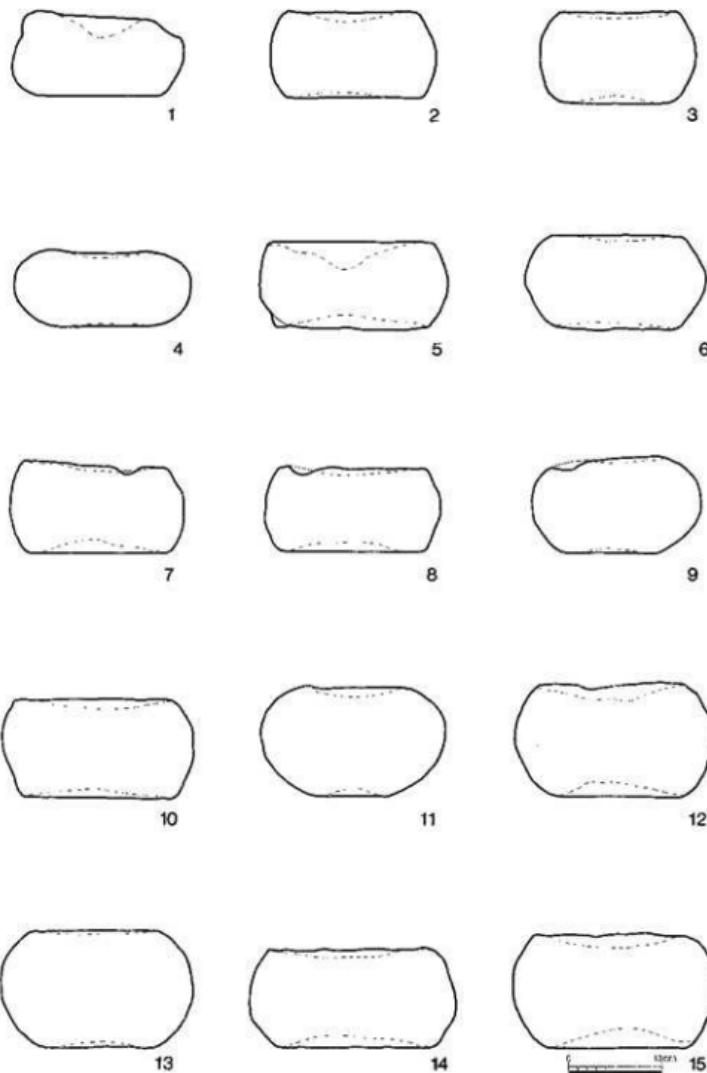
第40図 火輪

2) 火輪 (第39~40図 1~33)

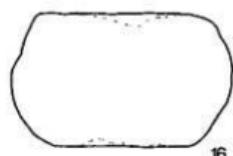
室町時代の特徴として、辺縁が厚みを持ち、隅角部が中央より厚みを増し、頂点の高さがやや低くなる1、2、3、の他に、同時期の屏風の流れと降り棟の反りが大きい13、17があり、19、31のように棟幅が広く、軒の下端が水平で上端のみ両端を反らし、軒口を内斜めに切る安土桃山から江戸初頭のものが検出されている。22、29、31は耕作や積替えによる破損が原因と見られる隅角部を欠損したものが多い。急激に小型化へ移行した室町末期の軒に反りが見られ、上辺と頂点との間隔が著しく短くなる5、10、14、16が目立ち、概して室町末期から江戸初頭に比定できるものが多い。

第11表 火輪計測表

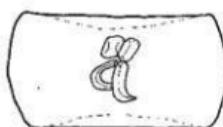
区判番号	1	2	3	4	5	6	7	備考
1	8.1	19.6	19.3	3.9	12.9	1.50	5.5	
2	8.0	16.2	18.2	3.4	11.2	1.63	5.6	
3	11.1	26.3	24.3	5.3	15.8	1.54	6.8	
4	13.8	37.2	33.4	7.1	21.1	1.58	5.3	
5	8.2	17.4	16.7	3.8	10.9	1.53	4.5	
6	6.4	17.4	16.9	2.4	12.2	1.39	2.4	
7	8.5	19.0	18.8	4.3	12.3	1.53	4.3	
8	10.3	23.9	23.9	5.2	14.8	1.61	5.2	火輪の受け穴有り 中=4.9 L=3.7
9	8.0	19.5	22.2	3.5	13.1	1.69	4.1	
10	9.4	19.7	20.6	3.4	13.1	1.57	6.0	欠損有り
11	8.4	20.6	22.0	3.1	15.8	1.39	4.5	欠損有り
12	10.4	23.7	23.0	5.3	18.5	1.24	5.0	
13	10.7	32.8	30.4	5.6	27.4	1.11	4.9	欠損有り
14	8.2	19.4	19.5	2.5	11.2	1.74	4.4	
15	10.6	30.4	31.6	4.4	18.0	1.76	5.0	
16	9.5	19.7	19.4	3.3	11.8	1.64	3.3	
17	14.4	31.4	34.5	8.83	26.0	1.33	7.5	
18	8.7	16.8	17.8	2.9	11.9	1.50	5.0	
19	9.9	17.1	17.4	3.3	12.5	1.39	2.5	
20	7.7	18.0	17.0	3.7	10.7	1.59	3.5	欠損多
21	6.7	19.6	18.0	3.0	8.0	2.25	4.3	
22	7.8	20.0	18.9	4.0	11.8	1.60	5.0	
23	7.3	18.8	17.9	2.6	8.6	2.08	3.3	
24	7.7	21.1	18.3	6.5	16.7	1.10	7.5	
25	7.0	18.7	19.0	2.9	11.4	1.67	2.4	表面にノミ削り
26	5.9	20.2	20.2	2.6	9.0	2.24	2.8	各部欠損多
27	11.3	29.4	29.6	4.6	20.6	1.44	8.0	
28	7.7	18.9	16.1	4.7	9.5	1.69	4.0	
29	7.3	18.6	20.0	3.1	16.9	1.18	4.5	
30	—	17.0	17.0	3.1	9.8	1.73	—	
31	12.5	21.5	21.8	5.3	15.2	1.43	7.5	
32	—	20.5	20.0	3.4	13.2	1.52	—	
33	6.9	22.6	23.3	2.0	10.0	2.33	3.9	



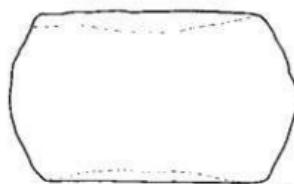
第41図 水輪



16



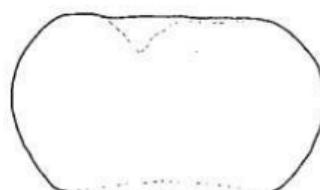
17



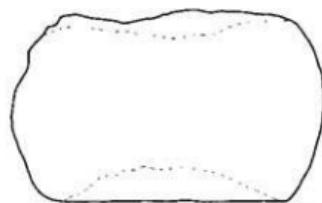
18



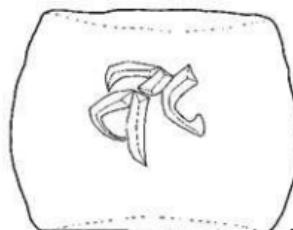
19



20



21



22

A scale bar indicating 10mm.

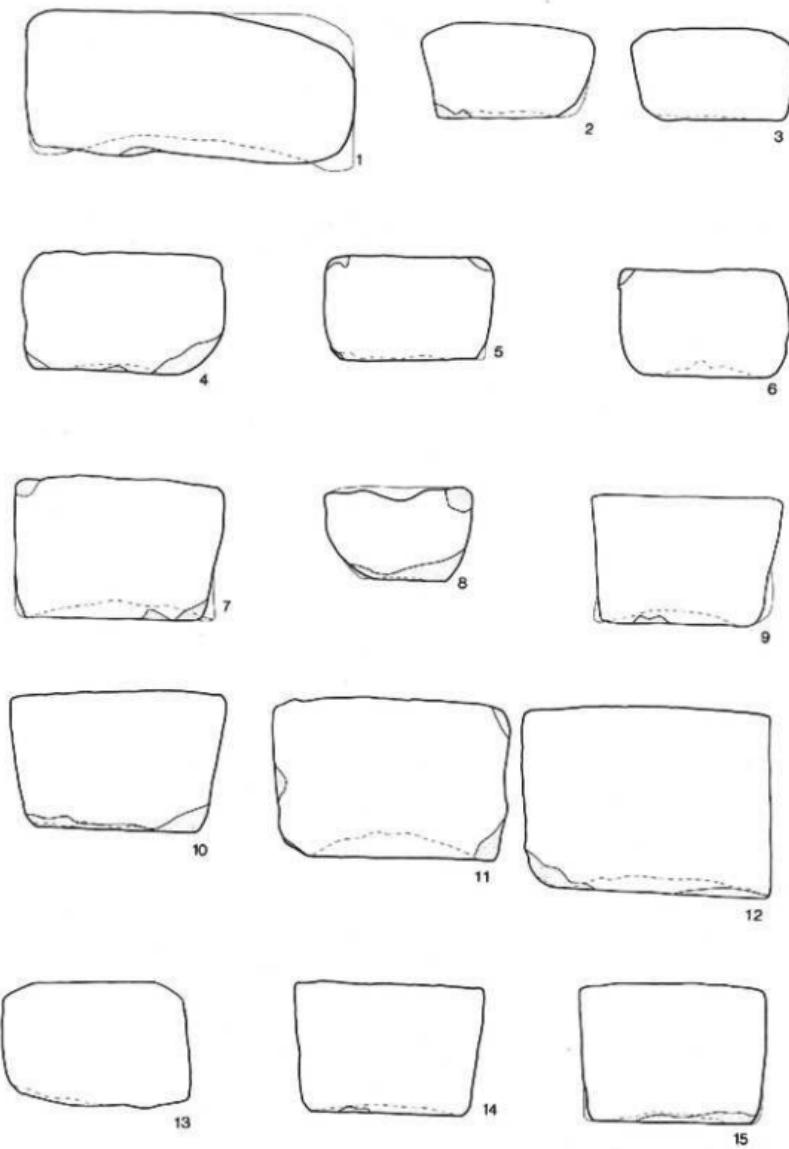
第42図 水輪

3) 水 輪 (第41~42図 1~22)

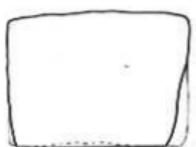
上端の径が下端より大きく、その重心、つまり、最大径が中央より高い位置にあるのが普遍的な構造形式である。鎌倉期の角張った球形や、肩が張り出し裾ですばまたた形は見当らないが、円柱形でゆるやかな曲線を持つ22は、梵字(バー)が陰刻され、その切込角度から室町中期以降のものと思われる。整美な書体と雄大な梵字の鎌倉朝や、南北朝より更に書体に力を失い、大きさも小さくまとめられている。四方五大の梵字陰刻された唯一の17は陰刻角度と形状から桃山、江戸初頭に比定される。素面の16、18、19、20、21も室町期と思われ、11、12、13、15は重心の高さが高く、張りが水輪の中央より上部にでているところから室町後期から桃山にかけてのものであろう。そろばん玉のように円形に近い形状を呈し、小ぶりの水輪は室町時代後半を上限に桃山、江戸初期と考察され、全体の半数以上を占める。

第12表 水輪計測表

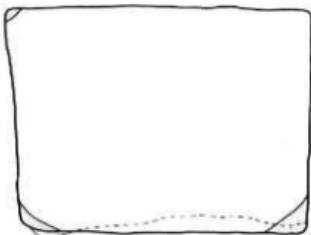
回転番号	1	2	3	4	5	備考
1	12.5	12.9	17.9	9.0	4.5	
2	13.3	14.0	17.3	9.5	4.6	
3	12.5	11.1	16.4	9.9	4.7	
4	11.5	10.0	19.0	8.4	4.0	
5	16.0	16.9	19.7	9.4	5.1	
6	13.3	13.6	19.0	10.1	4.4	
7	14.7	14.2	18.4	9.9	4.2	
8	15.4	14.4	18.5	9.2	4.8	
9		9.9	17.9	10.5	5.2	
10	15.8	15.5	20.0	10.6	7.0	
11	10.4	7.4	19.4	11.8	9.0	
12	15.8	13.0	19.7	12.2	6.5	
13	11.5	13.1	20.2	13.6	5.7	
14	16.6	16.1	21.7	10.7	5.0	
15	15.7	14.5	21.2	12.3	6.9	
16	15.7	13.7	23.2	14.4	7.5	
17	19.2	18.2	23.1	12.4	5.9	ババー パンパク 4方向に はん字有 り
18	22.6	22.8	30.3	18.2	8.6	
19.	24.9	24.0	30.2	18.0	10.2	
20	20.2	21.9	33.1	18.9	9.9	
21	21.8	24.1	33.0	24.0	10.9	
22	24.0	24.0	30.4	23.6	8.3	(バー) はん字有 り



第43図 火輪



16



17



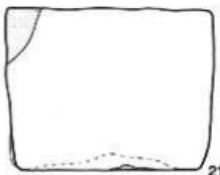
18



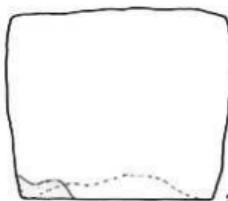
19



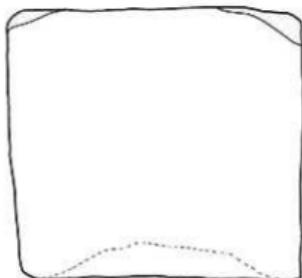
20



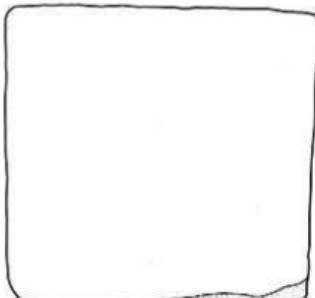
21



22



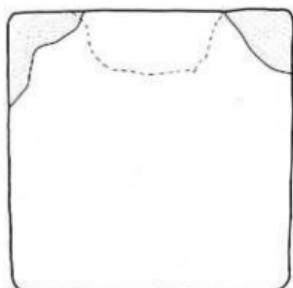
23



24

第44図 火輪

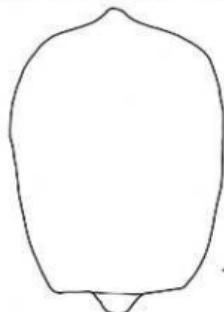




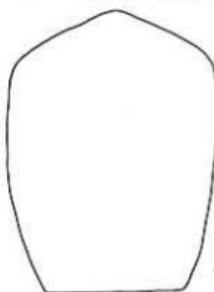
25



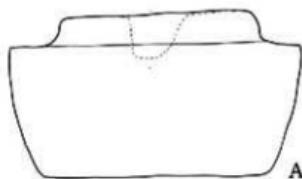
26



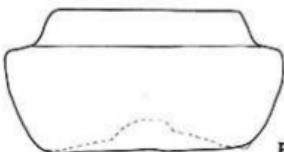
A



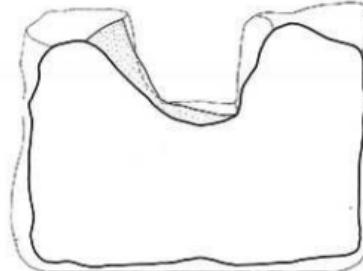
B



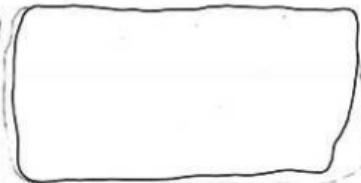
A'



B'



A''



A'''



第45図 火輪

4) 地輪 (第43~45図 1~26)

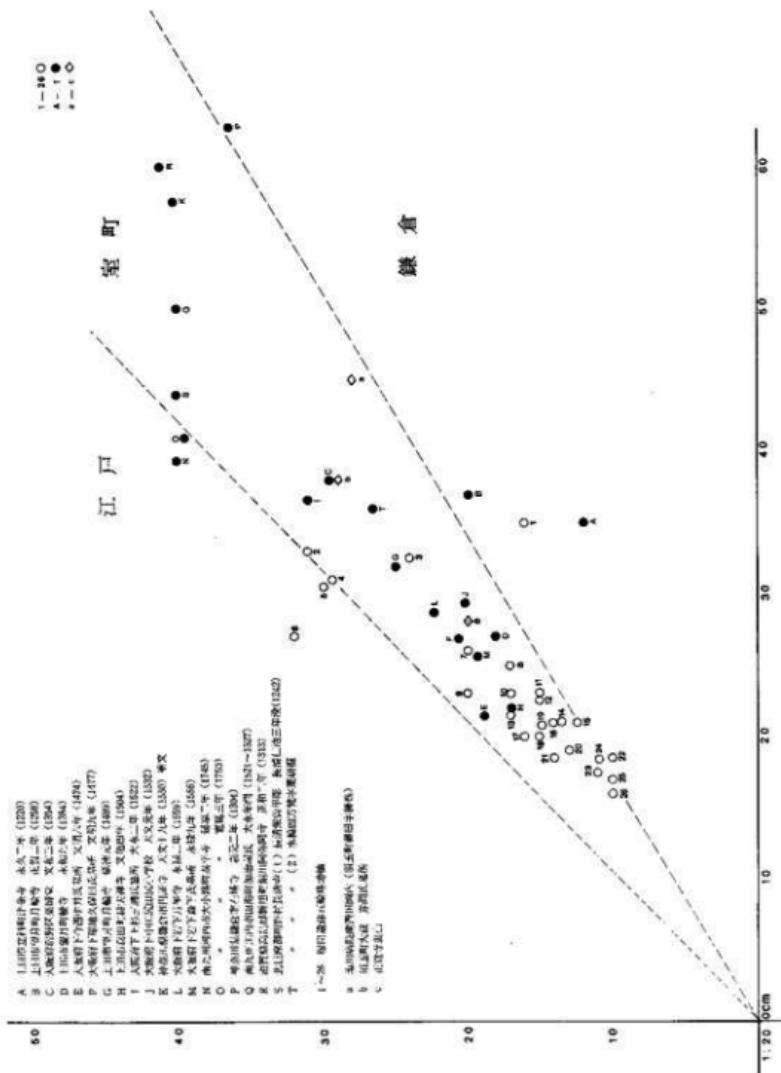
基礎の背が低い程、古いということが年代推定する場合の一般的な見方であるが、これは様式論に基づく編年であり、様式論は概念であって絶対的なものではないが、平安時代の地輪は著しく低く、江戸時代の藩主クラスの墓の基礎は巨大で、鎌倉期の地輪に劣らぬもので、数値を基準とすることは一考したいが、第43図1を形式上から測定すれば、幅に対して余りに背が低いところから平安時代迄遡ることになるが、本遺跡からこの時期に比定される遺物の全く出土していないので、室町時代に見られる地輪の台座と考えられる。だが、土壇群に伴い、鎌倉時代の陶器片が出されているので、年代推定表から割り出される編年は、更に古くを示唆しているようにも思われる。背が低いということは、高さに対する幅の比率が大きいということであり、一般に形式上、比率が1.5以上は時期的に古いといわれる。当遺跡に散在する地輪の特徴は、7、9、13、14、15、16、18のように画一化した小型の地輪が目立ち、火輪にもその傾向が濃く、生前中に造立して安楽淨土を願う逆修供養塔と思われるが陰刻がない粗面放、実証出来ない。正覚寺の五輪塔は積み替えられ、この寺域に持ち込まれたもので、藤田の南、塩川病院傍の五輪塔は、鎌倉時代末から室町初頭の造立てで、大蔵の赤岡邸墓所の五輪塔が造立される時期より古く三尺の全高である。明野村長清寺の二基の7輪塔の内、長清栄曾の字を刻む五輪塔は、文字は貪弱な平彫りで、各輪に互間性がなく、火輪、地輪に室町初期の形式が見られ、空風輪、水輪は積替えたもので、更に降る。他のキリーケの陰刻された一基は、鎌倉期末から室町初頭の造立てと考察するが、今後、細部の調査が必要であろう。

他府県の五輪塔の地輪と、当町内の3基の地輪、明野村長清寺の五輪塔の地輪、併せて塚田遺跡に散在、収集した地輪を、形態からみた年代推定表として掲げて見る。(第14表 P-87)

第13表 地輪計測表

圓側 番号	1	2	3	4	備 考
1	3.4.5	16.6	3.4.2	2.0.8	
2	1.8.1	1.0.3	1.8	1.7.6	
3	1.7.1	9.9	1.6.2	1.7.3	
4	2.1.3	12.9	2.1	1.6.5	
5	1.7.9	11.2	1.7.6	1.6.0	
6	1.8.2	11.5	1.7.9	1.5.8	
7	2.3.0	1.5.2	2.1.5	1.5.1	
8	1.5.7	1.0.0	1.5.7	1.5.7	各部欠損
9	2.0.5	1.3.7	2.0.3	1.5.0	
10	2.2.6	1.5.1	2.1.2	1.5.0	
11	2.5.1	1.7.1	2.4.7	1.4.7	
12	2.7.0	1.9.9	2.5.5	1.3.6	
13	1.9.8	1.3.7	1.9.3	1.4.5	
14	2.0.1	1.3.9	1.9.5	1.4.5	
15	1.9.8	1.4.9	2.0.3	1.3.3	
16	1.9.2	1.4.5	2.0.2	1.3.2	
17	3.2.3	2.4.8	3.1.5	1.3.0	
18	1.8.0	1.4.1	1.7	1.2.8	
19	2.0.5	1.6.2	2.0.2	1.2.7	
20	2.1.5	1.6.9	2.1.7	1.2.7	
21	2.1.6	1.7.4	2.1	1.2.4	
22	2.3.5	2.0.4	2.3.2	1.1.5	
23	3.1.0	2.9.6	2.9.5	1.0.5	
24	3.3.0	3.1.7	3.2.6	1.0.4	
25	3.0.4	3.0.0	3.0.1	1.0.1	両穴有り 中=135 L= 70
26	2.6.5	3.2.2	2.7.2	0.8.2	

第14表 地輪年代推定表



二、無縫塔（卵塔）（第37図）

中世の新型式の塔婆である無縫塔は、禅宗と共に渡来し、初めはその開山僧のみに使用されたが、南北朝から室町時代には各宗の僧侶にも使用されている。又、僧侶以外の上流人にも稀に造立されている。これは俗界を離れた寺領内に造立されるので、その出土或は散在から寺院址の存在を知る事が出来る。本来は卵形で縫目がないところから無縫塔と名づけられたが、二つの形式を持つ。一つは基礎、竿、中台、請花、塔身の五部からなる重制と、他は基礎、請花塔身の三部からなる単制である。前者は塔身が低く、後者は高い。重制の起源は古く、単制は南北朝以降で、室町時代は、重制が普遍的で、単制は末期以後に流行し、近世に及んでいる。ちなみに桃山時代以降になると、室町期から現われる塔身の頂上の尖りが現われるが、塔身の表面に短冊形または長楕円形のくぼみが刻みつけられ、法名が刻まれてくる。通常、山号、寺号、院号更に僧名、入寂年号が刻出される。当遺跡の二基は以上の点から室町時代後期を降らぬと言える。

民間信仰のたかまる室町時代は、経済生活が十分に自立化出来ぬところから、少しでも負担の軽い簡易形式のものや小型化が目立つ。粗面も荒叩きが多く、卵塔の請花には仰蓮の単弁すら見当らないのは、この時代の経済的背景を、変哲のない小さない五輪塔と形と共に微証している。

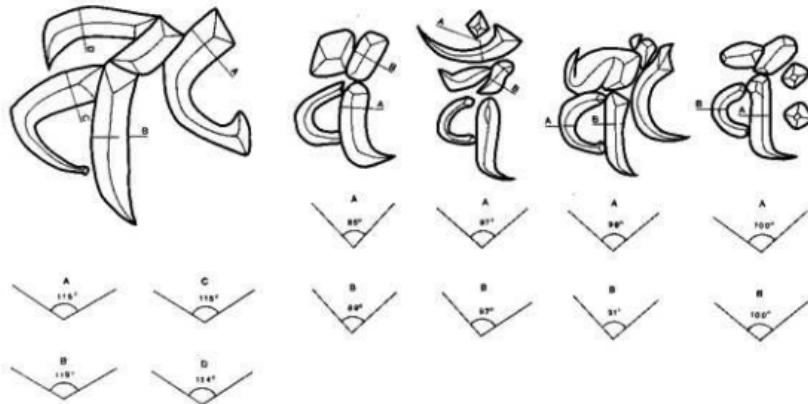
五輪塔の概説

五輪塔を含む石塔には、磨塔、宝塔、多宝塔、宝篋印塔、經塔、念佛塔、庚申塔、六地藏塔、無縫塔等々幾種類もあるが、殆どが墳墓であり、供養塔である。それ等は、権力や信仰の変遷に伴いながら、時代の推移と共に盛衰の道をたどる。仏教が伝ってから奈良時代までの信仰のあり方は、主として釈迦信仰であったため、釈迦像や舍利（釈迦の骨）を安置した仏塔（多層塔）や靈廟が造立される。平安期は密教の伝播と共に宝塔、多宝塔、五輪塔が新しい石塔として現われる。貴族的色彩の強い平安時代の五輪塔はおおらかで全体が古風である。鎌倉時代に近づく頃から念佛唱名の淨土宗、題目の日蓮宗が起こり、宋から臨濟、曹洞の禪宗が入り、武士や庶民にまで教化が進み、やがて宗派を越えて鎌倉期の近くに生まれる宝篋印塔と共に、二大主流となり雄大で洗練された五輪塔の爛熟期になる。南北朝は、鎌倉の型が固定化し、大形でどっしりした姿から温潤になってゆく。民間信仰は南北朝末期から目立ちはじめ、普根功德を死者のために行なう追善供養や、自分の死後を向向するための逆修供養は室町時代から末期の戦国期にかけての四百年間にわたり伝習となって、地蔵石仏、六地蔵が流行し、庶民的個人的な石塔、石仏が多く作られるようになる。それに伴い五輪塔をはじめ石造物は急激に小形化し、手法も退化し簡略化される。より低い階層の人々の造立が流行すると庶民的な一石五輪塔や四石を積みあげた五輪塔へと移り変わってゆく。室町中期から末期に60cm～75cmの二尺～二尺五寸前後の小五輪塔が盛んに造られ、天正、慶長の頃を頂点とし、江戸時代に入ると急激に減り始め、元禄頃で終り代って墓標の造立が盛んになる。江戸中期以降確立した寺請制度が庶民の石塔墓を普及させたのである。中世の葬制は、土葬と火葬の二形式が行われ、後者は武士或は寺院関係の者など特定の身分の者のみ行なわれていたという的一般的な見方である。

塔形と梵字

五輪塔の起因については諸説が多いが、真言密教により創始されたものといわれ、印度の古代思想における宇宙構成の根元を表わす五大要素（地・水・火・風・空）が万物を形成するという思想から梵字真言が成立し、五輪塔形式が確定されたともいわれている。この塔形は、下から地輪（基礎）は方形、水輪（塔身）は球形、火輪（屋蓋）は笠状、風輪（頂花）は半球状空輪（宝珠）は宝珠形からなるものをいう。五輪塔は五大思想に基づく五輪图形と説かれているので、下から地、水、火、風、空輪と呼ぶ呼び方と、建造物の塔婆として構成されているから、下から基礎、塔身、屋蓋、頂花、宝珠と呼ぶ呼び方がある。各輪を別々に造るのが本格であるが、空、風輪だけを一材で形成し、他を別材で造るのが普遍的に行われ、室町末期の一石五輪塔は、一材で文字を彫るのに都合よくして地輪をやや長く造っている。

各輪の四方に密教の大日體に基づいて、胎藏界大日如来や、金剛界大日如来が種子（梵字）で表現されている。東方発心門（キヤ、カ、ラ、バ、ア）、西方普提門（キャン、カン、ランパン、アン）、南方修行門（キャー、カー、ラー、バー、アー）、北方涅槃門（キャク、ラクバク、アク）の四門の種子を配するのが本格であり普遍的であるが、後に正面だけに東方発心門の五大種子を配するようになる。更に簡略して塚田遺跡で発掘された五輪塔のように水輪に各門の種子を配したり、東方発心門の一種子や、修行門の一・二種子を墨書きしたり、薬研形するようになり、更に進んで各輪が素面のものが一般的に造られるようになる。



輪組角度	神	化	輪組角度	神	化	輪組角度	神	化
117°-112°	平安時代	118°-112°	平成式と無い事用	113°-114°	室町時代	113°-114°	古体は力を失う。大きさも小さくなり。形が変	
116°-112°	鎌倉時代	115°-112°	古式で強調は無用	110°-112°	戦国時代	110°-112°	古体は力を失う。大きさも小さくなり。形が変	
114°-112°	南北朝時代	114°-112°	強調は力を失う。大きさも小さくなる。形が変	100°以下	後土元江代	100°以下	古体も大きさも形が變	古体

第46図 梵字の陰刻角と編年

ま　と　め

塙田遺跡の発掘調査に伴い、南西面から骨片、骨粉を含む土塊群と、内耳土器片、陶磁器の破片北宋錢、釘を含む鉄製遺物が検出され、室町時代後半、戦国期に比定される五輪塔が、最も多く散在し、基礎に反花が刻まれない簡素な無縫塔も認められたことから、廃寺址の存在を予測したのであるが実証する遺構を検出するには至らなかった。戦乱の中に領地を守り、多くの武士は殺世を余儀なくされ、農民は田畠を焼かれ、略奪をほしいままにされ、死と直面する武士や農民が末世の安樂、西方浄土に仏の救済を求め、各宗派を越えて五輪塔を墓塔、供養塔、更には、逆修供養塔として、造立した時代13世紀を上限に江戸期の陶器片が、出土しているところから下限は江戸時代までの土壤で中世の埋め墓ではなかったかと推考する。当遺跡から検出された石造物を含む遺物の推定年代と隣接する集落の寺の建立期、中興期に何らかのかかわりがあると思われ、今後、更に考察を深めたい。大藏の臨済宗営雲山少林寺（弘安五年1282東漸寺空外人和尚開山、天正10年1582織田信長の兵火に罹り、文禄二年1593鳳巣座元再建）。藤田には大永三年（1523）創立曹洞宗正覚寺末藤田山躰光寺。東向に向宗同末の金滝山信光寺（永正二年1505心叟和尚伽藍再建、第子玄桃和尚開山し万治二年（1659）焼失し、享保年間九世戒嚴和尚復興、小倉は慶長三年（1598）建立の寂光山妙觀寺、文明年間（1469～1486）日蓮宗に改宗し永正六年（1509）開山した日蓮宗見榮山見本寺がそれで、15世紀から16世紀に創立或は再建されているのである。

参考資料

- 近江の石造美術（2） 田岡香逸著
淨光寺五輪塔修理工事報告書（神奈川県）淨光明寺
石塔の形式から見た津具盆地 岡崎石造美術研究所
日向畠遺跡 上田市真田町教育委員会
川内市史石塔編 鹿児島県川内市
おさき墓地石塔碑群 熊本県教育委員会
蓮華寺跡相良頤景館跡 熊本県教育委員会
石造美術入門 川勝政太郎 社会思想社
葬送儀礼の民俗 佐藤米司著 岩崎美術社

まとめ

土器類

縄文土器

発掘調査B区域内の南西部（第31図）は二度に亘る田普清が行われており、第一層耕作土、第二層黒褐色土第三層褐色土に大別されるが、一号住居址が検出された第三層は黄褐色混じりの赤褐色土、二号住居址が確認された第三層は暗褐色土、土壤域は明黄褐色土である。

分布状態は、縄文前期中葉（黒浜式）（第47図No.1～No.3）は1号住居址が確認された区域から検出された。この期の土器は、积迦堂遺跡と大泉村で採取され、須玉町でも桑原南遺跡から前期初頭の土器が発掘されている。同区域から諸磯C式に比定される土器片（第47図No.4～No.13）も検出された。No.16は十三普提式土器といわれるものであるが、ここでは諸磯C式の一類として把えられよう。この区域の第二層、第三層から検出された土器の大半を諸磯C式が占める。

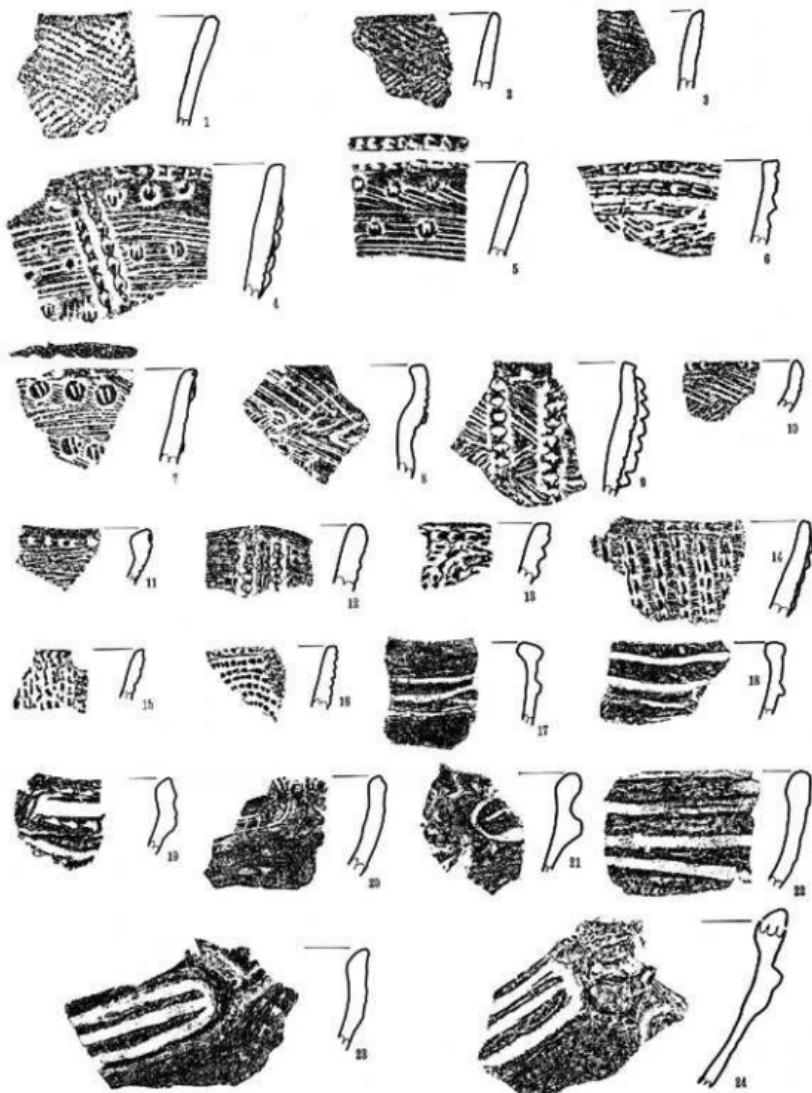
2号住居址の黒褐色の覆土から検出された土器は、縄文後期後半に比定され、加賀利B式以降に位置づけておきたい。関東でいう曾谷式又は安行I式に平行するものであろう。

従来県内で余り知られなかったものであるが、最近では、大泉村の金生遺跡、高根町の青木遺跡等で類例が発見されている。

これらの縄文土器は比較的狭隘な区域の覆土、或は表土精査中に散布しているものを採集したもので、遺構は耕作によって破壊されたか、当遺構全域が緩い傾斜の地層で、大小の角礫や円礫が混入していることから、土石が流出し、遺構も、それによって消滅してしまったものか今後検討する必要があると思われる。

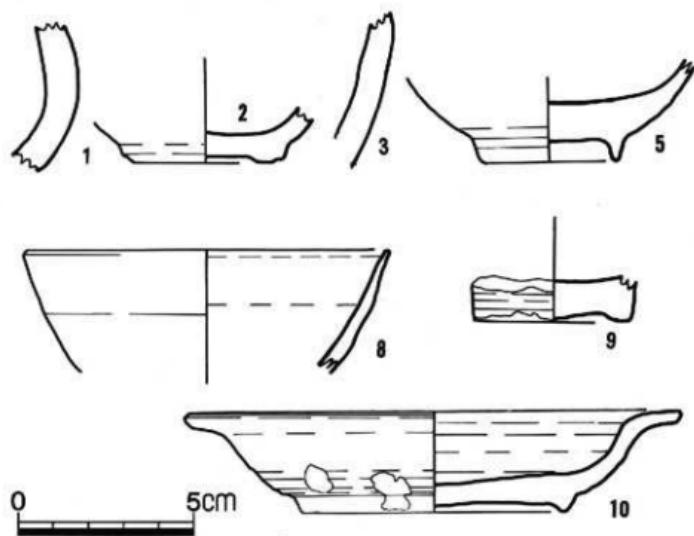
引用参考文献

1. 花鳥山石器時代遺跡報告書 八代町誌 橋口清之
2. 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第4集、第5集
高井東遺跡 埼玉県教育委員会 昭和50年3月
3. 日本歴史地図原始古代篇（上）柏書房 1982
4. 大山柏、竹下次作、井出佐重
山梨県日野春村長坂上条発掘調査報告書 史前学雑誌 13—3

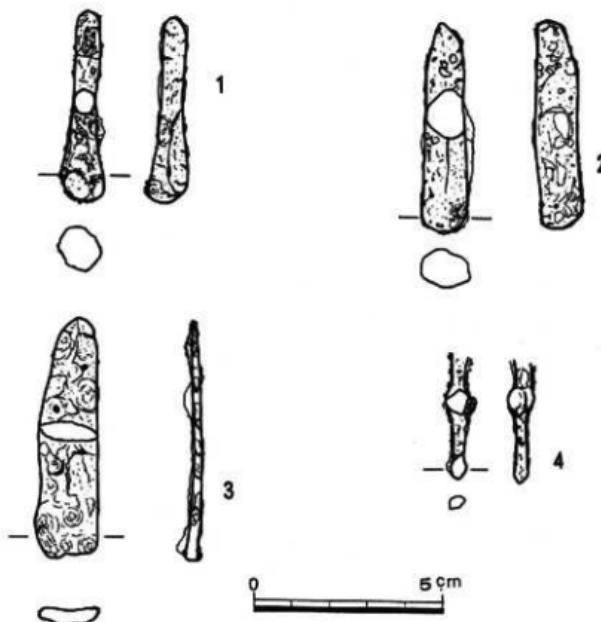


第47図 繩文土器拓影

0 5cm



第48図 陶器



第49図 鉄器

陶磁器（カラー図版1）

1. 四耳壺片 13世紀代につくられ、灰釉で釉が安定せず、発泡している。（1号住居表探）
2. 天目茶碗底部 14世紀前半の半地下式の窯で焼かれた窓窯IV期前半に比定され、須恵器の削り出し高台出現した最初のころのものである。（土壌南表探）
3. 瓶子片 14世紀代で、三本の条がひかれ、灰釉である（トレンチ100-35~40内）
4. 天目茶碗口縁部片 中国製で、胎土は炻器質で、14世紀代のものと思われる。
（調査区域B区北東部表土排除中検出）
5. 天目茶碗腹部 15世紀初頭で瀬戸製である。窓窯IV期前半に当ると思われる。腰部から下部は化粧掛けを施し、削り出し高台で、胎土良好（2号住居址東南の土壌覆土中）
6. 天目茶碗底部 15世紀中頃で、窓窯IV期後半に当り、削り出し高台である。高台端までガラス質の釉が流れおちている。（土壌11表土排除中検出）
7. 合子片 灰釉で小蓮弁文が肩から胴部に描かれている。鎌倉時代末（土壌南表土排除中）
8. 山茶碗片 白瓷系陶器（平安時代の灰釉を施した陶器を白瓷という）で、窓跡が山中にあり、焼棄された椀、皿などが山肌にガラガラ露出している様相からこの名が出た。
大東I式に比定され、西暦1400年代前後に相当する。山茶碗の中でも最後の時期に相当する。（1号住居カマド内）
9. 天目茶碗底部 17世紀初頭で登り窓初頭に当り、高台の削りにシャープさが見られない。
総織部と同時期のものである。（土壌南表土排除中）
10. 緑釉皿 総織部で元和年間既に17世紀初頭に比定される。銅緑釉をかけ、釉下に線刻や花彫刻などによる文様が施されている。鉢、皿、香炉などがある。
（土壌の西グリット110-50内表探）
11. 白磁の皿 中国製 17世紀 （土壌南表探）
12. 中国製青磁片 （グリット100-40内表探）
13. 14 江戸期の鉢釉で碗の底部と腰部

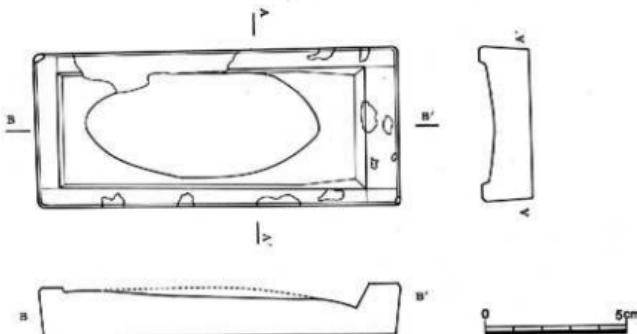
以上、長い年代間を持つ陶器の検出は、往時、相当の権力や財力がなければ所有不可能な陶器であり、調査地域B区の土壌周辺から多く検出されたことは意義が深いと思われる。

陶器類判別 愛知県陶磁資料館 井上喜久男氏

参考資料 美濃焼 田口昭二著 ニュー・サイエンス社

鉄器

B区発掘調査に伴い出土した鉄器は4本で、腐蝕がはげしく、長さ5.4cm 最大径1.2cm の鉄釘と思われる鉄器が土壌No17の表土より20cm 下に並べられた石の下から出土している。（第49図No.2）長さ4.9cm、最大径1.0cm の鉄器（第49図No.1）は、土壌No35から出土したが、腐蝕がひどく、角釘と思われる。土壌域の西側での表土除去中、検出されたのが小ぶりの鉄器で、長さ3.3cm、幅は3cm、厚さ2cmで、中断された角釘の先端部と考察される。（第49図No.4）以上3点はいずれも頭部が欠損している。残る1点は、長さ6.4cm、幅1.6cm、厚さ2~3cmの鉄器で、刀子と思われる形状を呈して1号住居址周辺の表土除去中、ニガ下より検出されている。（第49図No.3）

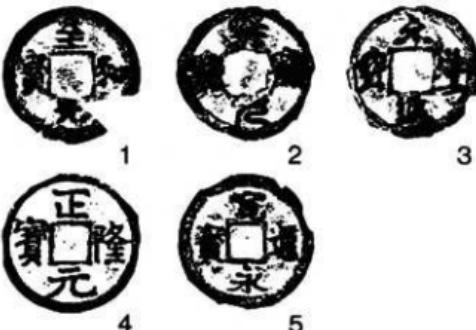


第50図 観

観（第50図 1）
長さ13cm、幅5.5cm、高さ1.8cmの砂岩（粘盤岩に近い）製の方形観である。各辺の縁は面取りされ、上面の縁部に巾4.2mm×長さ10.6mmの割りつけがなされた線状の痕跡が確認される。首部の縁は他に比べて巾が広い。池部は岡部から緩かに落ち込み、首部の内側縁から斜め28°の切り込みが池部の底をつくる。岡部の磨耗の度合から、相当長い間、利用されていた事がうかがわれる。中央からやや左寄りに墨を摩る癖がある人物が所有していたとも考えられる。上面の縁部の一部と外周及び底部全面は、河岸段丘上の二次堆積の地山に包含されている無機物が粘着している。津金伸二

古銭

- ①至和元宝・（北宋）、至和二年（1055年）②熙寧元宝・（北宋）熙寧元年（1068年）③元豐通宝・（北宋）元豐元年（1078年）此銭は西京阜財監、衛州蔡陽監、永興軍、華州、陝府、絳州垣曲監、舒州同安監、徽州神泉監、興國軍富民監、衡州熙寧監、鄂州寶泉監、江州廣寧監、池州永豐監、饒州永平監、建州豊國監、沼州永通監、惠州阜民監の十七銭監で鑄造された。④正隆元宝・（金）、正隆元年（1157年）⑤寛永通宝・豈後國直入郡竹田古町鑄、寛永十四年（1637年）鑄地に山城国京都説がある。（以上は、奈良県立橿原公苑考古博物館の大和考古資料目録館蔵古銭資料第2集を参考にした。）津金義尚



第51図 古銭

(3) まとめ

塚田跡は斑山の南麓から南西に形成された尾根の東側の低位河岸段丘上に立地し、本遺跡の北と西は、この尾根によって視界が遮られる。下小倉と大藏の境をなす峠から藤田へ到る町道の東は急崖となり、町田という小字名を残す水田が塙川沿いに広がる。緩傾斜面をなす調査地域の内堅穴及びピット群を検出した北東部を中心に、町道沿いの南北50~60m、東西40~50mの区域は、流水によるものと思われる礫が散在し、所々に巨岩が埋まり、巨岩は南東部程度に立ち礫は少ない。△区の表上排除中に僅かな遺物の出土にとどまり、住居址や、据立柱建物遺構の柱穴のような性格の把捉が容易な遺構は検出されず、抜根と思われるピット群と、堅穴が発見された。

B区では、鎌倉時代に比定される遺物を伴った住居址が一軒と、平安時代後期後半住居址が土壇群の南から検出されたが、わずかな壁の立ち上りを確認しただけで、住居址のプランは把握出来なかった。

B区、特に南西部には、室町時代末期と推定される五輪塔が田の畦や配水溝脇におかれ、田を区割する石垣に利用されていた。南東部一区割の呼称が「コツ・骨」という小字名をもち、この「コツ」のすぐ西から70基以上の土壇群が検出された。

土壇群が所在する区域の確認面には、調査区域全体に認められた大小の礫が殆どなく、土壇群の東で巨岩が2ヶ、土壇の一部を埋めている。露出部分だけで1.7m×1.6mと、半分は調査区域外に残るもの1.8m×1mが測られ、人為的な投入でなく流水による埋没と考えたい。

五輪塔の地輪に納骨穴があることと、土壇内から骨片や骨粉が検出されていること、土壇内から天日茶碗の一部が発見され、釘と思われる鉄器が出土している。北宋銭や、硯のように極めて身辺なものが確認面に近い層から検出されていること等、特殊な土壇群として、中世墳墓の形態を比較検討しながら研究をすすめたい。



1. 四耳壺片



2. 天目茶碗部



3. 瓶子片



4. 天目茶碗口緣部片



5. 天目茶碗腰部



6. 天目茶碗底部



7. 合子片



8. 山茶碗片



9. 天目茶碗底部



10. 緑釉皿



11. 白磁皿



12. 中国製青磁片



中尾城遠景小手指板（西方）より



1. 若神子古城西南西より a 中尾城 b 獅子吼城 c 瑞牆山 d 金峯山



2. 東方対岸 明野村上神取より



1. 中尾城より北方 a 源太ヶ城 b 旭山砦



2. 中尾城より北東 a 斑山廃坑 b 三枝氏家敷 c 大渡の烽火台 d 獅子吼城



1. 中尾城より南方 a 塚田遺跡 b 大豆生田砦 d 新府城



2. 中尾城より南西 a 若神子城（北城） b （古城） c （南城） d 正覚寺



1. 斑山廐坑（坑内）

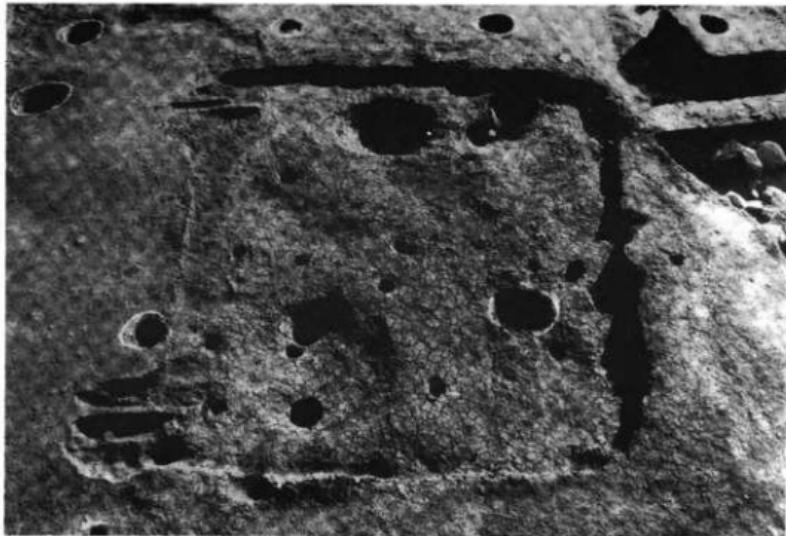


2. 斑山廐坑（坑口）

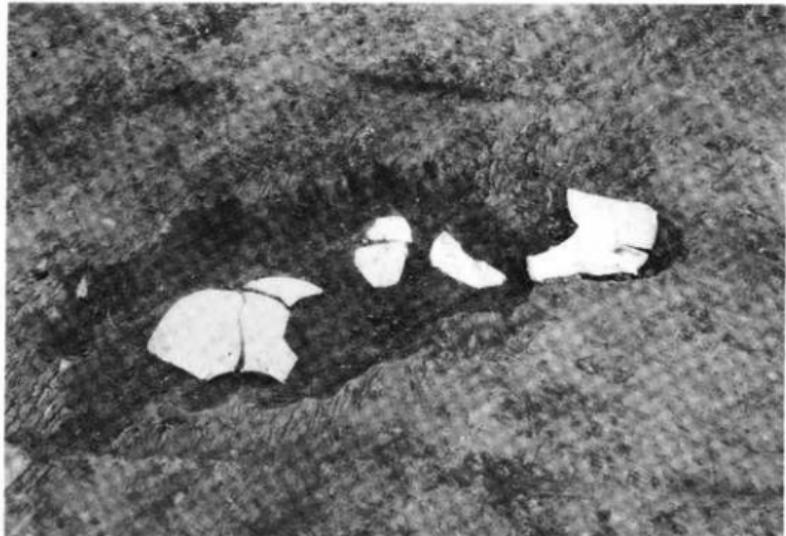
図版 6



丸茂種市氏藏写真



1. 1号住居址（北より）

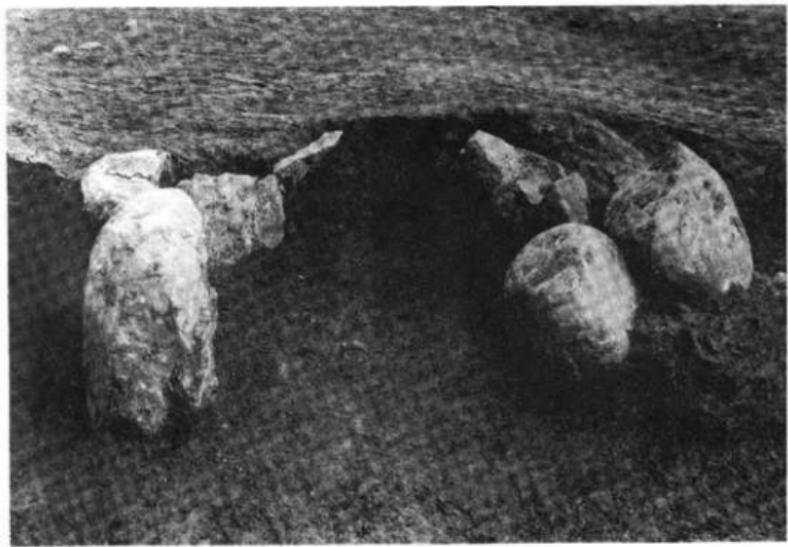


2. 1号住居址遺物出土状態

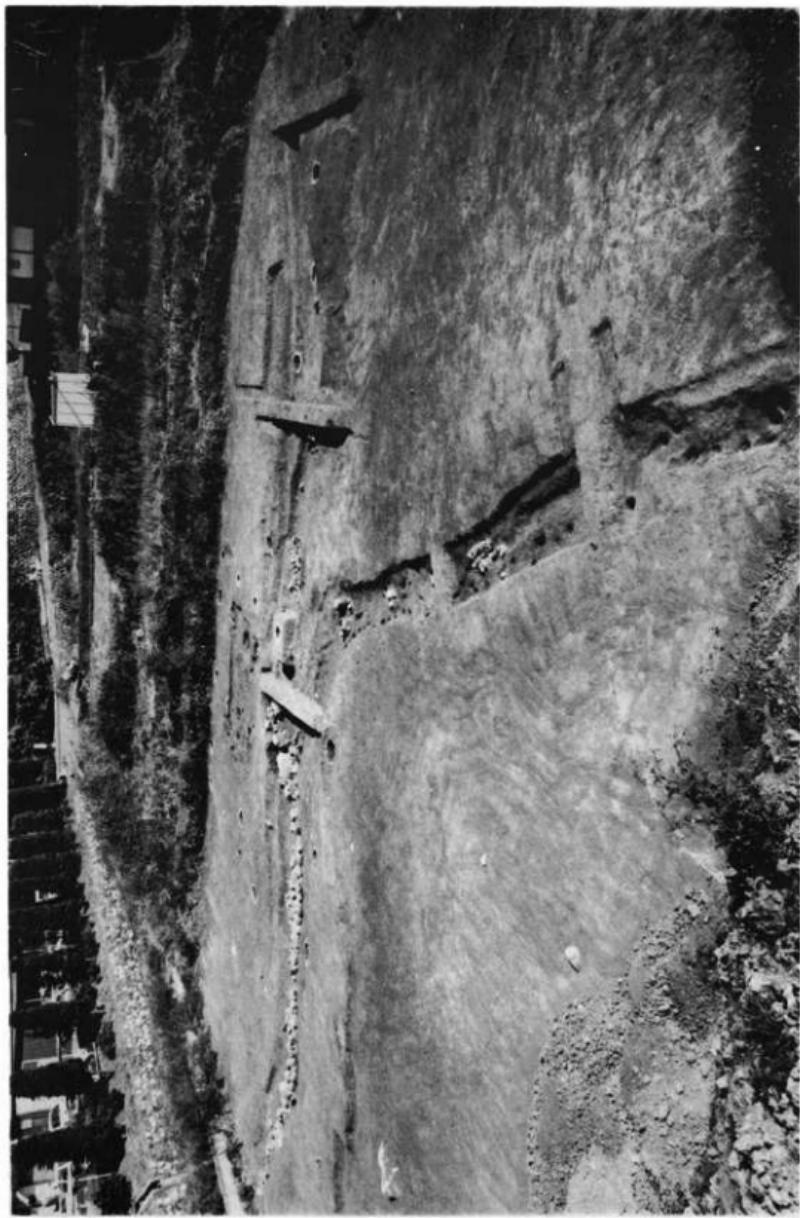
図版 8



1. 2 号 住 居 址 (西から)



2. 2 号 住 居 址 カ マ ド



1号住居址、1号掘立柱建物遺構 1～3号溝（西から）



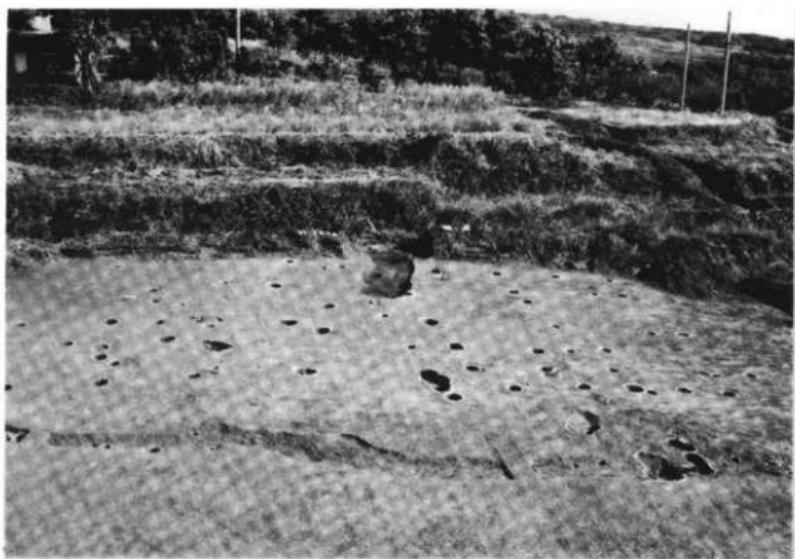
1. 発掘風景（北東より） 1号住居址・1号掘立柱建物遺構 1号溝附近



2. 発掘風景（南西より） 1号溝附近



1. 2号掘立柱建物遺構（西より）柱穴上に立つ須玉中学生徒



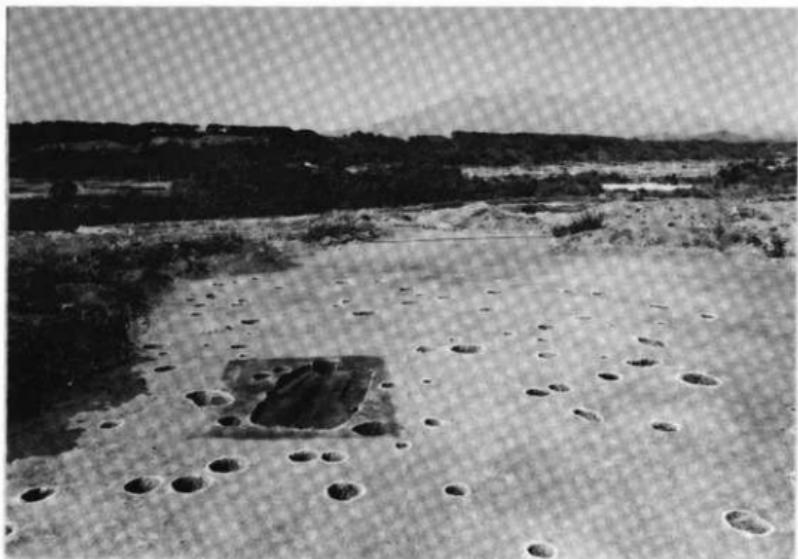
2. 3号掘立柱建物遺構及び3号竪穴遺構附近（西より）



1. 4号掘立柱建物遺構・3号井戸・南堀り附近（北より）



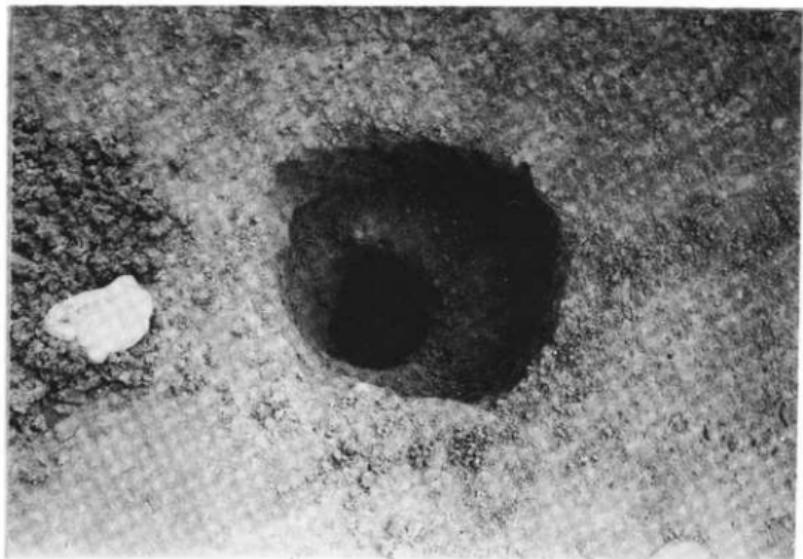
2. 3号井戸・2号住居址・1号堅穴遺構及び掘立群（北東より）



1. 掘立群及び1号堅穴遺構より八ヶ岳及び南麓台地を望む（南東より）



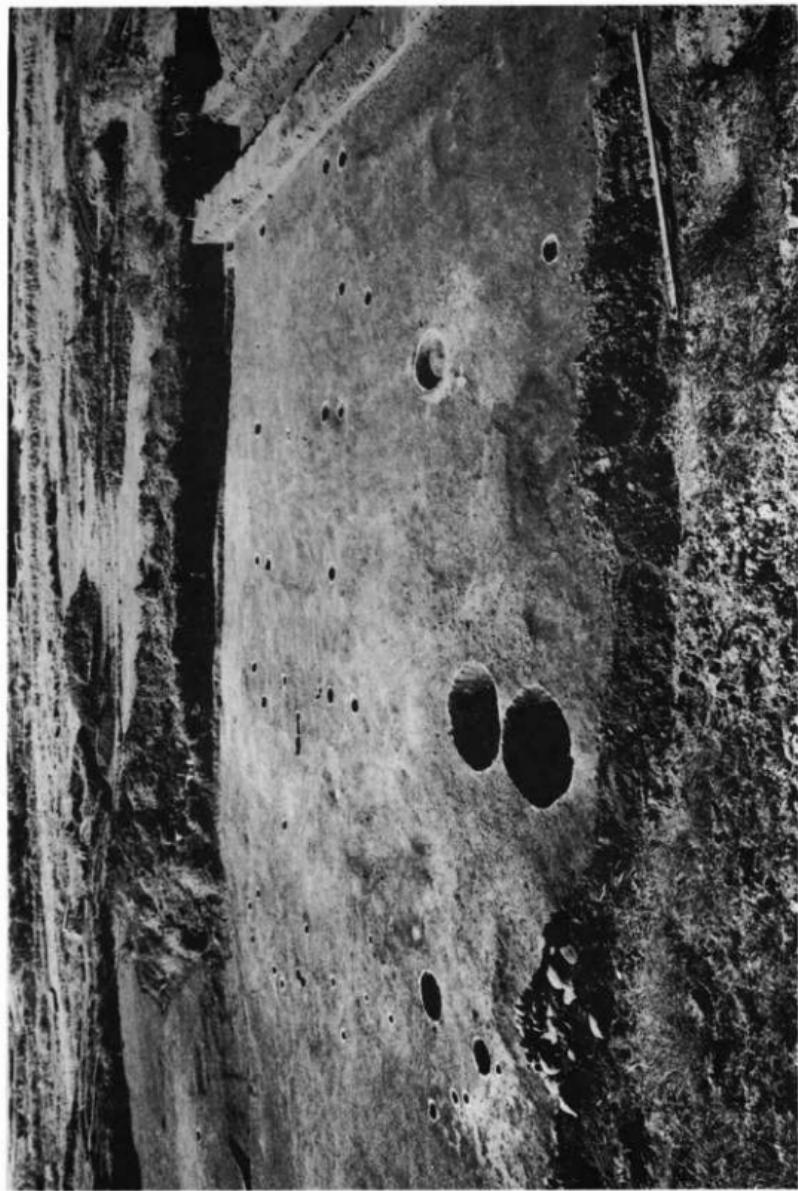
2. 掘立群柱穴発掘風景（南より）



1. 5号掘立柱建物遺構 P-32の柱痕



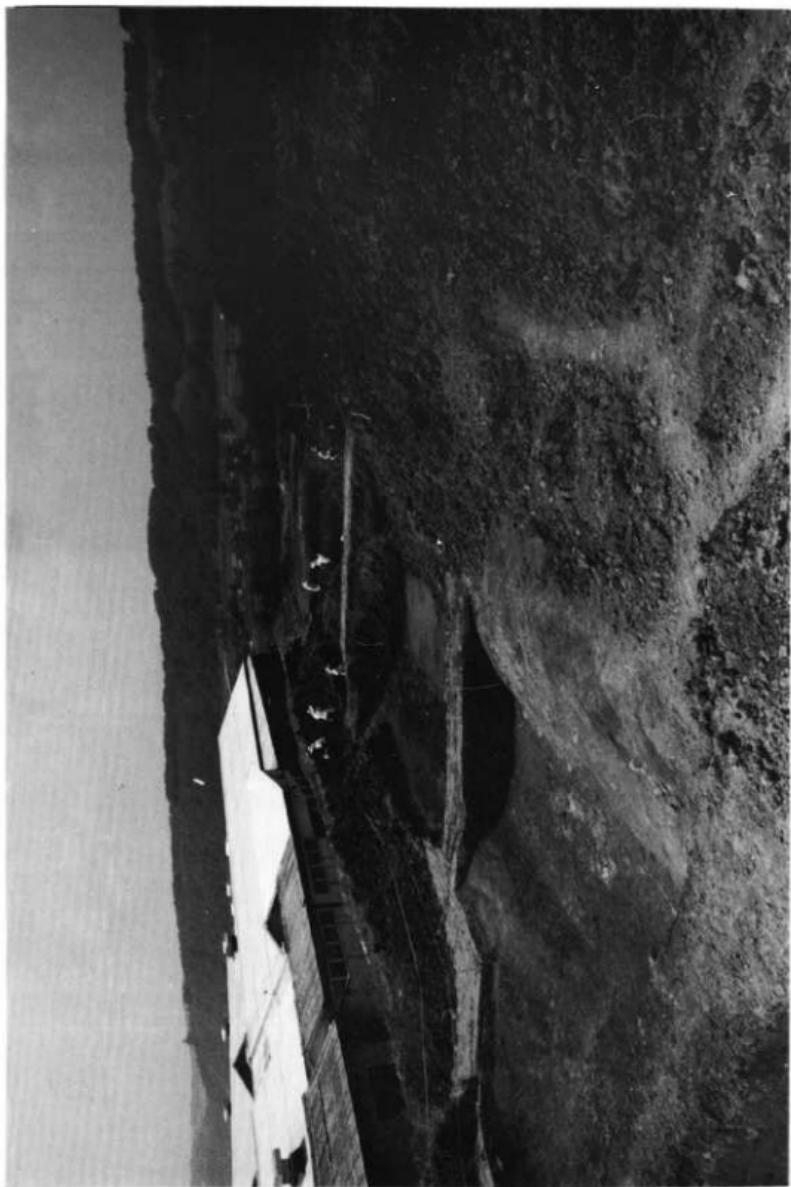
2. 4~8号掘立柱建物遺構（西より）



3. 9号掘立柱建物遺構・1—2号井戸・7号溝（東より）



8号掘立柱建物遺構附近から斑山を望む（南より）



北堀（北西より）



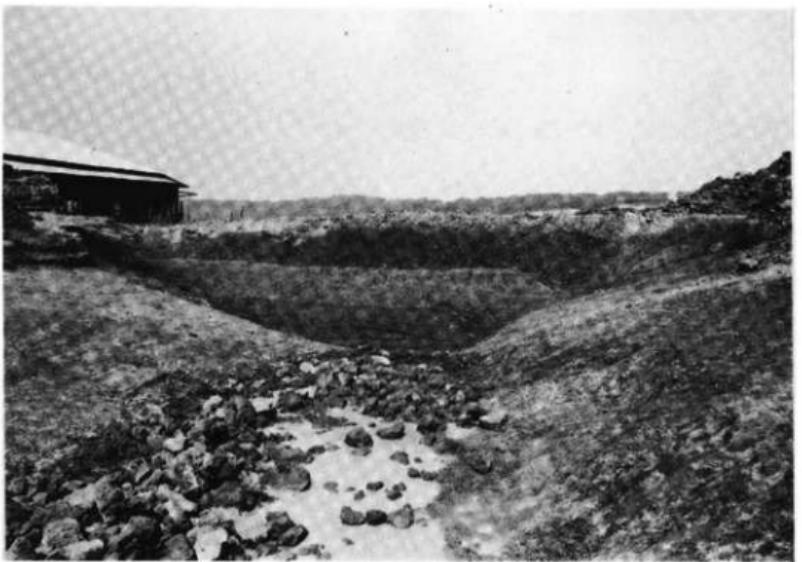
1. 北堀東（北より）



2. 北堀発掘風景（北東より）

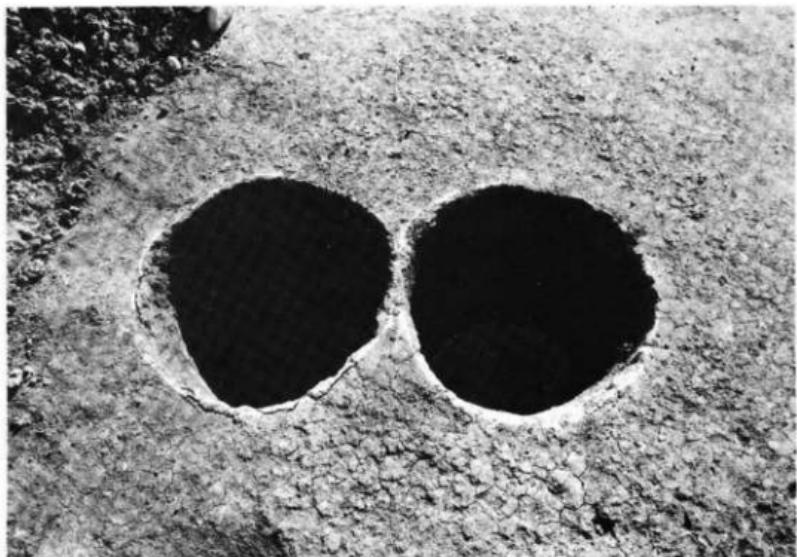


1. 北堀発掘風景（北より）



2. 北 堀 土 屑 （東より）

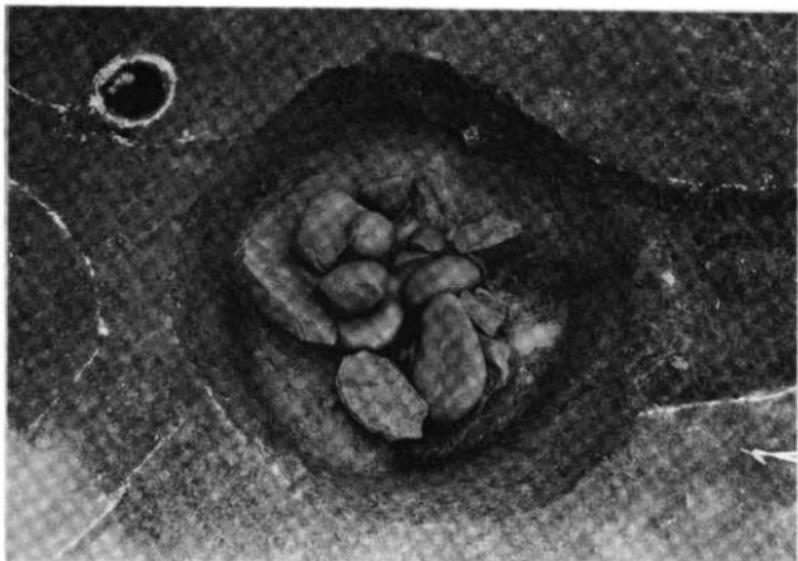
図版20



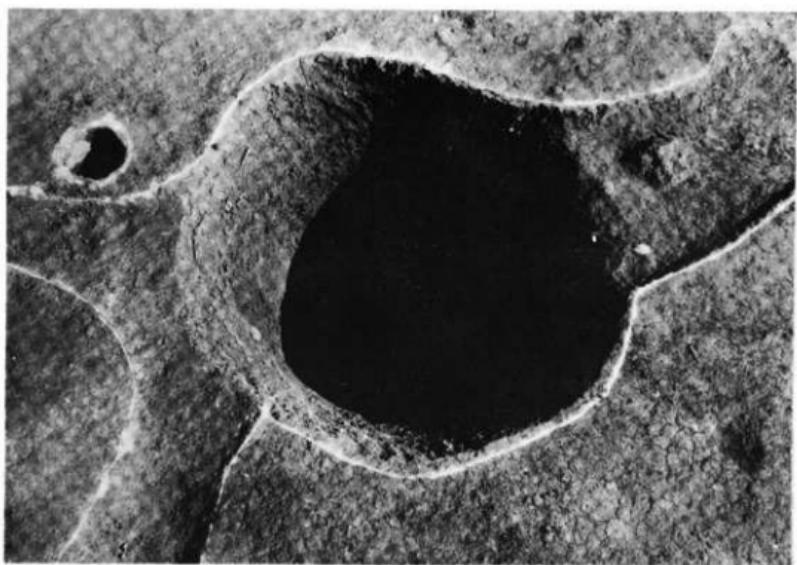
1. 1～2号井戸（北より）



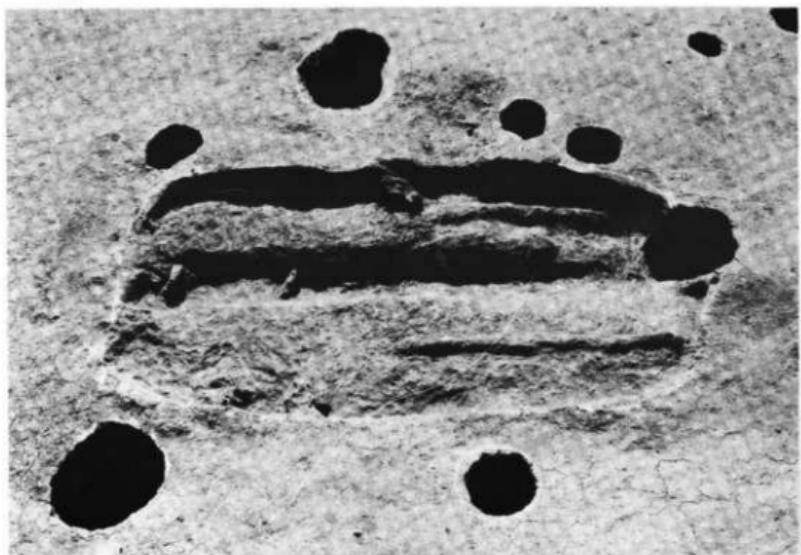
2. 1～2号井戸 発掘スタッフ（南より）



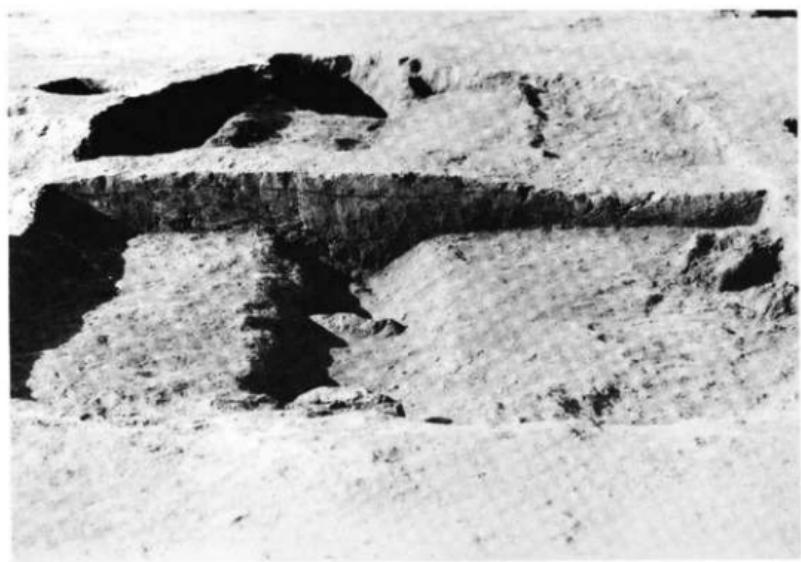
1. 3号井戸集石状況（西より）



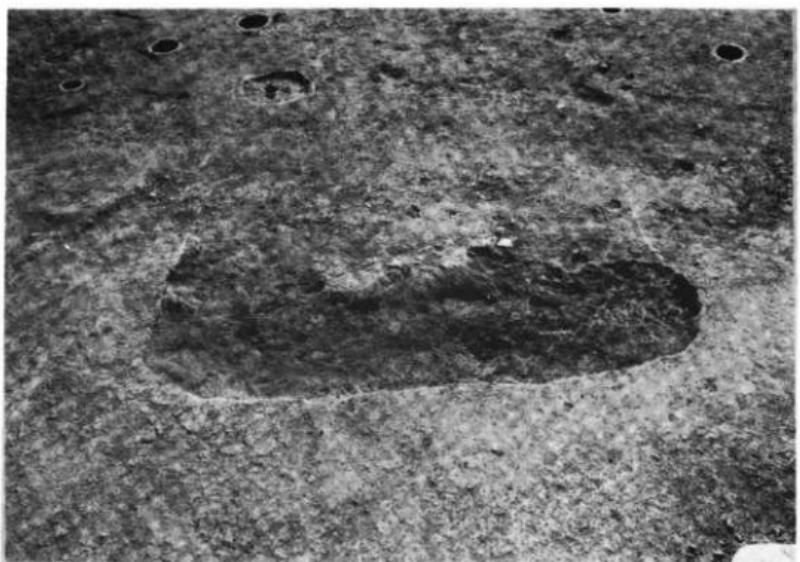
2. 3号井戸（西より）



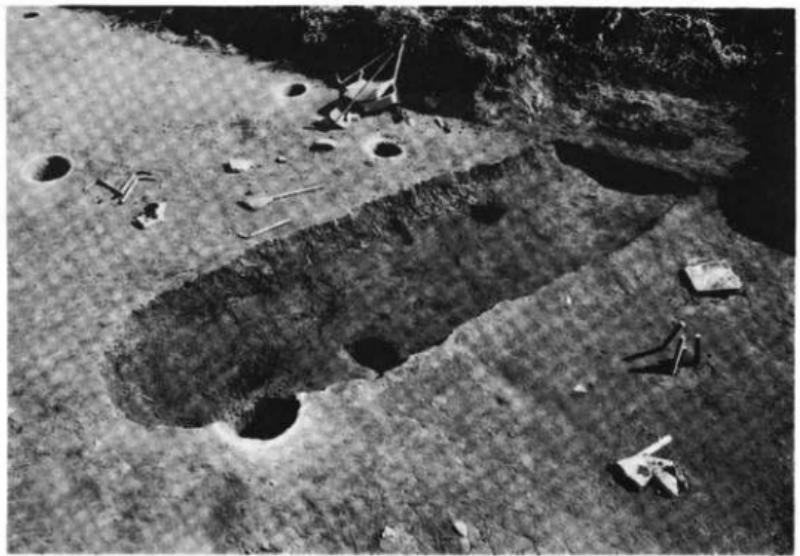
1. 1号堅穴遺構（北より）



2. 1号堅穴遺構土層（東より）



1. 2号竪穴遺構（北より）



2. 3号竪穴遺構（南西より）



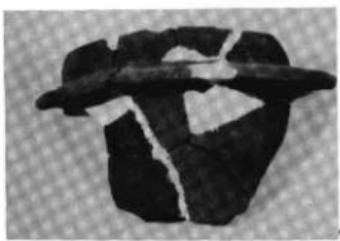
1. 発掘風景B区西、南北トレンチ（北より）



2. 発掘風景B区斜面トレンチ（東より）



1. 1号住居址出土遗物

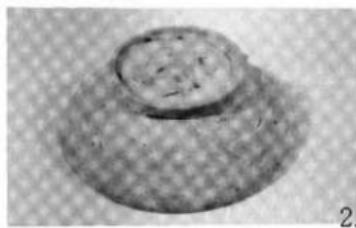


1.

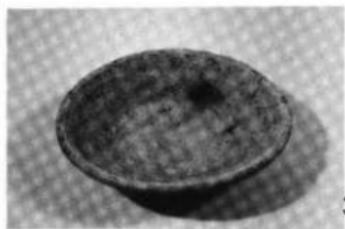
1. 灰釉短颈壶 2. 瓶釜



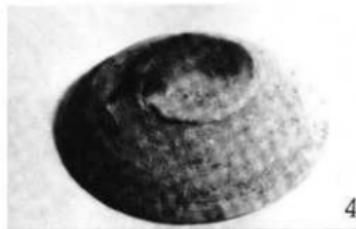
1.



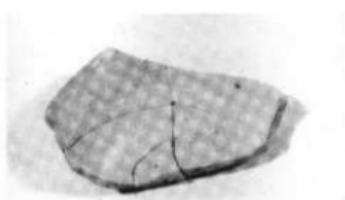
2.



3.



4.



5.

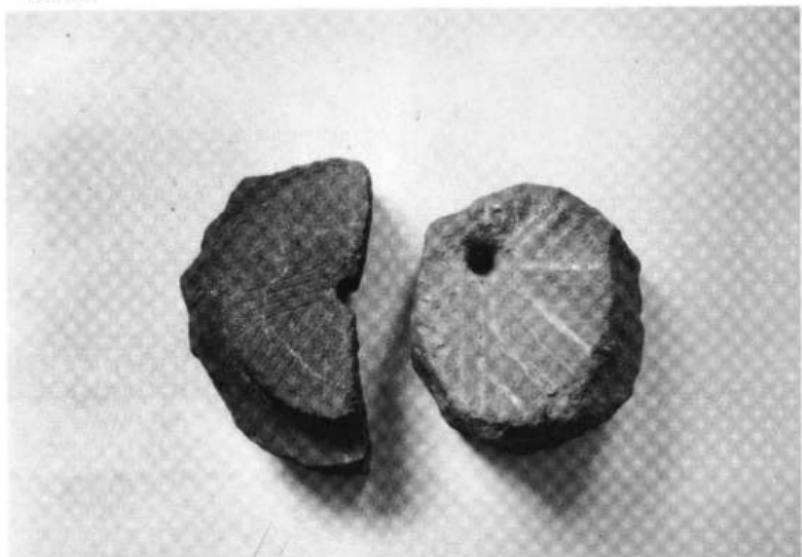


6.

2. 2号住居址出土遗物

1. 灰釉高台付坏 2. 土师质土器皿

3. 环



1. 石臼 a:6号据立柱建物遺構(p-41)出土。b:3号井戸出土



2. 発掘調査参加者



1. 塚田遺跡遠景（東方明野村より）



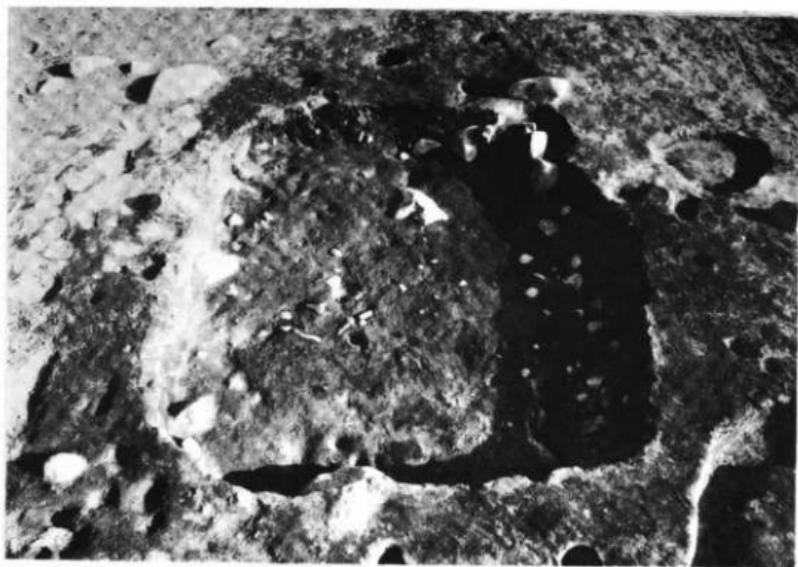
2. 五輪塔散在状況（人物附近、南西より）



1. 発掘前集めた五輪塔群（南より）



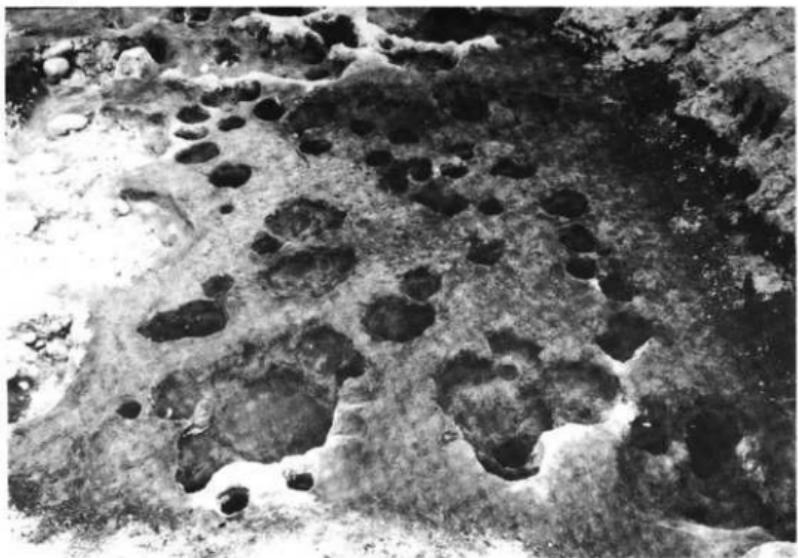
2. 1号住居址（実測作業中）及び茅ヶ岳と西麓（西より）



1. 1号住居址（西より）



2. 1号住居址 カマド



1. 2 号 住 居 址 (南より)



2. 2 号 住 居 址 (西より)



1. 北トレンチ発掘風景（南西より）



2. 壓穴群発掘風景（南より）



1. 壊 穴・群（北西より）



2. 土 塚 群 発掘前（西より）



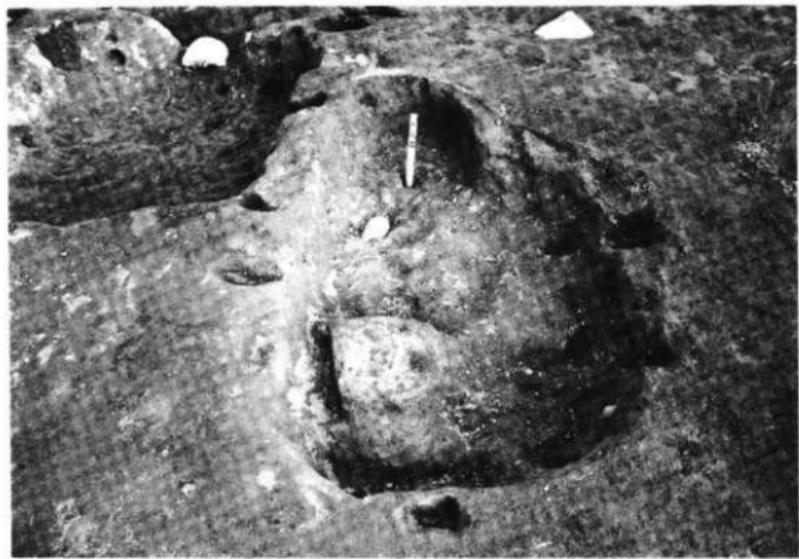
2. 土壌群発掘風景（東より）



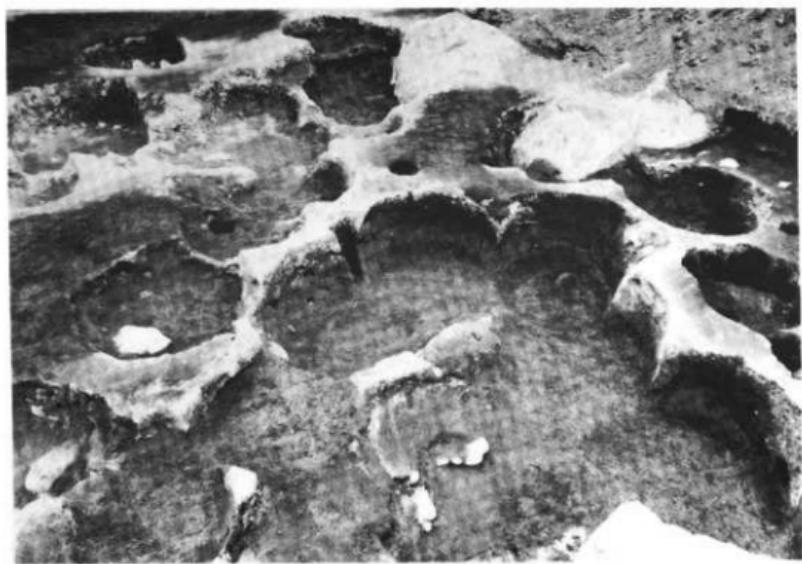
1. 土壌群発掘風景（東より）



1. 土 塊



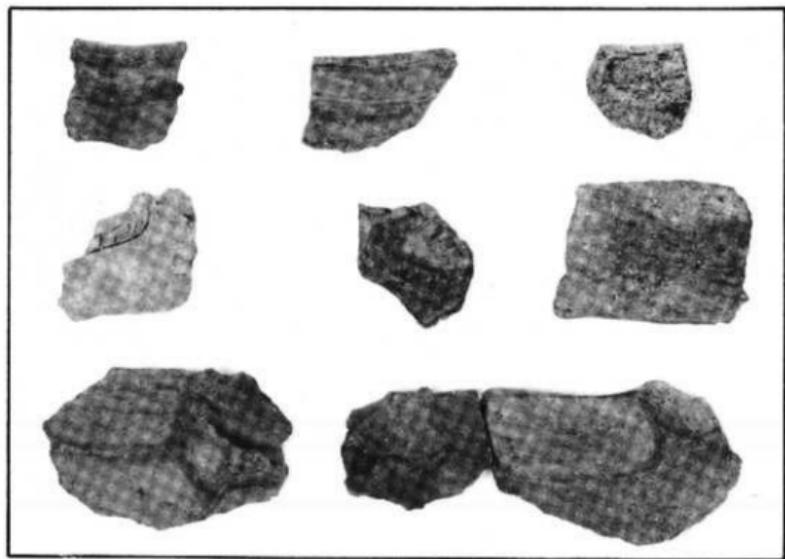
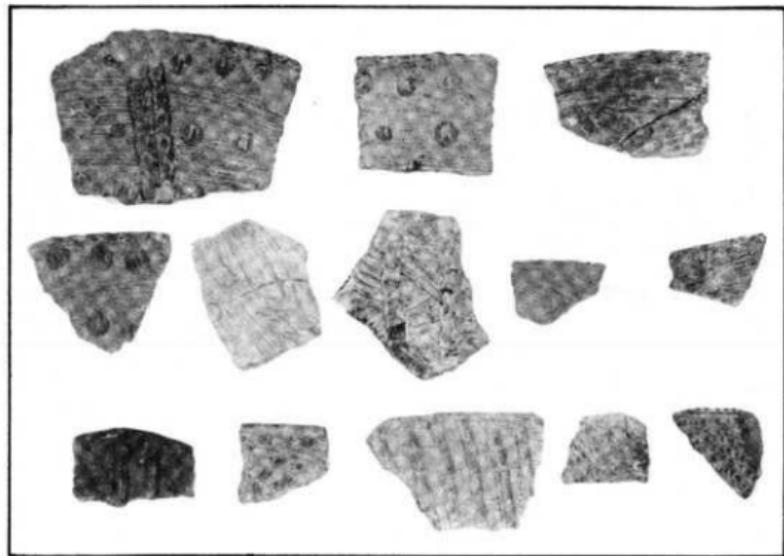
2. 土 塊



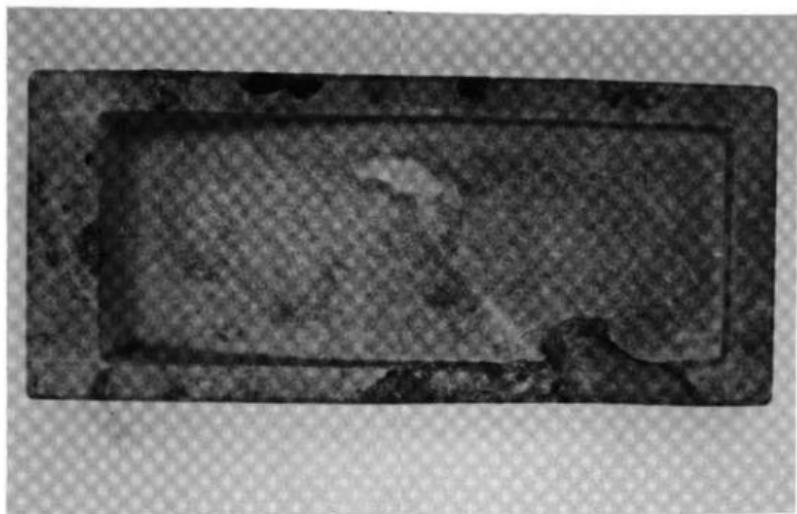
1. 土 様



2. 土壌群及び 2 号住居址全景（南西より）



2. 出土遺物縄文時代後期後半



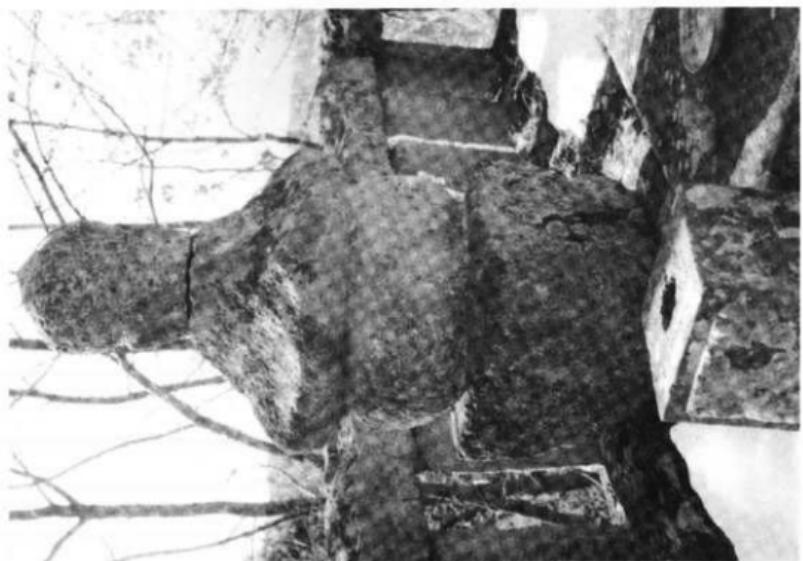
1. 出土遺物 砚



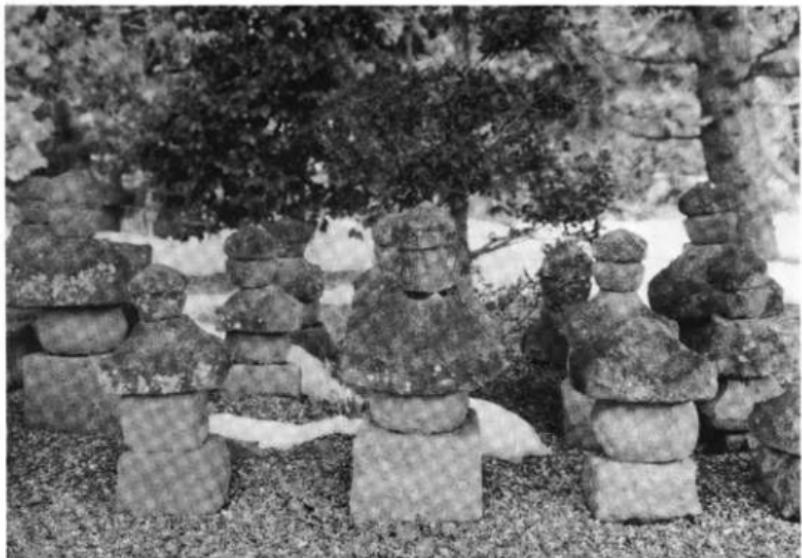
2. 出土遺物 五輪塔



1. 正覚寺、五輪塔



2. 赤岡氏、五輪塔



1. 長泉寺、五輪塔



2. 塩川病院南、五輪塔

発掘調査参加者



昭和59年3月25日 印 刷

昭和59年3月31日 発 行

須玉町埋蔵文化財調査報告第2集

中尾城遺跡・塚田遺跡

発行所 须玉町教育委员会

